建築と社會

滿洲建築

第十六輯
第十一號

日本建築協會

昭和八年
十一月一日

登録 OHNO SHUTTER PATENTE 商標

日米特許一二個・實用新案登錄四六個併用

大野式防火捲上ケ戸

〔特許大野式シヤッター〕

主要製品

大野式シヤッター
大野式ルーブルシヤッター
大野式工場用軸承
大野式轉子入軸筐
大野式轉子入戸車
大野式廻轉軸抵抗測定機
各種防火扉

日英米佛特許三一個・實用新案五九個併用

特許オオニサッシ

受托營業

合資會社 大野製作所

東京市芝區三田四國町二番地・電話三田(45)三七三七 三七三八

取付出張員詰所・大阪市此花區上福島中二・電話福島(45)五八八

會　　告

懸賞募集大阪市の「シビツク・センター」計畫理想案當選發表

第　壹　等　大阪市東區道修町大阪市電氣局高速鐵道第二建築事務所建築係

山　口　　潔
小　島　初　三
奥　村　　敦

第　貳　等　東京市神田區錦町一丁目七番地

井　上　雅　男
小　野　武　雄

第　參　等　東京市澁谷區代官山アパート三三ノ三一〇

羽　石　　渡

佳作第壹席　東京市大森區馬込町西四丁目二九八三番地

木　村　平　五　郎

佳作第貳席　東京市中野區桃園三番地

網　戸　武　夫

佳作第參席　大阪市西區土佐堀通一丁目

竹　內　成　夫
和　田　　登

「續學校建築圖集」刊行豫告

各方面の盡力を得て最近二三年間に竣工した學校建築の資料を蒐めたところ、大•中•小•學校の代表的のもの 40 餘校に上つたのでこれらを纏めて編纂刊行することにした、發行は本月下旬の豫定である、前回發行したる本集は非常なる好評を得て三版を重ねたがその姉妹編である本書も共に會員諸君の座右に備へられんことを望み且つ御知友へ御薦めを乞ふ。

1. 大　さ　　四六倍版　　200頁
1. 定　價　　1.00圓　　送料 14錢
1. 割　引　會員　定價の2割引、賛助員　同1割引

「市街地建築物法令」第三版刊行豫告

本書は本年5月出版するや忽ち初版再版ともに賣切となつたもので其後多數の注文があるので今回三版を刊行するものである。

1. 大　さ　　菊半裁　　330頁
1. 定　價　　50錢　　送料 6錢
1. 割引　會員　定價の2割引、賛助員　同1割引

昭和 8 年 11 月

社團法人 **日本建築協會**

「建築と社會」表紙圖案懸賞募集

本會發行の雜誌「建築と社會」昭和9年度用の表紙圖案を下記の規定によりまして懸賞募集致します

1 題號　表紙は「 建築と社會　第十七輯　第　號　日本建築協會　昭和九年一月一日 」と適當に配置し「 建築と社會 」の題字は成るべく上部に左書きのこと
表紙の大さは四六倍版（竪26糎横19糎）

1 背　背の意匠をも添附すること　背の厚さは0.7糎　「 建築と社會　號數を表す數字　特輯題目 」　等の文字を適當に配置すること

1 着色　二色（紙色の外）

1 圖面　原圖紙を用ひ現寸とす

1 意匠　隨意なるも本誌の特質を表現するに足るもの、但し他人の意匠を剽竊せるものと認めたるときは審査せず

1 賞金　1等　賞牌　副賞30圓　1名
2等　賞牌　副賞20圓　1名
3等　賞牌　副賞10圓　1名
佳作　賞牌　若干名

1 締切　昭和8年12月1日正午締切　郵送のものも當日正午到着するを要す

1 版權　入選圖案の版權は本會の所有とす　入選圖案は修正して用ふる事あるべし

1 審査　審査員　石川純一郎氏
武田五一氏
瀧澤眞弓氏
南信氏
村野藤吾氏
編輯常務
（50音順）

1 資格　應募者は本協會會員に限る

1 暗號　圖面には暗號を附し、別用紙に暗號住所及氏名を記入したるものを別封書として差出すこと

1 發表　「建築と社會」第17輯第1號誌上にて發表す

1 圖案　應募圖案は一切返却せず

昭和8年11月

社團法人　日本建築協會

建築と社會

第16輯第11號　昭和8年11月發行

滿洲建築

目　次

大阪市の「シビツク•センター」計畫理想案懸賞當選案 ‥ ‥ ‥ ‥ (2)

同審査概評‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ (14)

四會聯合建築大會と滿鮮の見學 ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ 松室重光 (15)

滿洲に於ける軍部の建築 ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ 內藤太郎 (41)

滿洲の建築界を顧て內地建築家に望む ‥ ‥ ‥ ‥ 岡大路 (42)
＝附工業移民論＝

滿洲古建築の展望 ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ 村田治郎 (51)

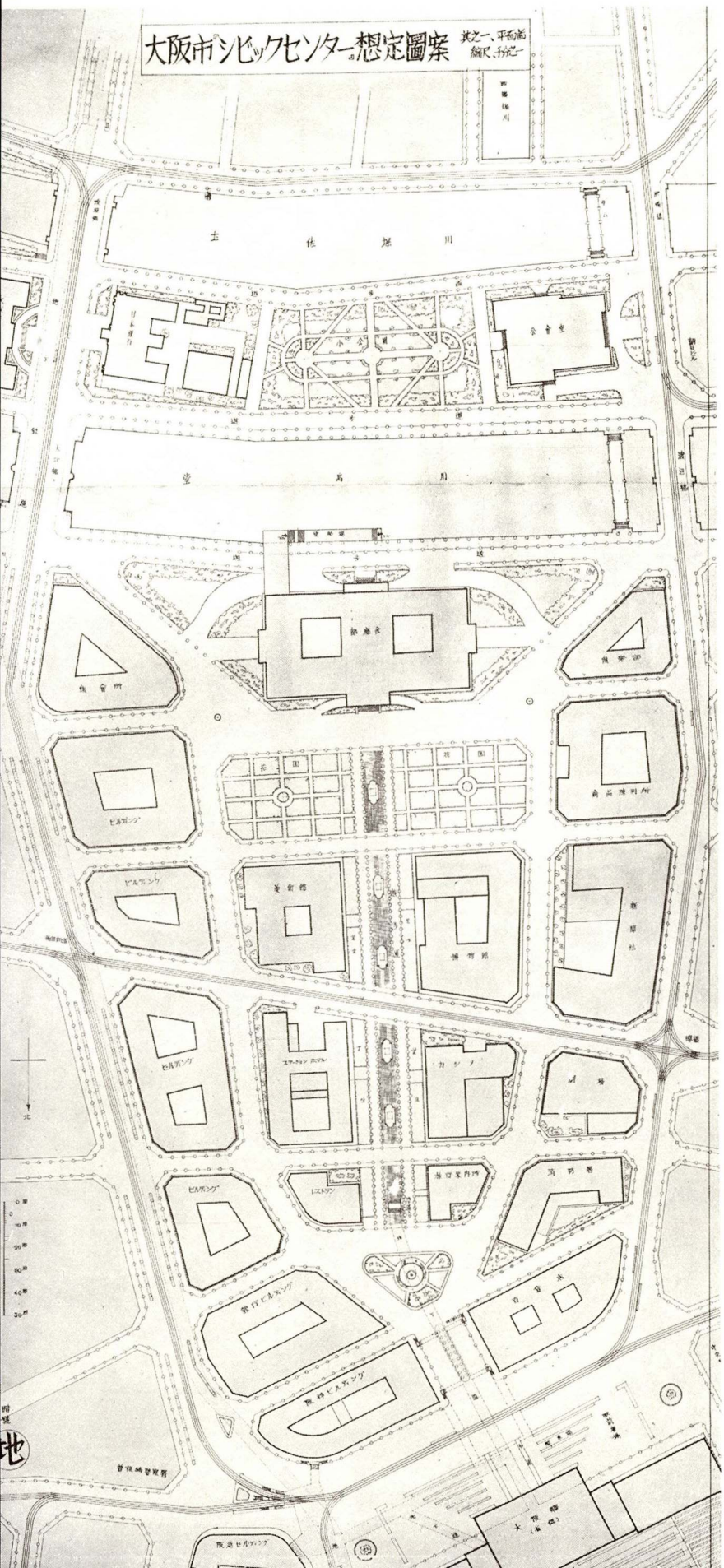
滿洲著名建築物グラフ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ 解說 村田治郎 (58)

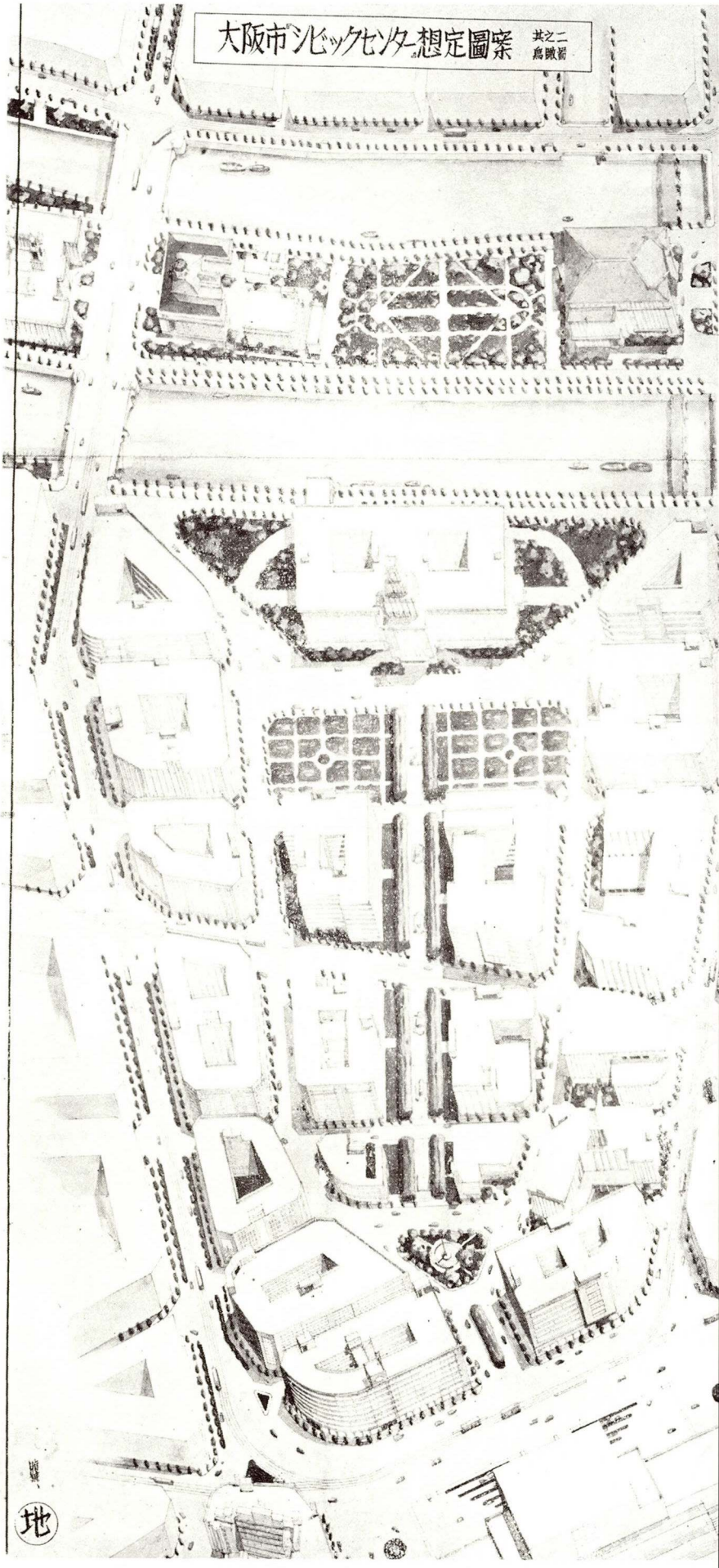
滿洲に於ける建築請負界の現狀 ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ 小黑隆太郎 (72)

滿洲見學旅行感想の斷片 ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ 永瀨狂三 (77)

建築法規に關する質疑應答欄‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ (83)

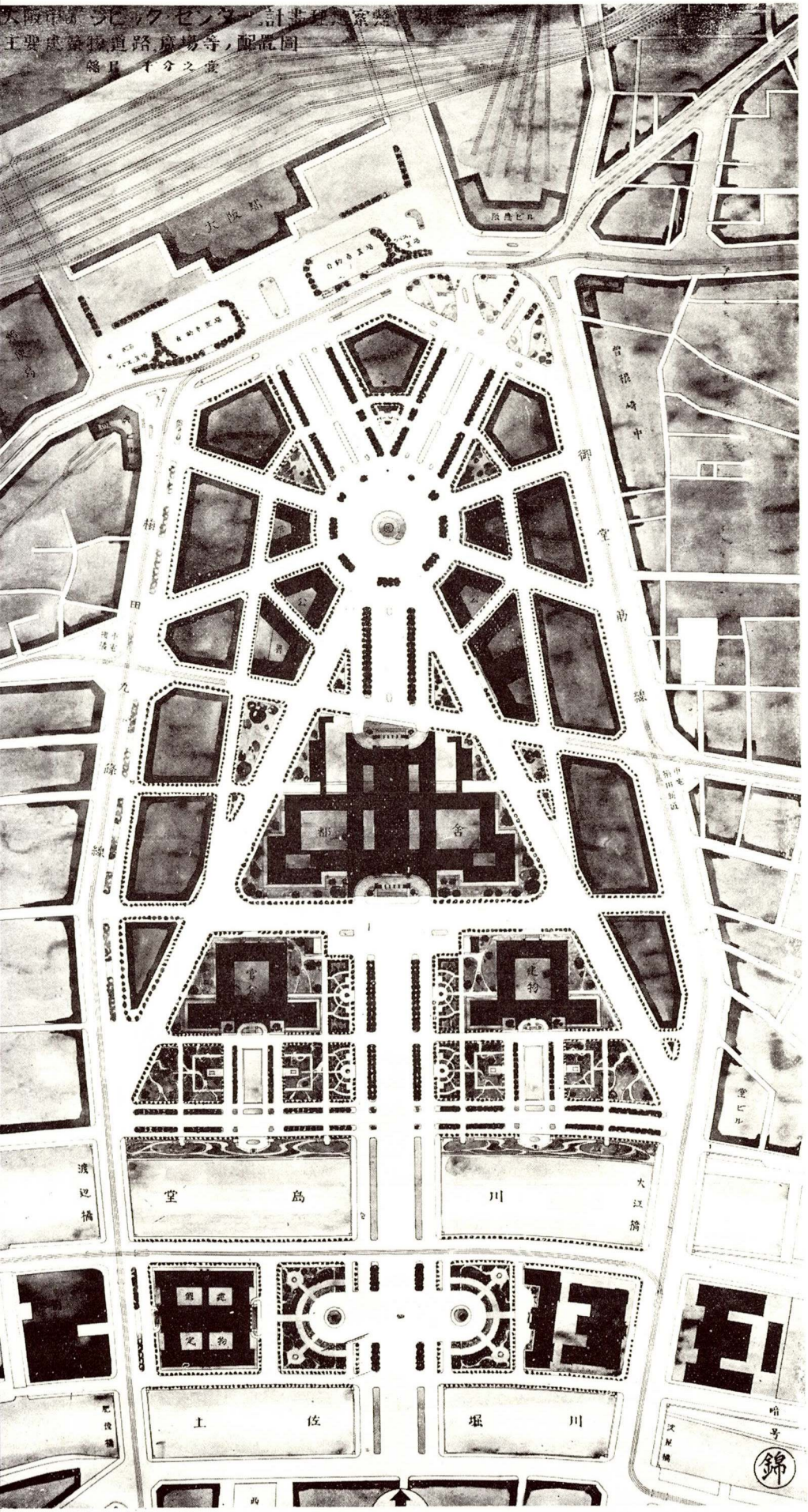
會　報 ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ ‥ (85)


大阪市シビックセンター想定圖案
其之一、平面圖
縮尺、任意
土佐堀川
堂島川
ビルヂング
ビルヂング
ビルヂング



大阪シビック・センター

計畫理想案懸賞當選案

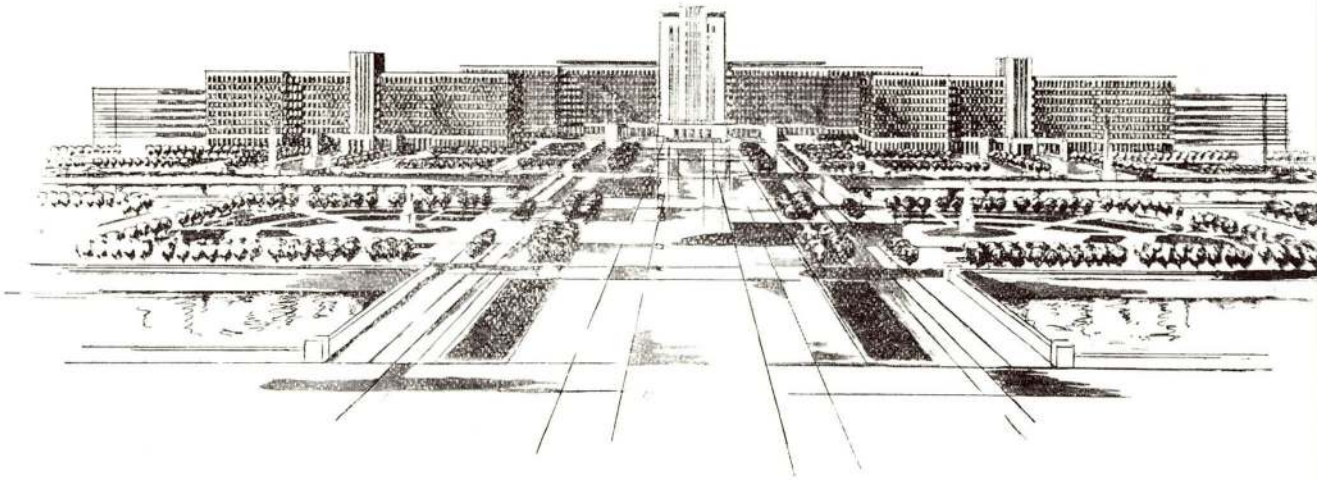


第2等當選

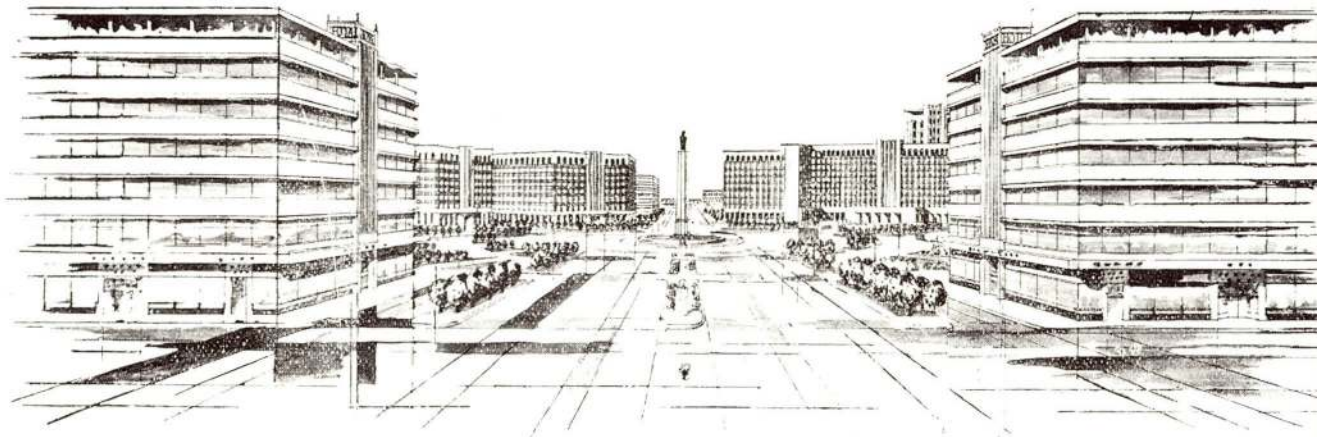
合作

井上雅男君

小野武雄君



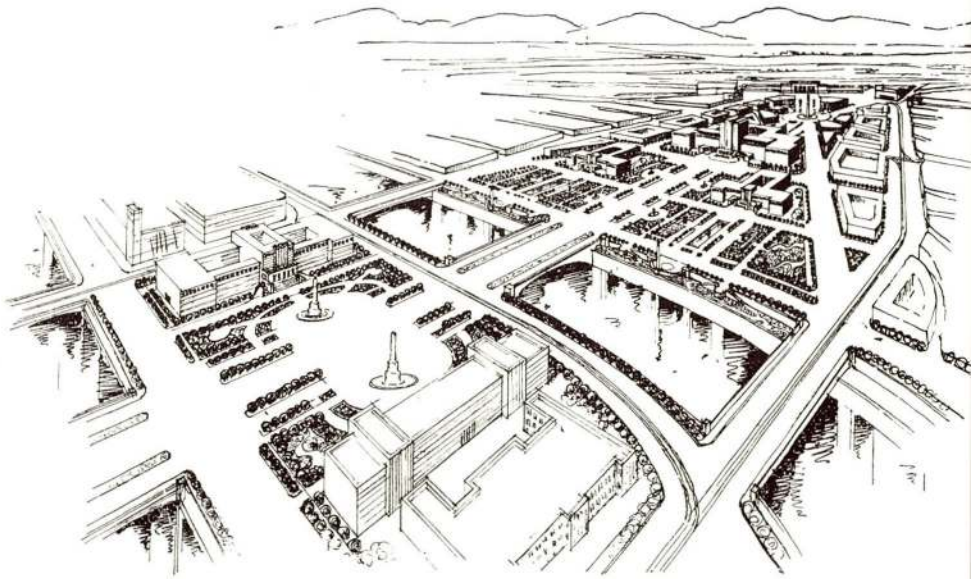
高度百尺の場所より都廳舍を望む



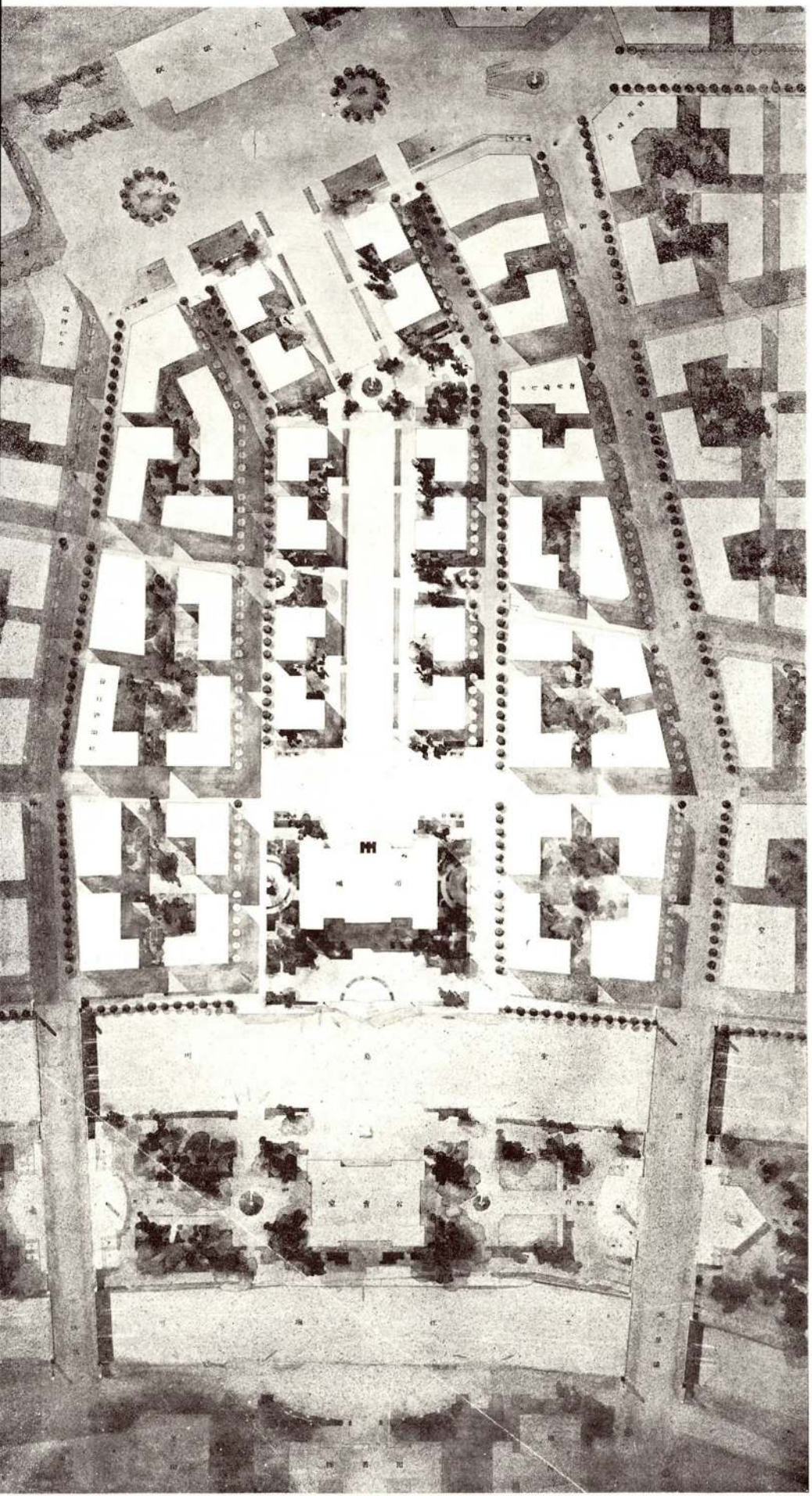
大阪驛より斜道を經て舊市廳舍方面を望む

⬆都 廳 舍

高度一千尺上空より都心を望む鳥瞰圖

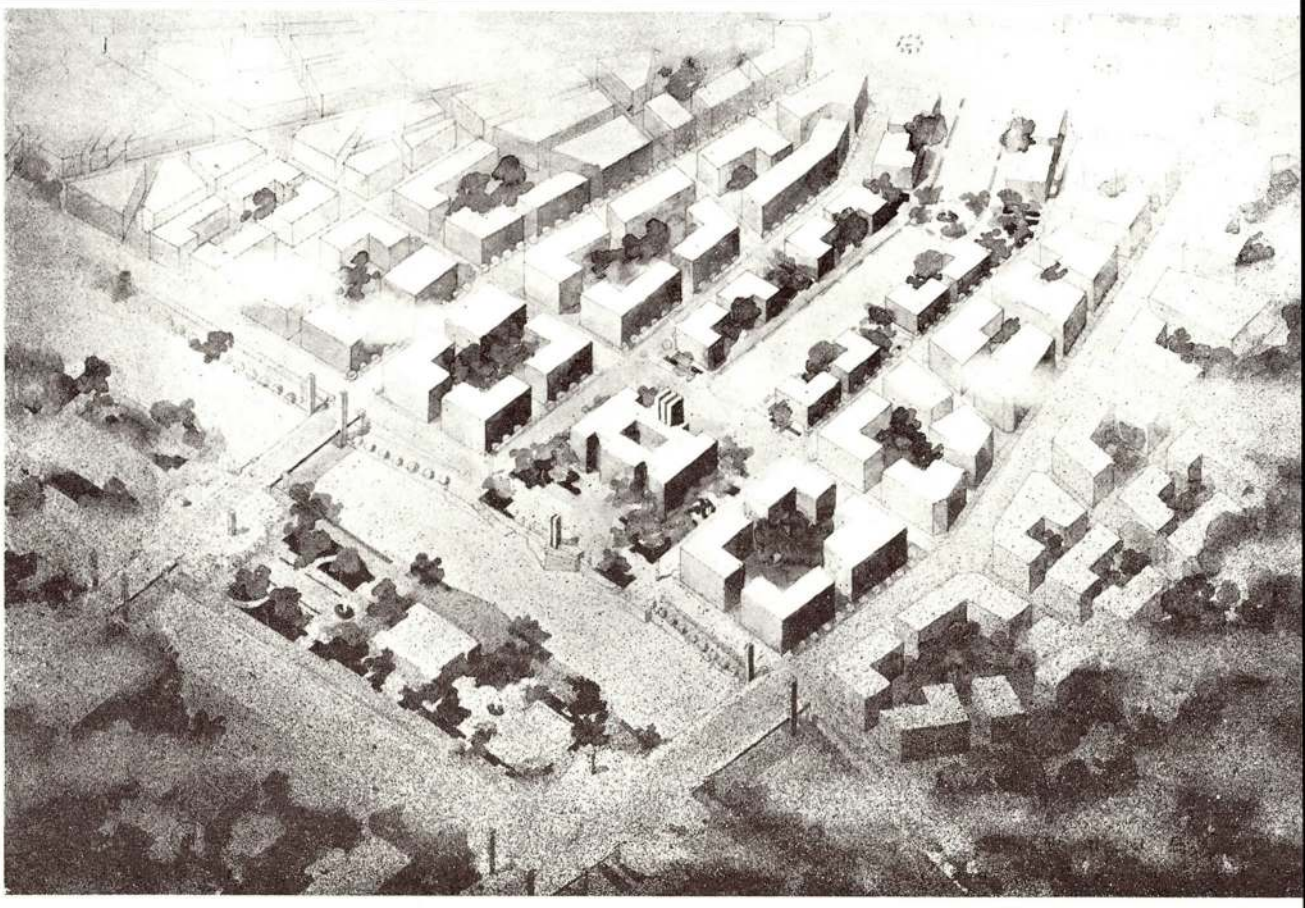


大阪シビツク・センター
計畫理想案懸賞當選案



第3等當選

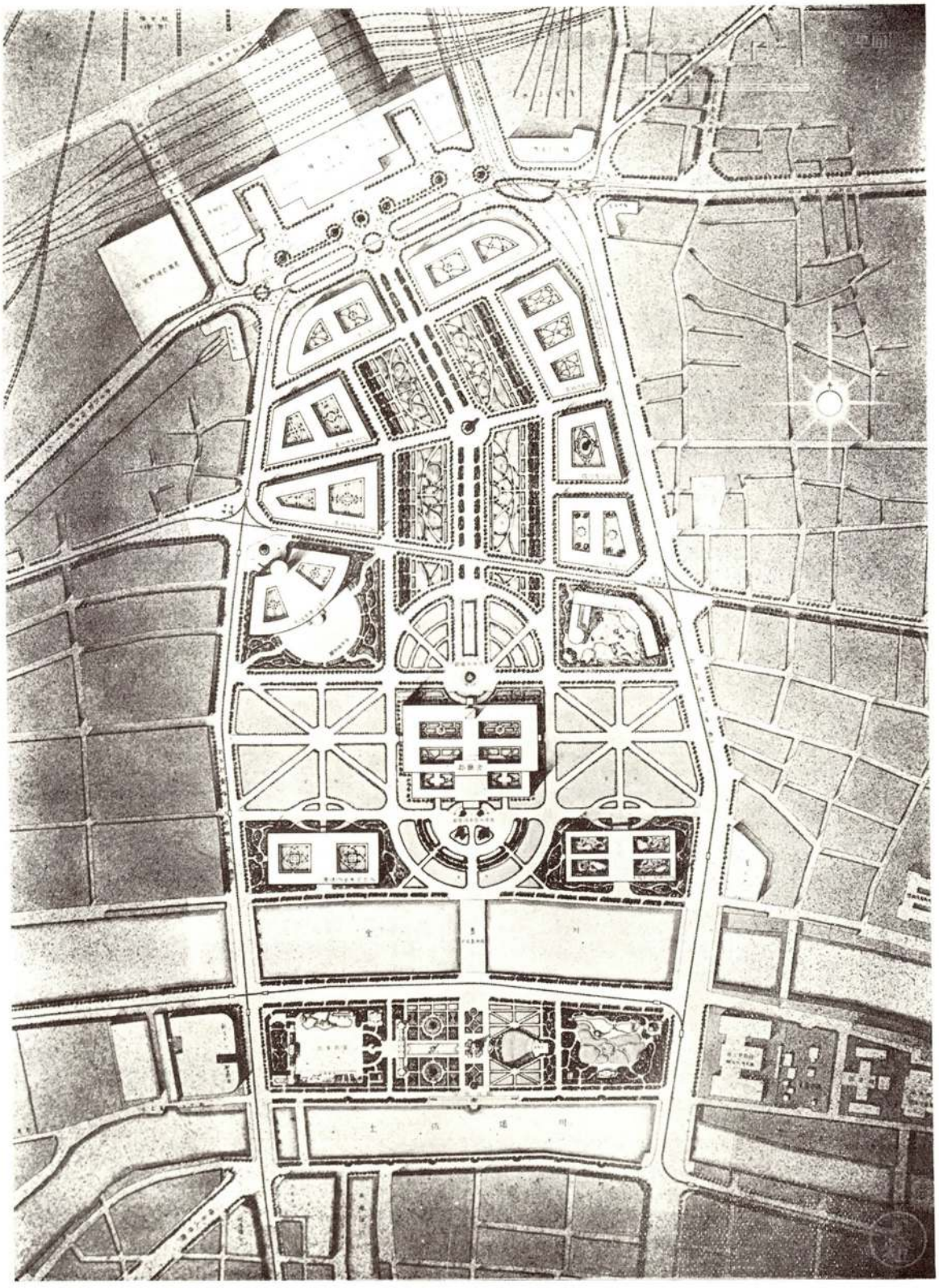
羽石　渡君



大阪市心鳥瞰圖

大阪シビック・センター

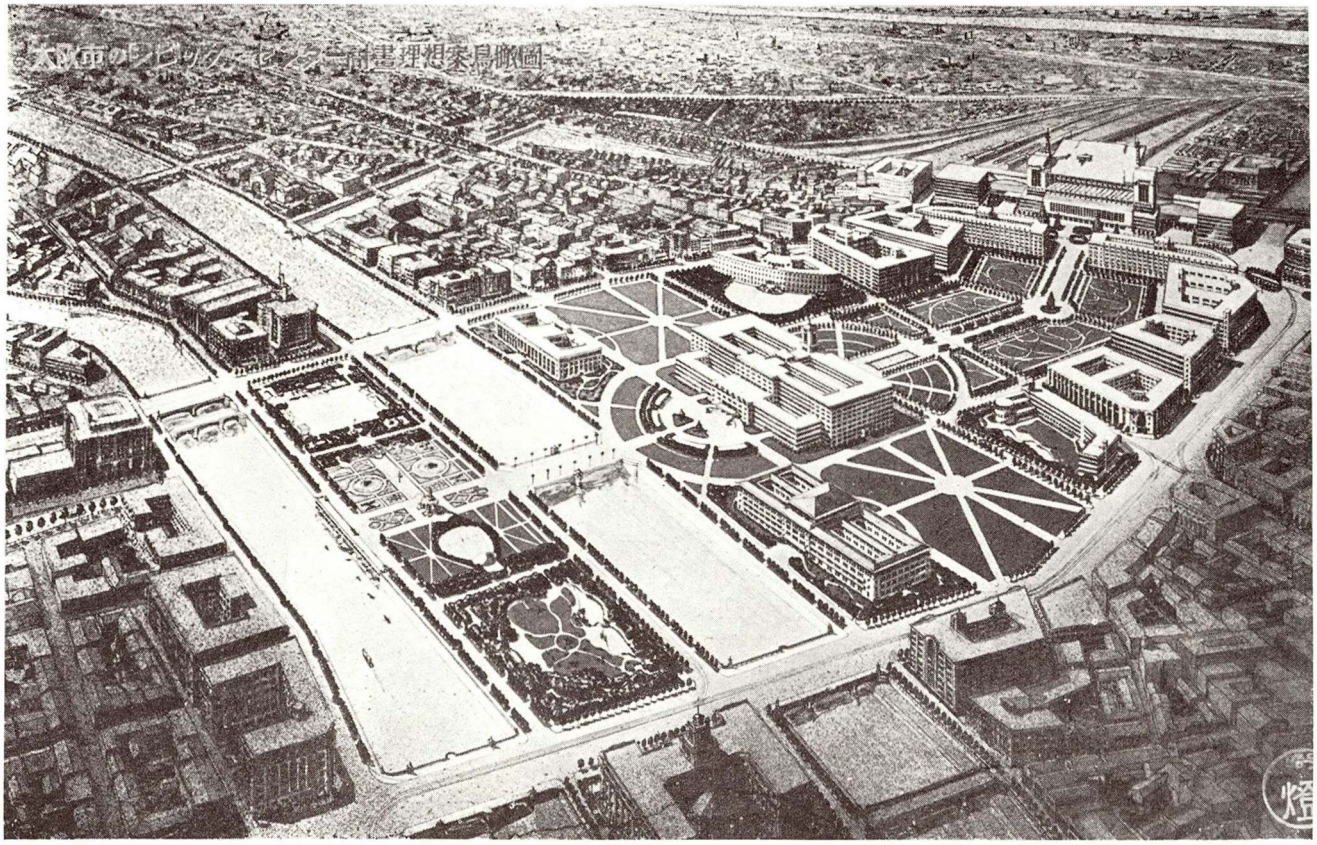
計畫理想案懸賞當選案



平　面　圖

佳作第1席

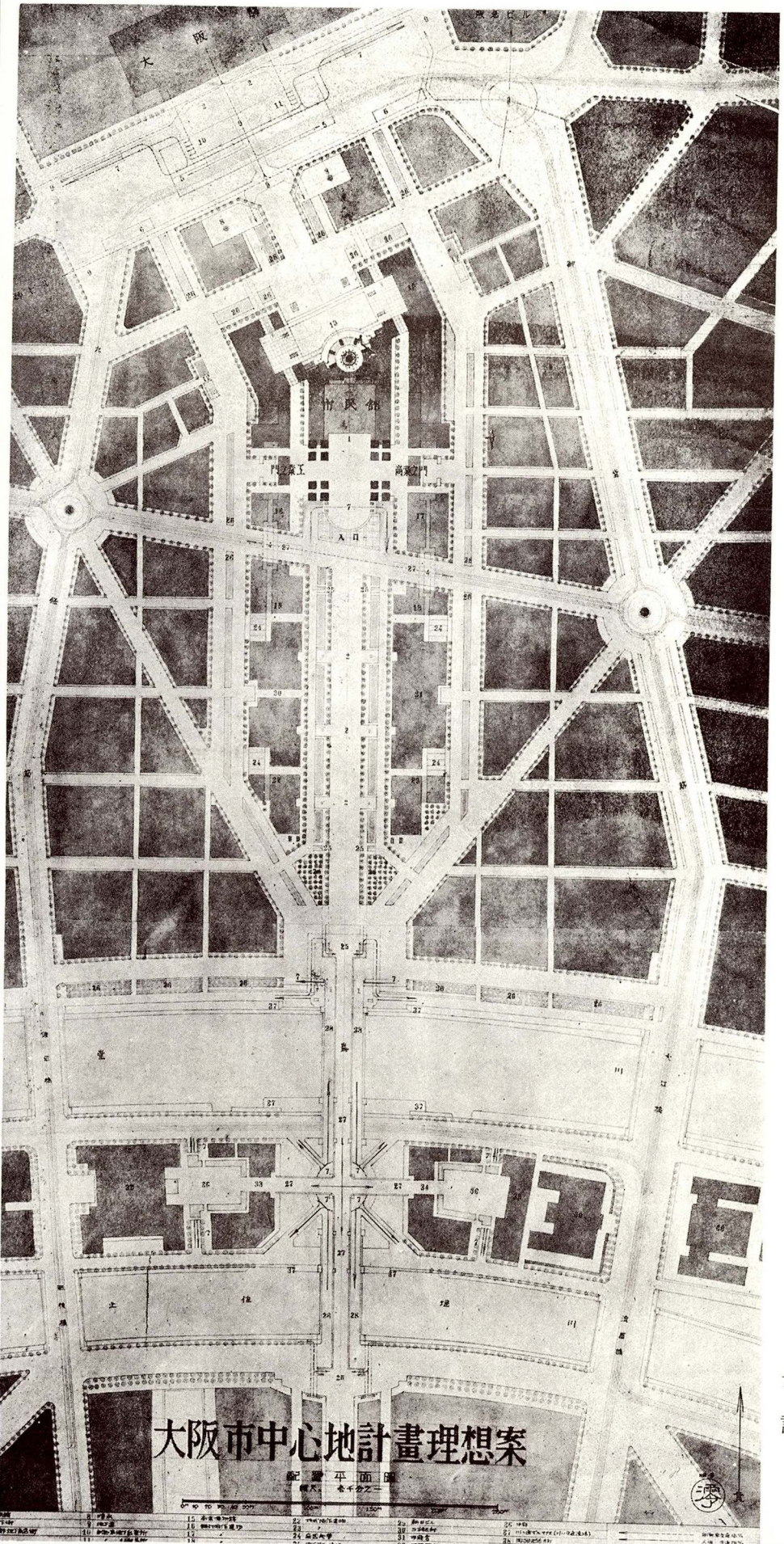
木村平五郎君



鳥　瞰　圖

大阪シビック・センター

計畫理想案懸賞當選案

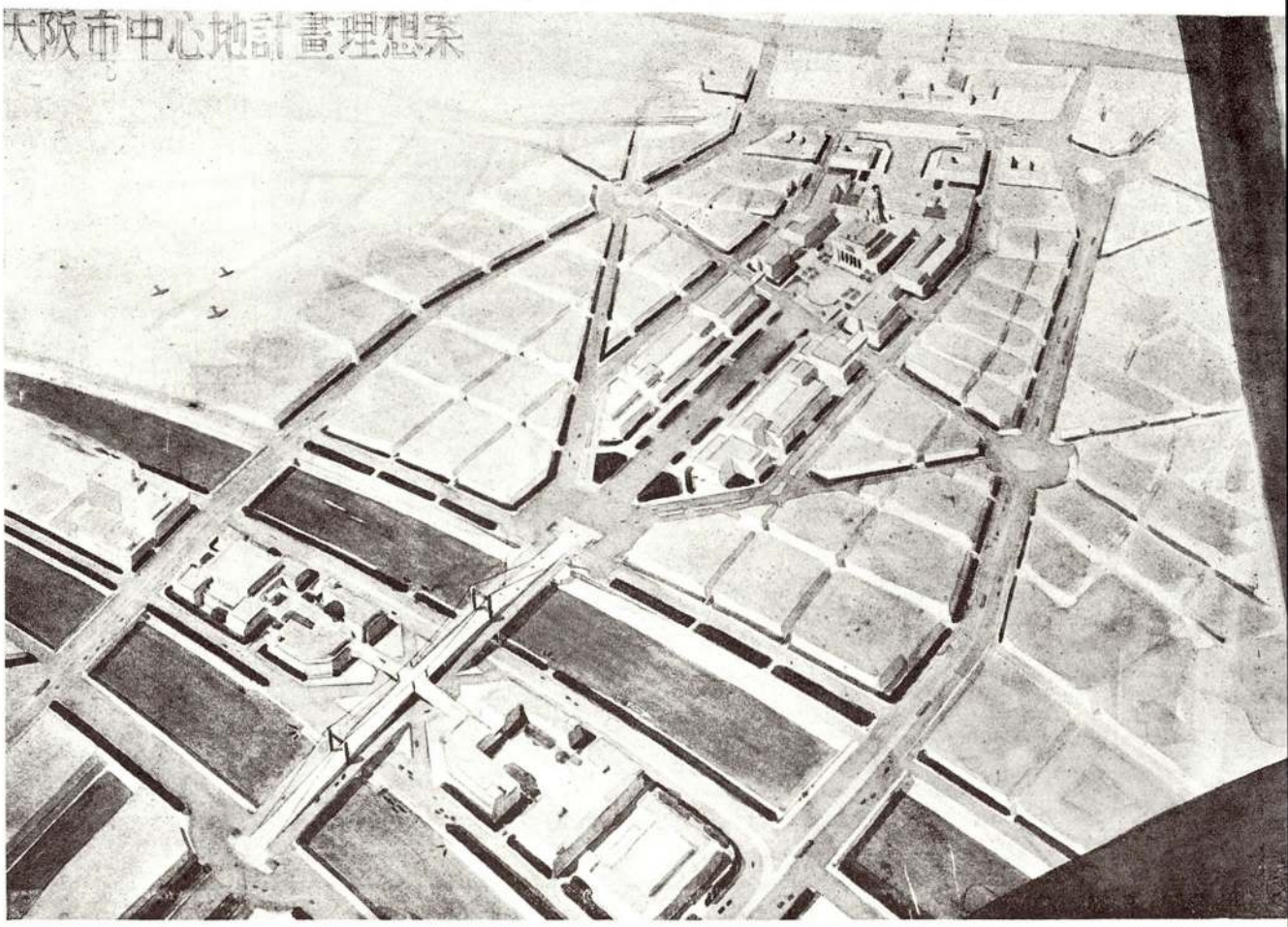


佳作第2席

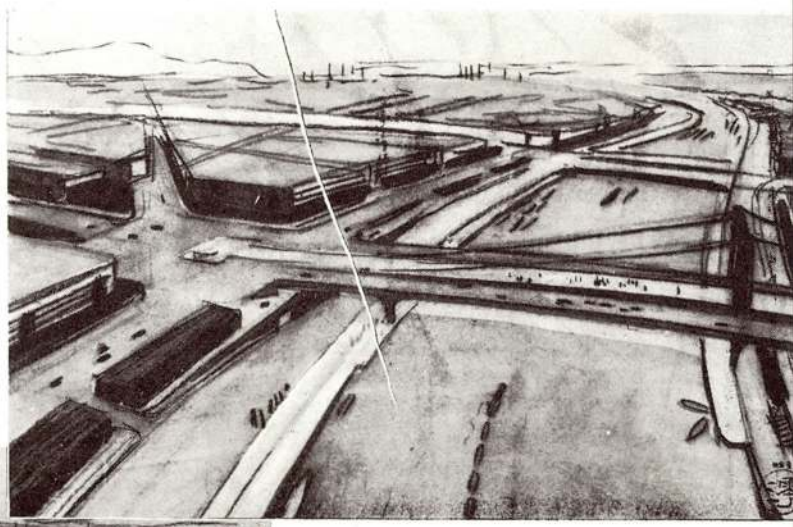
網戶武夫君

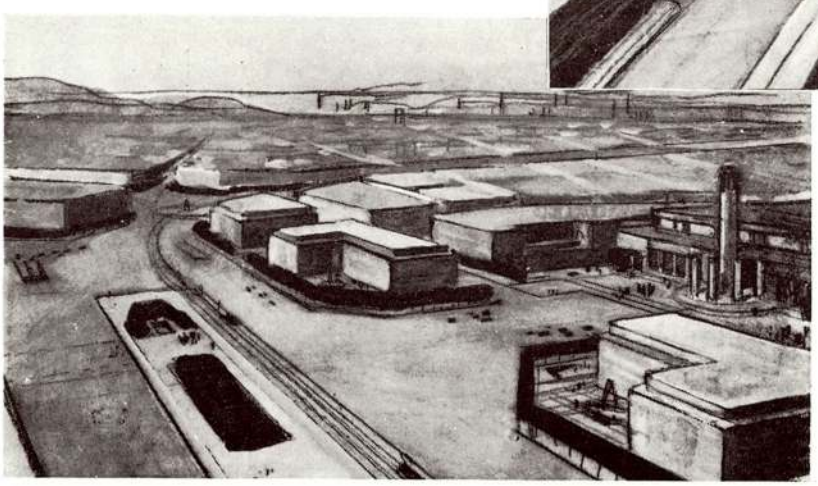
大阪シビツク・センター

計畫理想案懸賞當選案



航空鳥瞰圖





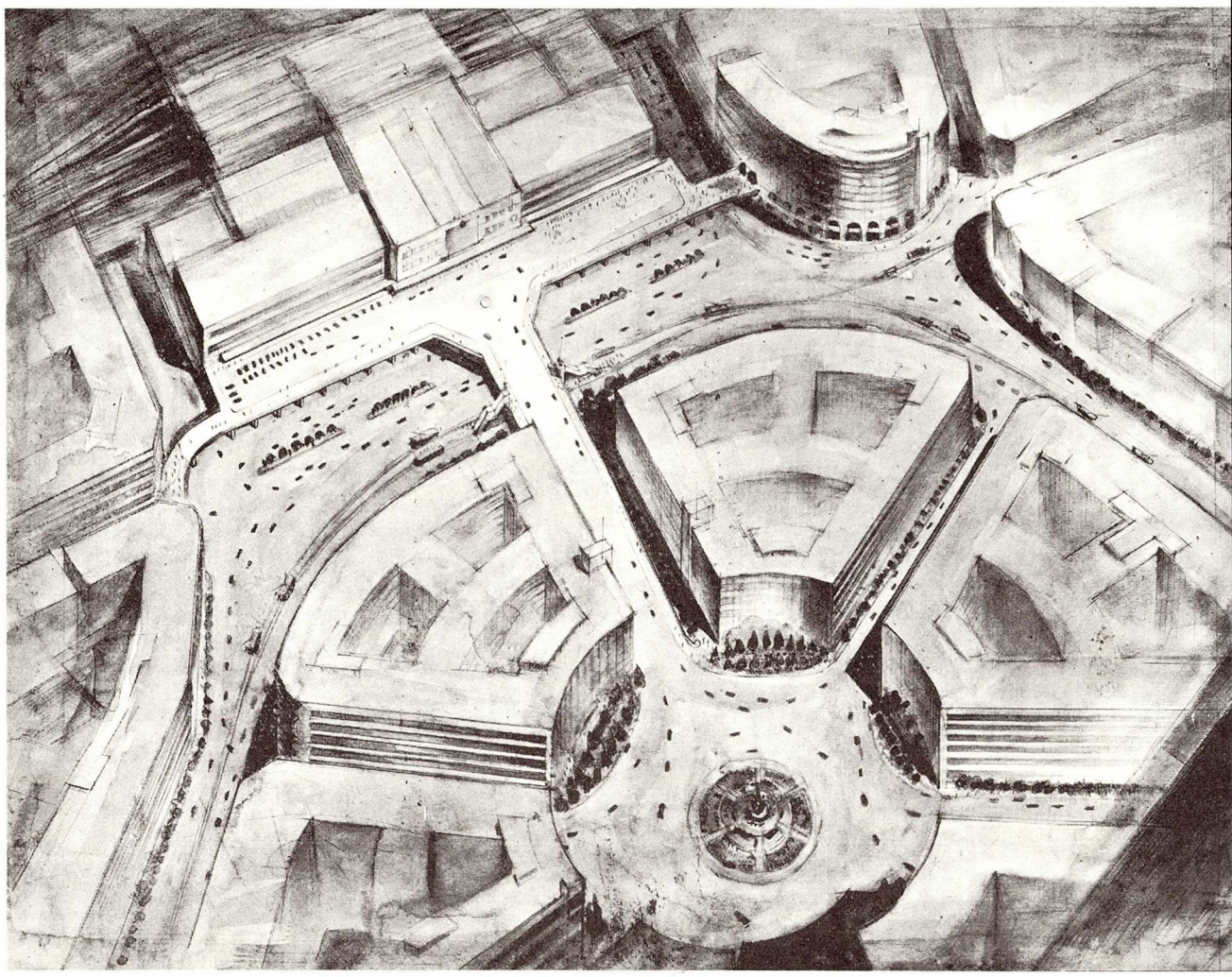


佳作第3席

合作

武内成夫君

和田　登君



鳥　瞰　圖

大阪シビツク・センター

計畫理想案懸賞當選案

大阪市の『シビックセンター』計畫理想案懸賞審査概評

此の種都市計畫に關する懸賞設計は我が國最初の試みであるので、其の應募に對しては多少の危惧の念を有して居たのであるが、數も相當集り、殊に應募者の熱心な眞面目な態度は此の試みの決して無駄でなかつた事を證して甚だ喜びに堪えない所である。

此の懸賞は、先に懸賞募集發表の當時趣旨として述べたる如く、大大阪の玄關たる梅田驛前の現狀並びに現在當局が計畫しつつある驛前一部の整理計畫を以てしては足れりとせず、更に廣範圍な根本的な理想案を求め、之によつて一般市民の注意を喚起し又當局立案の參考ともしたいと云ふのが目的であつた。

從つて理想案と云ふ意味は、現在の財政狀態や既存建築物或ひは既存道路に必ずしも拘束されない自由な構想を要求するものであるが、交通上、建築上の工學的に當然考慮さるべき技術的な諸點及び從來の極端な土地の經濟的利用は排するも合理的な相當な土地利用の如きも當然考慮されるべきものである。應募案のうちには多少理想案と云ふ意味を考へ違ひして、餘りに空想的にすぎたものもあつた樣に思はれる。

審査に當つては

1. 驛を中心として商工都市大阪の玄關として必要な諸設備を含む區域。
2. 都廳舍を中心として各種公共建築物を集め眞に大都市のシビックセンターたるに相應しい景觀美と公衆の利用とを兼ね有する區域。
3. 之等區域の交通問題に對する充分なる考慮。

以上3點を主眼として之等三つの綜合的統一ある案を見出す事に主眼を置いた。

應募案のうちには、非常に周到な配慮の下に綿密な研究を建て乍ら直ちに實施される事を主眼とする餘りシビックセンターとしての配置を犧牲とせるもの又は交通問題に主力を注ぎ建築物の配置及びブロックの割方等を等閑にせるもの、或ひは又シビックセンターとしての建築物の配置に偏して交通問題を無視したるものなぞ、其の主眼とせる點に於ては推奨に値する案であり乍ら案全體として選にもれたものも多い。

1 等

此の案は計畫區域の北半に旅行者中心としての各種必要建築物を配し、南半には都廳舍をはじめ各種公共建築を集めて建築物の配置は大體に於て良い。

驛を中心とする繁激な主要車行は現在の二大幹線道路に讓り驛正面より都廳舍に向つて廣濶な歩行者專用の大遊歩道を設け、更に中央各種建築物に對する車行を其の兩側道路に分離せしめて居る。之は既設二大幹線道路を充分に活用し而かも中央に都會の雜踏を切離した完全な休息地帶を現出するもので、旅行者乃至都會人の安息休養に最も注意せるものと云へやう。

又全體の計畫區域に對する利用土地の割合も極端に走らず、現在の財政や現在存する特殊の困難な事情さへ改良され、當局の熱意と市民の充分な理解とが伴へば決して實行不可能な案ではない。

唯梅田新道櫻橋間の現在道路及び梅田驛前の路面交通に對して今少し新しく立體的交通方式を考慮して欲しかつたと思ふ。

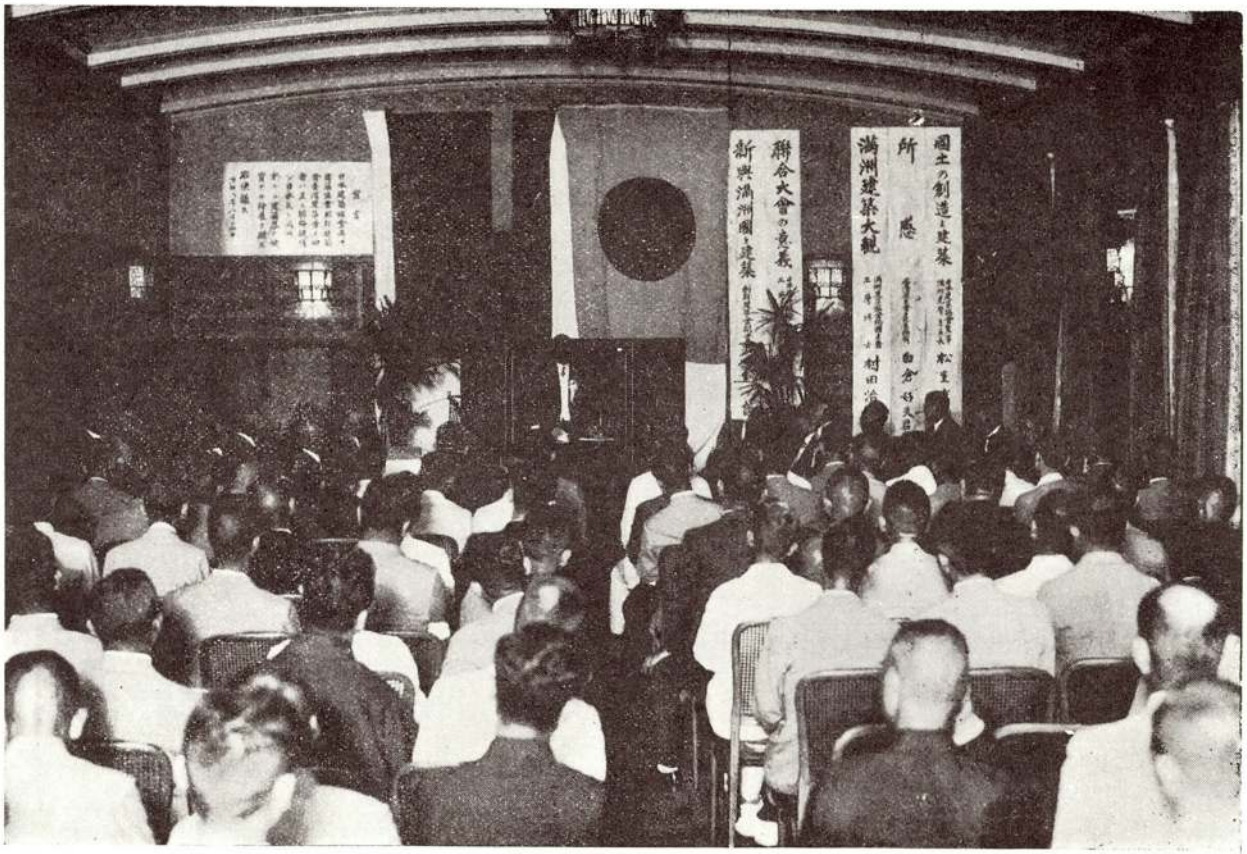
2 等

構想の雄大な又實に美しい案である。唯餘りに圖上のシンメトリーに囚れて道路を配置した爲めに驛前建築や公舘建築が細分され貧弱なものとなつた憾みがある、利用土地の割合も稍少きに過ぎる

3 等

大體の配置は1等に非常によく似て居り交通問題防空問題に對して多分の關心を有した案である。唯餘りに其の主張する所に囚はれすぎて技術的に無理な手法や又實際には效果なき考案を用ひすぎた點に難がある。

最後に此の大阪のシビックセンター懸賞募集に對して、大阪方面よりも東京方面の應募者が非常に多かつた事には稍意外の感をなした。東京橫濱が大震災後の復興によつて都市計畫に對する一般の關心が非常な刺戟を受けて居る事に起因するものであらうが、地元大阪の建築家諸氏が今少しくかうした問題に今後一層の關心を持たれん事を希望して止まない。



大連に於ける四會建築大會々場……片岡本會長の講演

四會聯合建築大會と滿鮮の見學

松室重光

（A）

大會は昭年8年8月14日午後5時より大連市大廣場大和ホテルに於て開かれました。

1. 發　端

此四會即ち日本建築協會、滿洲建築協會、朝鮮建築會、及び台灣建築會の四會が互に連絡提携して其共通なる建築界の進展に期したらよいと云ふ意見は昨秋我建築協會の滿15年記念大會の開會に當り、滿洲建築協會より特派せられて來朝せられた同會代表石田書記長と我等本協會の有志が一夕の懇談會を開催しました時に提唱せられた事でありまして、皆其有意義なる事に賛意を表したのであります。

2. 準　備

爾來年改まりて其開催の機の熟せんことを待つて居たのでありますが、偶々本年7—8月

に亘り大連市に於て其主催になる日滿大博覽會が開かるゝ事となりましたので、此機會に開催したらと云ふ滿洲建築協會の提議に贊同し、同協會を主催者として一切の準備其他をお任せして實現する事となつたのであります。

此會議には日本よりの參加に相當重きを置かれていたのは勿論であります。我日本建築協會は其滿 15 年の記念事業として實現せしめた爲と、豫て期待していました滿鮮の見學旅行を決行しやうと云ふので屢次委員會を開き滿洲建築協會の協力調査を求め、其案を定めて時期を何時とするかと云ふ一點迄こぎつけて居たので、共に之を實現せしむる事の便宜を思ひ、本會では可成多數の會員の參加の便宜上眞夏ではあるが8月にする事が適當と考へまして、其點で滿洲建築協會に可なり勝手な希望を致しました爲に、滿洲建築協會の方では朝鮮と台灣とに交涉往復するに充分の餘日なからしめた爲に特別な多忙さと御迷惑をかけると共に、又遙々參加せられた台灣の諸兄や、陸續きであるが一議に及ばず馳せ參ぜられた朝鮮の方々にも可なり無理な旅行を御願ひした諸點については各方面に對して特に御詫をして置く次第であります。

3. 大會の始め

で、大會は此日旅順の見學に豫定より1時間を遲延せしめた爲に開會時が從つて遲れました。先づ滿洲建築協會々長の開會の辭、次ぎに菱刈關東長官、鄭滿洲國總理を始めとし小川大連市長、楠谷滿洲土木建築協會長等關係諸方面の祝辭がありまして、其後に講演に移りました。

4. 講　演

前に述べた様な次第で此講演に充分意見吐露の時が與へられなかつたのは甚だ遺憾でありました。先づ南滿洲工業專門學校敎授村田治郎博士の「滿洲に於ける歷史的建築の說明」に充分其蘊蓄を披瀝して貰へなかつた事や、朝鮮建築會の中村副會長が接壤地朝鮮の古代文化研究から見て「滿洲國の建設と其建築」に關し其將來に特に重大なる期待を有しつゝ其透徹したる識見の片鱗より伺へなかつた事や、白庫台灣建築會代表をして單に建築界に對する感想だけを聞く事とした事や、又我協會々長片岡博士の大會の意義なり、現代建築家が兎もすれば極めて狹き主觀的自我に立脚して建築の對社會的意義を沒却せんとしつつある點に對する警告など、一人僅に 15 分間の講演でありましたが玆に期せずして一致したのは、建築を大局より觀、國家の建設と其將來に稽へて其取扱ひ方を最も愼重にして、折角我國が明治維新の當初より過去 65 年間絶大の犧牲を拂ひて東洋民族の興隆に資し來つた結果を滿足ならしめる方法に萬遺漏なきを期すべしと云ふ事でありました。書き添えて置きますが私も又「國土の創造と建築」と題しまして、日本國民として始めて體驗する新國家の建設を深く根本から省察して其建築に携はるべしと云ふ事の一端を述べました。

5. 議　事

本大會の主眼議事は私が座長に推されまして次の通り取運ばれました。これは私が永く

滿洲に居りました爲に特に其席をけがす事とたつたのであります。

第1 宣 言

日本建築協會、滿洲建築協會、朝鮮建築會、台灣建築會ノ四會ハ互ニ連絡提携シテ日本及ビ滿洲ニ於ケル建築界ノ堅實ナル伸展ヲ期ス。

本案に異議のある筈はありません。當然の事であると共に今日が此聯合會を形成する適宜の時機であります。

第2 決 議

1） 四會聯合會ノ規約制定

これは日本建築協會の提案であります。宣言の通り連絡提携して事に當る時、規約の大綱を定め置きまして此聯合會をして常に有力なる社會的活動體たらしむる爲に法三章的に規定を設くべしと云ふ事を提案者として私之が說明をなしまして、其規約草案は主催地滿洲建築協會に一任し、追つて各會へ回報を受けてそれぞれの法定機關の審議に附して決定する事となりました。

2） 滿洲國ノ建築法規ノ制定ニ關スル建議

これは朝鮮建築會の提案でありまして中村副會長より其說明を受けました。現在滿洲國に置きましては新京國都の大規模なる建設事業より、北は哈爾賓の產業中心大市の擴張建設、南は奉天の工業市建設等々、建築に關して根本法規の制定をなし置く事は必要であります。たゞ此法規たるや單なる日本の燒直し的のものでなしに眞に滿洲國の事情に適應したものたらしむる必要があるので、此點をよく滿洲國の當路に建言して善處して貰ふと云ふのであります。

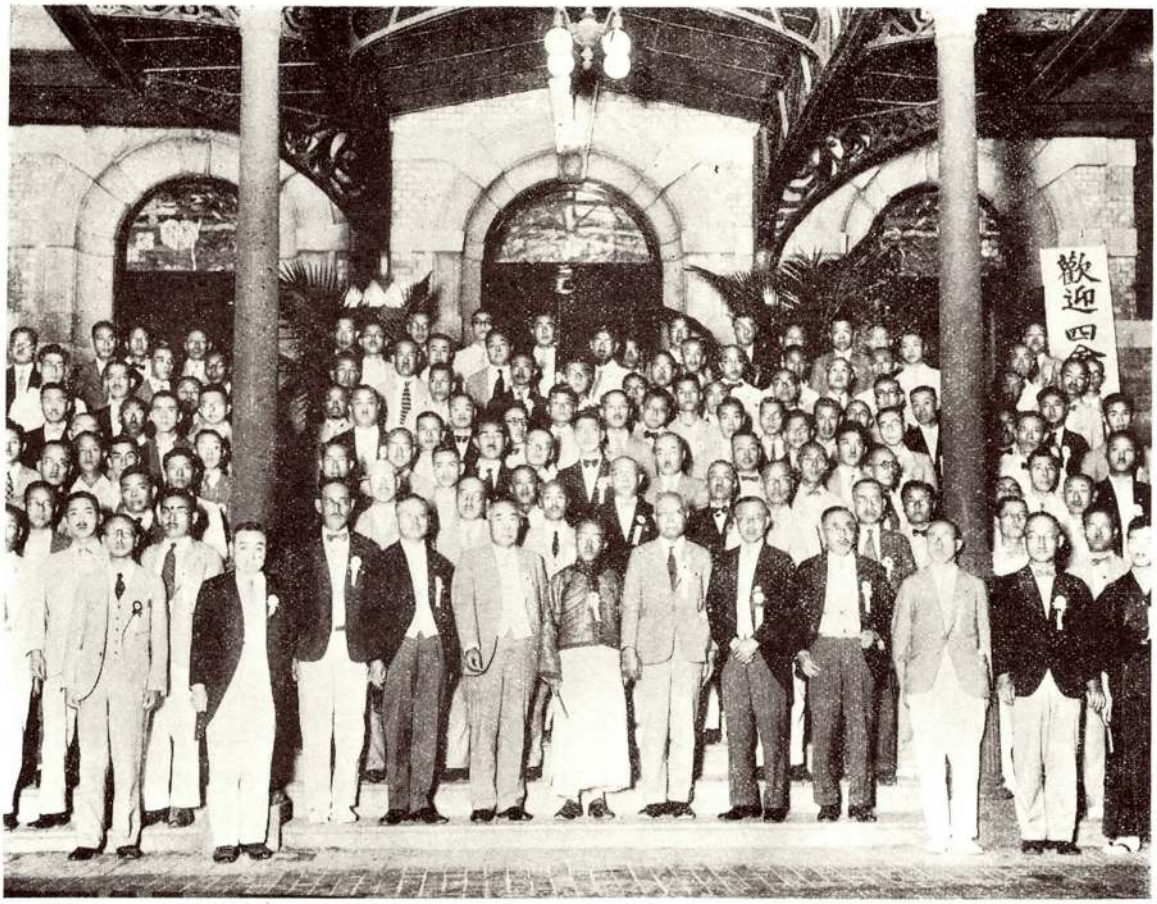
茲に我等の考へました事は日本建築法規の餘りに杓子定規的であつて其伸縮性を欠く事や、其拘束あるが爲に建築の進步が反つて阻止せられて居る等の事柄でありまして、滿洲國の建築法規はよく其現代事情に即して執行宜しきを得る程度のものたらしめたいと云ふ事でありました。

本案は提案者朝鮮建築會に於て作製の上實現方に進むべく決定いたしました。

3） 滿洲國ノ建築ノ調查機關設置ニ關スル建議

これも又朝鮮建築會の提案でありまして實に第二の建議案と相關的のものであります。中村君より其說明を得ましたが、滿洲國には古く久しき文化の傳統もありまして、其處に存在するものは必ずしも近代支那建築の淺薄なる模倣だけではありません。其地理的事情に即して生成した建築には必ず其存在價値あるものの尠なからぬ事を考へまして、先づ根本的に此等の建築の實體を明瞭ならしむる事が今後の滿洲國の建築に對して必ず其指導精神となると云ふ事から、法規の制定の前に先づ此調查を滿洲國の當路に求めようと云ふのであります。

これに就ては日本の法規が日本自體の認識を欠いて行はれて來てゐる種々なる不合理や



大連に於ける四會建築大會に於ける出席者記念撮影

行詰りや、様々なる不便が、今日ではなかなかに除却の困難なる事を考慮して、滿洲國をして同じ様な過誤に陷入らしめざる様にしやうと云ふのであります。

滿洲建築協會では既に其具體案が作成せられて提示されつゝあると云ふ事も聞きましたが滿塲異議なく提案者をして其案を作成して貰ふ事と定まりました。

因に申しますが朝鮮に於ても愈々明昭和9年4月より建築法規が制定公布せらるると云ふことであります。朝鮮にも又母體日本と異なつた事情がありまして其文化生活機構の一部をなす建築の向ふ所を示す法規の制定は必要でありますが、法は兎角繁苛に流れ易く、之によりて衣食する官僚の數を増すと共に民衆の苦痛が増大せらるゝと云ふ從來の弊に墮せざる様序ながら御願して置く次第であります。

6. 記念撮影

以上議事終了の後玄關に於て記念の撮影をいたしました、御覽の通りであります。

7. 宴會——餘興

午後7時より屋上にての宴會が行はれました。次いで滿洲事情の映寫がありまして大會が茅出度終了したのは午後10時でありました。

8. 大會の經費

茲に各位に報告いたします一事は以上大會經費は一切滿洲建築協會の獨力負擔する所でありまして、日鮮台の協會等には何の分擔もなかつた事であります。此一事は我等の深く銘記しておいて他日必ず之に應酬すべき點であります。之れは必ずしも物質的の問題ではなく、滿洲國の建築界に對し、更に進みて日滿兩國の滿足にして堅實なる伸展に對し、國民として皆夫々に寄與すべきあるものを指示していると思はねばなりません。

9. 大會參列者

滿洲約200名、朝鮮11名、台灣5名、日本より片岡會長共8名、これは滿洲建築協會の期待に反して尠なからず其失望を招いた點でありますが最初參加を表明せられたるも事故の爲中止せられたので、實に不得止事ながら遺憾でありました。

(B) 見學—滿鮮半月記

滿鮮を併せますと其面積は日本本土の4倍にも上ります。之を半月で見やうとするのは始めより無謀でありまして其半面すら滿足に見難いのであります。されば一知半解迄にも至らぬ滿鮮の半缺記は各位の透徹した頭腦で推讀して貰うより外ありません。

私は滿洲に15年を生活して來た者であります。母國に歸臥してからも既に10年になりますが、滿洲は實に私の爲には第二の故鄉でありまして、其山川草木悉くが私の關心事象であります。

從つて私は事變以來の滿洲國を一日たりとも思はぬ日はなかつたのでありました。私は此關心を國民悉くに持つて貰はうとは思ひませんが、新奇を逐ふて進み、變化を見て過ごしやすく日本國民の輕佻浮薄さには痛憤を禁ぜざる者であります。

滿洲事變の發端は2年前の9月18日でありましたが、それは唯最も近き爆破の起つた日に過ぎぬのでありまして其原因はなかなか遠い時から來ているのであります。

私は此事變の由來を說くのでありませんが、事茲に到らしめた一因が明治以來の誤まれる國民教育にあると信じます。そして其教育が今も猶續けられてをりますから、滿洲國が確實に安定して平和に光明に輝く迄にはまだまだ幾多の波瀾の起伏あるものと考へまして充分に之を警戒する必要ありと存じます。で滿洲國の現狀を見て格別なる感興を持たれぬ人があつたならば其智見は犧牲者の苦心を解する力のないものであります。

過ぎし60有餘年間に連續して拂はれた犧牲は實に莫大であります。之ありて日本は興隆して今日ある事を得てをりますが、又之が爲今日の難局に遭遇して必死の境地に立つて居るのであります。

今日の日本は斯る難局に墮せずしてもつとよく國命の展開を見せ得た事でありませうが中途にして油斷した結果が現狀滿洲なり日本なりであると思ひますと更に感慨に堪えぬものがあります。

私は此行の目的として知る限りの滿洲の舊態を現狀と對照して人々に說明するつもりでありましたが、時しも旅行季節で汽車も旅館も大入滿員の盛況であつた爲、車中よりの指示も出來ず、途上の說明も難く從つて現狀以上に或理解を持つて歸つて貰ふ事の出來ませんでした事を遺憾と致します。

（1） 行　程

昭和8年8月13日午前9時10分大阪驛發三宮驛下車、直ちに埠頭ゆき、大阪商船亞米利加丸に搭乘、正午出航、本日稍熱す。

同11日早朝門司港着一行下船關門の一部見學、同正午出航。微風あり對馬近くを航し其島影を明瞭に認む、近來なき事なりと云ふ。

同12日終日朝鮮海を航行、稍强き西北風ありて船行遲々たり、依て大連着は明13日午前9時と云ふ。

同13日曉時濃霧ありて暫時停船したりと云ふ早朝より霧笛を鳴らしながら進む。

霧晴れて船其速度を增せしが、大連入港が9時と豫報せられし爲又速度を緩めたり、9時入港。

滿洲建築協會の會長岡大路氏其他の幹部諸氏、朝鮮建築會の副會長中村氏外10氏、台灣建築會の白庫氏外4氏等既に先着せられ共に迎へられ挨拶そこそこにして直ちに見學に移る。（今日は實は午前8時より行を起す事に豫定せられありしと聞けり）斯くて予は故舊、知友其他の多數の出迎の人々に滿足なる接見すら出來すして袂る。

（2） 見學　（イ） 大連

先づ埠頭事務所の屋上に立ちて大連港の說明を受け、次第に伸展擴張せられゆく大連港の能力、對岸甘井子の載炭設備等を展望し、30年の昔時茲處に大商港を建設したる露國當事者の非凡なる經國的材腕を今更ながら感服して見る。

次に碧山莊に車を馳せて埠頭從業の力役滿洲人の單純生活現狀を見て日本の勞働階級との比較をなし、更に三泰油房に入りて大豆搾油の工程を一見し、身に一糸を纏はざる全裸の苦力等が渾身の力を發揮して活動しつつある狀を思ふ。（折柄休憩中）

去つて大連醫院の屋上に上り、大連市街を展望し、此堂々たる醫院の一部院內一見の後滿洲土木建築業協會を訪問す。會長榊谷君以下協力奮鬪して既に此會館を建設し其會務の盛大に赴きつゝある樣を見、甚だ愉快に感す茲にて其招宴晝餐を供せらる。榊谷會長より懇篤なる歡迎の辭を受け予一同に代りて謝辭を述ぶ。

午後滿蒙資源館及び工業博物館を見る。此資源館こそ心ある者の必す一兩日を費やして充分精査研究すべき處なり。若し如斯の施設を母國大阪、京都、名古屋、東京、福岡等々に於て有せしめなば其効蓋し莫大なるものあるべきに、茲に到るものにあらざれば其利益を享け難きは甚だ惜き限りなり。南滿洲鐵道會社は兎も角、我拓務省あたりは如此施設をよく活眼もて見、之を利用するの方案を立つべきに、其企圖ありとも覺えざるは何ぞや。

滿洲館を訪ひては往年露治時代の技師長「サハロフ」の豪快なる生活振りと其建設的材腕の非凡なりし當時を偲びつゝ茶菓の饗を受けて中憩したり。

それより中央公園を經其忠靈塔を仰ぎ見つつ老虎灘方面の別莊住宅地を通過し、日本國民の好む海岸の氣分を味ひ更に引返へして伸びゆく市街中の博覽會場に到り茲處で關係者の迎接を受けて各館を一巡す。母國や滿蒙の裝の一端を見て、6時電氣遊園に入りて茲處にて滿洲建築協會の晩餐宴に列す。(支那料理)

明日大會の順序議事等協定、夜9時半退出、此1日の行程を終了遼東ホテルに入り一宿す。

大連は伸びたり、更に猶擴張せらるべし、滿洲奥地の開發と共に茲處に呑吐せらるる貨物は益々增加すべく、茲處に起さるゝ工業も又種々あるべし、曾て用水の不充分なる事を患へられしも、今や關東廳當局の努力によりて又水に欠乏を告ぐる事なしと言へり。

茲處は全く日本の市街なり、其表面に於ける商權は日本人之を掴む、只其裏面に於て滿支人の更に不斷の努力を惜しまざるものあり。勢に乘りて有頂天とたらば脚下思はざるに風雲起らん、日本人の戒心すべき所なりとす。

(ロ) 旅順一周

8月14日　朝8時發の豫定とて早く仕度したのであるが、1時間を遲るることとなつた此結果として折角思出深き旅順の地を只通過したのは返す返すも殘念であつた。其上牧城驛古墳の現地說明に態々關東廳博物館より出向はれたる主事島田君に一時間を御待せした事を深く御詫する。

大連より旅順への西海岸一帶には古き遺蹟が少なくはない。大連の中央公園の東端即ち西公園町に接する平坦部からは早く漢代の古墳が發掘せられている。其處からは素燒土器と貝殼の外には何物をも得られなんだが、まだ未發掘のものも存在する筈である。

で、此一帶には古くから文化人の生息して居た證徵となるのである。又魯西亞町の一部よりは石器時代の遺物を數々發見している。で大連の一部は露治時代迄は一向人に知られぬ一寒村に過ぎずして靑泥窪其名の通りであつたが、遠い昔時から矢張り人間生活に適合した場所と認められて居た事と見える。

牧城驛は大連旅順の中間に在て、渤海灣內の東海岸に近い處である。現に其處には今猶小さき城が殘されていて其中に一部落をなして居るが、此山間の小城地の配備には充分研究するに足る所の面白き形態を具現してゐる。

思ふに此邊は古くから支那本土との連絡交通の重要地點と認められて邑落の建設があつた爲か、其處から頗る見事なる漢代の古墳を發掘したのは只に學界の慶事のみではない。今日視る所の古墳は曾て予と立花君(關東都督府の同僚)が老鐵山下の羊城地の北で發掘したもの以上の大規模で宏麗なものであつた。此古墳の煉瓦や、其積方や、仔細に研究して見ると我等の現代建築智識が二千年を經たる後の今日に於ても一向誇るに足るものでな

いことが知られる。

世界に於て古く文化の絶頂に進み、其儘其文化を保有してその「レベル」の上に棲んでいる人種は實に此支那民族だけであつて他に例のない事は我等に又尠なからぬ教訓を與へてそるものと言はねばならぬ。

此古墳は時間の都合上充分に精査する餘裕がなかつたのであるが、後に朝鮮に入り樂浪のそれを見て成程と思ふ處があつた。唯彼には此磚中に幾多年代を刻記したものがあつて、精確に其建造の年代を知らせて居るのに反し、旅順方面のそれには予の寡聞かは知らぬがまだそれを發見し得ない樣に思ふ。

此類の古墳は猶多數を殘して居ると推定するが、予は此種の古墳發掘を如何に學問研究の爲とは言ひながら、悉く發掘して行く事は禁止したいと思ふのである。それは其眞の年代を突留めて見た處で我等の現代生活にどれ程の精神的且つ物質的利益教訓を與へぬと思ふからである。況や其史的價値考證は樂浪のそれで充分に出來てゐると信ずるに於てをやである。

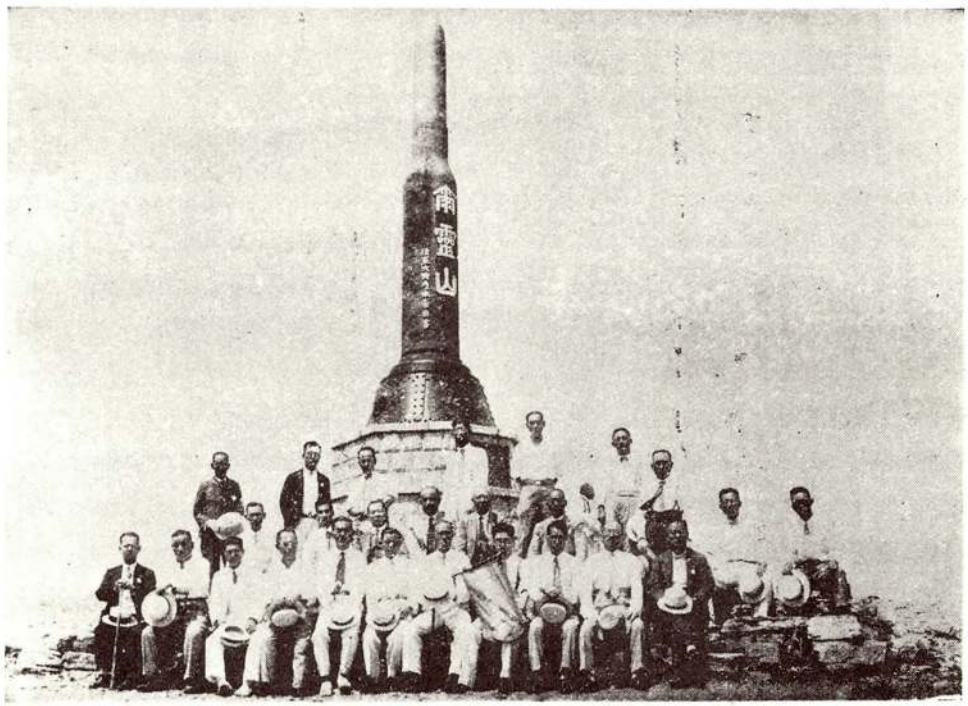
右に渤海灣を眺め左に拓けゆきつゝある果樹園を見、双台溝長嶺子を超えて土城子より火石嶺子を經て水師營に入る。茲處に日露戰役に際し、旅順の攻防戰に互に惡戰苦闘した後開城談判の一幕が展開された乃木「ステツセル」兩將會見所の遺蹟を訪ふた。

在りし日の「なつめ」の樹は今猶青々と繁つて居る。一棟の茅屋は奇麗に掃除も出來ていて攻防當時の廢殘の面影より遙かに整つてゐる。十年前の予の訪ふた時の姿より奇麗になつてゐる。で、予には一層深き感慨を生起せしめらるゝのであつたが、前途を急ぐ爲に皆せき立てられて更に車を飛ばして愈々旅順の舊市街に入り白玉山の東の參道より登る。

此旅順には漢時代の古墳が幾つか殘されていたのであるが、李鴻章の北洋水師建設時代に悉く破壞せられたものと思ふ、これは予の在任中よく磚瓦を荒撫中より蒐集した事による推定である。

旅順港には唐時代の有名なる石碑が立てられてあつた。之は日清戰爭の後我日本に運ばれて今は宮中振天府に納められている樣に傳聞してゐる。其石碑のありし位置は現在の要港部内で其處に深き井戸が堀られてあつて底なしとの傳說もあつた。事實は勃海國に使する唐の使臣が茲處に入船して順風を待ちつゝ井を穿つた遺跡である。

旅順の港は日清戰爭以來我等の記憶に最も正確に遺る處である。で、日清の役には山路將軍の元氣なる顏と其勇猛なる部下がたゞの一日を以て之を攻略した事を思ひ起し、其後10年にして乃木將軍が半歲の攻圍戰に死力を盡くし殆んど國運を賭して闘つた陸の戰ひや東鄕大將の艦隊が一たびは夜襲に奇効を奏したるも、港口の閉塞が2回3回にして僅に其一部の目的を達し、敵の旗艦を爆沈しつゝも同じ方法が敵に用ひられて我の初瀨八島の二艦を失ふた事や、我故舊や親戚が蟠龍山や鷄冠山等々の堡壘攻撃で其身命を失ひたる事柄



爾靈山塔下の一行

などを更に又まざまざと顔前に髣髴せしめて感慨實に無量のものがあつた。

一行忠靈塔の廊に立ちて四方を觀望し25年の昔を偲ぶ。東方一帶の堡壘や、黃金山や、港口や、遙に聳ゆる老鐵山や、清らかな田園町とも見ゆる新京街の遙か彼方に爾靈山などを眺め、予よりて之が說明をなす。

人々が納骨祠を拜して此大戰に斃はれたる同胞、10萬の靈に眞心こめて祈りを捧げつゝある間を予は先行して一行に代り關東廳を訪問し、今猶健在齋賦中の舊知、更に事變以來種々の施設や調査に多忙を極めつゝある人達と會見し、暫し愉快に語ることを得た、元の住家に歸つた樣な何とも言はれぬ心持であつた。

一行の後を追ひて爾靈山に登る。此山の戰歷は又語る迄もない、繰返へす迄もない、我等國民の腦裡には必ず深く印象せらるる所である。茲處に寫眞師にして案內人なる某よく事歷を解して懇切に指示說明してゐた。此說明が母國の神社佛閣の案內の樣な興太のない至極眞面目なものである事は處柄とは言ひながら嬉しかつた。

曾つては努力して生育繁茂せしめた松樹を戰歷を語るの便宜上、又舊蹟保存の必要上或程度迄採伐した事も精神的訓育方面から見て當然と思つた。

幾組の人達は每日此山に登つてゐる。苦熱金をとかす暑き日も極冷骨を刺す寒き日も斯樣にして絕えず登臨して其神身に深く犧牲精神を養ふ人達の絕えぬ間こそ我祖國は絕對に安全である。

山を降りて再び新市街を通過す。茲處は其市街の規模に於て全く露治時代の姿を留めて居る。思へば明治37年の2月6日旅順港に我驅逐艦が夜襲を決行せし時、露軍の將士等が踊り狂ひつゝあつたと言ふ「パレルモ」は今日關東廳高等女學校の講堂として存してゐる、其南隣には當時東洋第一の名を揚げてゐた「マスケウイツチ」の寫眞館が今は其校舍の一部として存してゐるなど回顧の種はつきぬものがある。

此處には關東廳の博物館があつて、滿洲支那研究には見逃す事の出來ぬ内容を有しているのであるが、時間の都合上之を逸したのは惜しき限りであつた。

旅順は聖地である。閑寂の町であるだけに思索研究にふけるには絶好の場所である。滿洲に於て事をなさんとする者は先づ其本據を旅順に置きて、一切の文献其他による準備調査をなし充分愼密なる計畫を樹てたる後奥地へ進出するのを最善の策と考へる。

旅順の地は風光明媚、氣候溫和（比較的であるが）靜閑、絶對安全、而して負擔輕く茲處に住む人々が大多數は關東廳や關東軍の關係官衙學校等の職員であるだけに現實に眼前の營利經營的生活をなしていないだけそれだけ「のんびり」して居るのである。

現に大先覺者の大谷光瑞さんは此地に本據を構えて將來滿蒙の天地に活躍すべき若き使徒を養成されているのである。

黃金臺の大和ホテルに於て關東廳内務局長の招宴を受け茲に再び廳員諸君と會合種々の意見交換の上、途上龍王塘の貯水池（大連水道の）を一見、清水土木課長の穿井給水に關する最も有益なる研究内容を聽取し、一路坦々たる道路を星ケ浦を經て大連に歸着す。

今日は實に此地方の黃道吉日と見えて此一周の途上幾組かの滿洲人結婚の行裝を見る。滿洲を語る風俗の一端はゆくりなくも我等の眼前に其錦繡の車馬で展開せられたのは面白い事であつた。途上黃泥川の部落で村芝居の興行せられ地方民の群集していたのも又良き看物であつた。

大連歸着大和ホテルに入り旅塵を拂ふ隙もなく直ちに大會、夜十時遼東ホテル再宿。

（ハ） 大連より鞍山迄

8月15日　午前9時大連發列車「はと」に乘る。多數關係諸氏の見送りを受け岡會長、石田書記長に同行せられて北進す。

博覽會の開催中、又觀光視察團等の蝟集し來れる季節とて車中滿員、從つて一行分散して其席を纏むる事を得ず。よりて車中より沿道の風物景觀事象の指示說明をなす機會を得ざりしは更に遺憾なりき。

金洲城、大和尚山、三十里堡、普蘭店、石河など指呼する餘裕もなく通過す　普蘭店は往年日露の戰役の初頭我一軍が皮子窩方面より上陸して、茲處に其先遣部隊を進出せしめ敵軍の旅順大連方面との連絡を中斷しつゝも極東總督亞歷征夫の一行を脫出せしめたる處である。

當時威風颯爽堂堂として南滿洲に君臨し、東亞を睥睨し手を朝鮮に伸して日本何者ぞと

傲嘯し居たる彼が、一夜旅順の夜襲に驚きあわて、博愛仁慈の赤十字の旗を樹てつゝ茲處を駛走脫出したのであつた。由來正義人道とか博愛仁慈などと云ふ言句は純眞正直なる我日本國民をして屢々對外的に屈讓を餘儀なからしめた美辭であつたが、此時の我軍も又其旗影に「アレキセーフ」一行の躍るゝ事を知るや知らずやゝみやみや彼を脫出せしめ、此長蛇を逸したるが爲に戰局を長からしめたものである。

考ふるに王道國家、義勅などと云ふ言葉で長城線を超えぬ約束をするのも猶宋襄の仁に過ぎぬのであらう。王道に極限があつたり、正義に國境があることは實に異しき限りである。心すべきは此王道國家などと言ふ辭句で自ら拘束せられぬ覺悟の程である。

金洲城、李蘭舖の古城、石河城、何十里堡と稱する丘山上の烽燧臺など滿洲の南部にも史蹟建築は相當に多いのである。

茲處で我等の注意すべき一事は明末に際して倭寇が屢々此邊境沿岸に進出して來て居る事である。此倭寇は德川氏鎖國の政策確立と共に消滅したのであるが、海外通商の挺進部隊として相當膨張發展の路を開拓しつゝあつたのに惜しい事であつた。彼等に盜賊の汚名の冠せられてゐる點は史家としては是正すべき事柄であらう。

猶金洲より皮子窩を經て城子疃に達する金福鐵道の存在を記憶し置くべきである。此鐵道は必す近き將來に黃海海岸を安東縣に迄延長連絡せしむべきものである。よりて沿道の農漁村は大に開發を見るべく以前の中立地帶にして、最近三角地帶として匪賊の逃避場となつてゐる山岳地帶の礦山の開掘や又特別なる拓殖事業の進展の基礎たらしめ得られやう。

無論此鐵道と更に安東より岫巖汎木城を經て大石橋に通ずる一線の布設によりて此邊の匪賊は全く其隱れ家を失ふに至るであらう。南部滿洲の安全の爲にも此交通政策は早く確立實現せしむべきであらう。唯北にのみ進出するだけが日本國民の使命とは限らぬ。

時間充分ある旅行者は必す熊岳城に下車して其農耕の施設を見るべきである。其河の溫泉に浴して、滿洲にも又砂湯の存する事を知り而して其環境が如何に人間の氣宇を大ならしむるかを體驗して見るべしである。

果樹園を訪ひて此地特產の梨果を味ひ望兒山に登つて、近き渤海に眼を走せて滿洲國の海を觀よ。蓋し此下流河口一帶は渤海漁業の重要なる一部をなすからである。

大石橋に「マクネサイト」の世界的礦山あることは又說くを要せぬ。此地の娘々廟の祭はたしかに一奇觀である。

茲處は營口への分岐點である。此營口こそは日露の戰役迄は滿洲唯一の開港場であつて爰に英米人等の通商基礎は置かれてあつた。不思議なる程危險な暗流を有する遼河の河口なる此港は冬季は氷結して其用をなさぬ處であるから大連の繁榮に反比例して其港灣價値の減少を見た事は蓋し不得止事であるが、猶滿洲國の一港として廣濶なる遼河一帶の農耕の進步改善によりて將來あるものであらう。此河の對岸に奉山線の支線が延びて居る河北

の停車場がそれであるが現在滿鐵線は此河を渡つてゐない爲に直接の連絡はないが稍遠い將來には南滿地方より河北省への近き路として架橋の事も行はれやうか。

海城附近から滑石の良礦が産出せらるゝ事を注意し置き、茲處に海城の字ある事と南部滿洲の地理的變遷が語られてゐる點を記憶し、北進して湯崗子を過ぐ。

滿洲に湯山城（安奉線）湯河沿（太子河の上流）など湯の字にて冠稱せらるゝ地には溫泉が湧出してゐる。湯崗は實に其一つであつて、其溫泉場の規模壯麗、茲處に投宿して旅塵を洗ひつゝ春秋は千山の景觀に雄大奇峻なる山容、變化多き寺觀を眺め、或は鞍山遼陽に往復して新らしき工業古き歷史を調査するも宜しい。

斯樣にして旅行してゆけば滿洲の春より秋迄は全くの樂土である。

（ニ） 鞍　山

鞍山は今其製鋼所によりて著聞してゐる。茲處には東西に對峙する鞍狀の山ありて其名となつているが此兩山始め之に續く多くの山々が皆悉く鐵鑛である。

此鐵礦は日露戰爭後早くから發見せられてゐたが其開掘製鋼の始められたのは實に世界戰の中ばからである。理由は貧礦であつて採算上の價値に疑問があつたのと、此開掘に當時の支那官憲が同意せざりし點であるが、我等をして言はしむれば技術的には研究利用の熱が足らざりし事と、政治的には日本政府及び滿鐵の腰弱くして彼に充分の說明理解を與ふる事をなさず、力を以て押すだけの勇氣がなかつた事であつた。

事情は兎に角今や貧礦の處理方法が完成し南滿洲鐵道株式會社の直接の經營の手より昭和製鋼會社に移つてゐて、現に 30 萬瓲の製産能力を出し將來之を 100 萬瓲に迄擴張する見込を立てゝゐる。

13時何十分（南滿洲鐵道では 24 時間制を採用してゐる）鞍山に下車、製鋼所の人達に出迎へられて一行其事務所を訪ひ茲處にて其沿革、礦山、處理、製鋼等の說明を受けて構內を一巡す、規模宏大平野に突立つ幾多の煙突の吐く煙り、幾十條の鐵道に動く車等々滿洲に於ける工業資材としての製鋼は充分の餘裕を有し完全なる供給に萬遺憾なき計畫は着々として進行しつゝあり依て我等の祖國と與國は共に平和と戰亂と二つながらの場合其鋼製品の不足を感ぜぬ事となつたのは實に幸福である。

巡視中驟雨の一過した爲に充分に構內の諸施設を見ることを得ざりしも、茲處鞍山は純工業市として洋々たる將來を存し、學校に病院に其關係在住民の爲の生活機構は建築も、道路も着々整備建設せられつゝある。

西鞍山の南中腹に寺觀あり、東鞍山の下安子河畔に一小城がある。此邊は遼陽と共に漢時代には相當開發せられてゐた處で、朝鮮で樂浪の郡治が隆盛を極めてゐた頃支那本土と陸上の交通は此邊を經て山岳地帶を高麗門方面へ拔けたのであつた。從つて其時代の遺跡が往々にして發掘せられる。無論此邊の露礦も採りて用ひられた形跡がある。

（ホ） 首山堡、遼陽

日露戰橘中佐で有名なる首山堡、唐の太宗が其鞭を留めたと傳へられる首山頂上の巨石、それを車中より眺め遼陽の白塔を仰ぎ見てゆく。

此塔は我建築界にも古くから知らるゝ所の著明建築である、下車して充分視察するの時間なかりし爲、滿洲代表の古建築に接し得ざりしは遺憾であつた。

此遼陽こそは滿洲第一の古都であつて、古く寂びれて居るが我國の奈良を思はしめるものがある。城内を巡りて古豪の家屋敷や寺觀等を歷訪して行くとなかなか面白いものを見得るのであるが。今遼陽は其滿鐵の機關庫が蘇家屯に移されたが爲殆んど空虛の街となつてゐるが、玆處の利用方法こそ考ふべき一事であらう、南部滿洲の農業研究設備をなすも一方法であらう、又日本人移民の實現教育をなす事とするも面白からう。

（ヘ） 煙臺、沙河

煙臺には日露の役我大山大將の總司令部が置かれてあつた、沙河の遭遇戰は兩方勝敗なきものであつたが、それ等の戰跡は車の進行すると共に尤も近き路傍に標示せられて指呼に便せられてゐる、遠く其記念碑を見る事も出來て往時を追懷するに充分であつた。

鞍山より奉天迄三等車に乘り緩行を幸ひとして過去の戰蹟を指呼し西方に赤い夕日を眺めつゝ北へ進む。

蘇家屯、玆處は遼陽にありし滿鐵の機關庫設備が一切移されたるが爲に、新たに堂々たる鐵道街が出來て、學校あり病院あり繁榮の姿を現はして居るが、其反面に遼陽の附屬地は火の消えた樣な形となつた。

蘇家屯の經營は滿鐵始まつて以來の宿題であつたが時機至らざりしが、其實現が遂に25年の後となつた。安奉線の分岐點でもあり、撫順線との關係もあつて鐵道經營方面では重要な地點である、從つて此大規模の建設を見た事と思ふが、寂れゆく遼陽附屬地の姿はまことに有爲轉變の「はかなさ」である。

渾河（撫順線の始點）を過ぎて奉天に入る。滿鐵地方事務所や滿建協會、土建協會の支部の方々の迎接を受け、これに挨拶そこそこに瀋陽館に入り、更に關係の方々の來訪を受けて明日見學の行程を定めて一宿す。前年本會の編輯事務を執りつゝありし鷹田君の來訪を受け、其事變以來の活躍談を聞き更に其奮鬪を希望して袂る、斯くて今日の一日は甚だ愉快なりし。

（ト） 奉天の一日

8月16日　朝8時行を起す。先づ忠靈塔を拜す。滿洲に於て國家の爲犧牲となれる英靈を祟る塔は旅順に白玉山の忠靈塔あり。海軍技術者の手になれるものなるが、其形式伯林「チーヤガルテン」の記念碑其儘なりとも評せられた事ありしも、兎に角其形式は整つたものである。之には何等日本的建築精神の加はつて居ないのであるが、其土地柄左迄異樣とは見られて居ない樣である。此山には二つの頂があつて、塔は實に其南端の上に位し、而して其北の峯頂には納骨祠が建てられてゐる。

此納骨祠こそは其名の示す通り忠死者の骨を收めた處、日本領有後早くに出來たもので小規模ではあるが神殿の形式を取りたる石造である。從つて其前に鳥居も樹てられてゐるが、此納骨祠と忠靈塔は別々にも又相關的にも餘り妙な感じを起さしめない。

大連中央公園內の忠靈塔と此奉天の忠靈塔とは姉妹建築であつて以前に存せし矮少紀念碑の代りとして軍部の手に成りしものと聞く。なかなか立派である。但し建物の批評は忠靈に對して不敬とは考へられぬから玆處に忌憚なく一言すると 20 年の昔ならば兎に角、今日斯る形式表現を見やうとは思はざりし、寫眞で見て妙なものだと考へて居た物を眼前に眺めた感じは甚だ不滿足であつた。日本に於ける記念建築は大分に進歩してゐる、幾多懸賞の上實現せられたものもあつて、其中には一向贊意を表し難いものもあるが、又大に整つたと見るべきものもある。然るに此忠靈塔に於ては何等日本精神の表現がない。忠靈に對する記念的形式の體現がない。日本精神の維持發揮擴張に最も熱心なる軍部の手に於て如何なれば斯る建築が行はれたものかと甚だ奇怪に思ふのである。

玆處に我等建築家が考ふべき事は其對社會的位置で、其創造精神が國家の現狀と將來と理想と現實の上に非常に重大なる關係あることを明確に透見して居なければならぬ事である。總理大臣の官邸が「カツフエーオラガ」の名で呼ばれた事は一昔の話であるが、以來悉くの官廳が新味と俗臭で其官衙と云ふ國家建築の精神表現を喪つてゐると共に國民精神に浮薄輕佻さを加へつゝある事も又一考せねばならぬ。

南滿洲醫科大學の屋上に立ちて伸びゆく奉天附屬地を觀る。市街は正に渾河迄つゞかんとしつゝある。鐵道の西方には工業地帶が其將來の發展を期して整備せられつゝある。飛行場がある。東方には商埠地が又一大發展を示しつゝある。十年の前とは大變化である。

實勝寺を觀る。喇嘛教の總本山で黃寺と稱せらる。此寺と後に見た法輪寺などは何れも其規模は大でないが一樣に整備して居て、其殿堂だけの規模は平安朝以後の日本の佛寺に比して寧ろ優つてゐる。

滿洲國の宗教建築に淸眞寺がある。回教の建物で、其一つ一つの形式は佛寺、道觀などと特別なる差異がない。唯此教の特徵として淸眞の二字が表示する如く內容に一切の虛飾を斥けて出來るだけ其所謂淸眞味を維持して神に禱る點である。其禱るに際して先づ身神を喫めゆく設備など、自我利主張の支那民族中よくも此教の行はれた事と思ふ。

奉天に於て見るべき施設の一は同善堂である。所謂鰥寡孤獨を收容する處であつて、建物こそは貧弱であるが、我國の同種の施設が多くは賣名的職業的に墮して慈善の眞意より離れつゝある時、曾つては橫暴專恣を極めつゝあつた張家二代の統治下に於て、よくも此献身的事業が續け行はれた事と感心する。

此施設は日淸の戰役に平壤にて戰死したる淸將左寶貴の邸宅遺產を基として出來たもので、あらゆる生活の落後者を救濟してゐるのであるが、孤獨殘廢全く自ら奉養し得られぬ者等の爲には最後の樂土である。

見ゆきて我等は其施設の悉くよく整へる様に經營者の勞苦に感謝したと共に支那民族性に我等の考へ及ばない特殊のものある事を教へられた。

商埠地より城內に通ずる道路が見違へるばかり立派になつてゐる。殆んど汚穢の臭氣なく、砂塵の揚がるを見ない位である。但其細經支路が舊態の儘なる事は言ふ迄もない、此點は我國も又同樣であるから敢て難ぜられぬ。

奉天城壁を繞る外部の陋巷が一掃せられ、其城壁や門が修理せられ、城樓の或物は撤却せられたなど餘程の變り方である　從つて城內又よく整ふ。故宮の博物館は其內容よりも清朝初期の建築として見るべきである、無論北平に存する宮室に比すれば甚だしく小規模のものであるが平坦の地に建築してよく高低の變化を見せて居る點は北陵同樣其建築技術の一特徵であらう。

東北大學の構內を通過して北塔を見る。此堂々たる大學の構へ、其校舍官舍等、張家繁昌時代の面影は徒らに丈なす蓬艸に埋もれつつ其の運命をかこつかに見ゆるが、いづれは再興せられて滿洲國の大學府となる時も來るであらう。

日本と滿洲國は宜しく此施設を善用して亞細亞興隆の根本使徒養成に急ぐべきである、と思ふが如何にや。

北郊の喇嘛塔は博覽會で模型を見るよりも其眞物一見の價値を思ひて來たものである。夏艸の生ひ茂れる中に稍荒廢の姿を聳立せて居るが煉瓦造塔婆建築に一種の藝術味は充分あるを覺えた。

奉天觀光の第一の目的物は何人も知るが如く北陵である。此陵墓の建築價値は贅說する迄もなく周知の事實である。曾ては特別に拜觀を許され、其看守人から謝儀を强要せられたのが今は殆へど公開的に參拜せしめられてゐる、ただ其正門前の外濠に架した橋を狹しとして取擴げて其舊觀を破壞したのは甚だ惜しい。車馬の交通に必要の範圍で一日も速やかに舊態に復して其統一美を發揮する樣なすべきである。

見ゆきて隆恩殿の廊に憩ひ岡君の實測研究による說明を聞く。支那の建築家の着想が創造的に我等より優れたるものある樣な感じもした。蓋し四千年の歷史は此建築精神を彼等に與へたものであらう。

茲處にて晝食休憩の後更に城內に入りて吉順絲房の屋上より此城廓市街を觀望す、張家の邸第高く南空に聳ゆるが其姿實に寂びし。渾河や東陵や、今見來りし北陵の綠かすむ樣なかなかに宏濶なり。

更に車を驅つて北大營にゆく。正に二年の前柳條溝の鐵道爆破を機として我極少部隊の奮鬪力戰して王以哲の大軍を蹴散し占領したる處、今僅に我軍の手に守られて營庭雜草繁り狗子此亡國の怨を知るや知らずや其處に戲る。

茲處にて當時の戰歷經過の丁寧なる說明を受け我等の印象を新たに深くして出づ。國軍將士の勞苦洵に感謝に堪えず。

郊外の道路も又馳驅によく、眞夏の光强けれども、身に烹熱の苦感なく、荷ひゆく農夫の爪熟して甘さうなり。曾て物議を起したる楠原農苑の水田も稻の生育良かりし。

更に市中に歸りてヤマトホテルに小憩の後徒歩して某飯店に於ける有志の招宴を受く。新知舊友其奮鬪努力に感謝の意を表し歡談暢話、宴果てて更に市中を漫歩し夜十一時半北行す。

奉天の一日は餘りに忙がしかりき、其歷史、史蹟、市況等我等に教ゆるもの甚だ多きに係らず充分之に觸るることを得ざりしを惜しむ。

今や滿洲國は其首都を新京に奠めつつあれど瀋陽の產業生命は之より大に伸張展開すべし、水、石炭、電力等々の悉く豊富なる處其工業的位置は他の求め得ざる所なり、茲處に忍耐持久して今日迄の地盤を築き上げ來れる人達が更に奮勵して其基礎を堅實ならしめん事こそ望ましき。

事變以來滿二年、更に我等の記憶に新たなる柳條溝を間もなく通過して一路北に進む。

8月17日　夏の夜は早く明けたり、滿洲の野は進みゆくに從ひて其雄大性を展開し來る　過ぎし日魯の戰に於て兩軍が最後に對峙したる昌圖の一線を超え、休戰條約の締結せられたる四平街を過ぐ。

此處より佛南を經て昂々溪に至り、更に北滿鐵道を橫斷して齋々哈爾より克山を經て大迂回して松花江は哈爾賓の對岸に達する鐵道は既に全通し居れり。又通遼より南下して打虎山を經て錦洲朝陽と熱河省に入る鐵道もあり、交通機關の整備せらるると共に滿蒙の地は倍々開發せられゆくなり。

公主嶺には滿鐵經營の農事試驗場ありて、小麥の改良や、緬羊の飼育試驗が熱心に行はれ、依て將來の日滿の羊毛問題が解決せらるべく努力せられつつあり。

此處一帶の高臺地は南北滿洲の分水嶺をなし、南の水は遼河に落ち、北の水は總て松花江に集りて更に黑龍江に合流す。

（チ）　新京の一日

午前8時過ぎ（滿鐵にては 24 時間制をとりつつあれば午前午後の區分なし）新京に着く。滿洲國の相賀君を始め多數の舊友新知諸氏の迎接を受け停車場待合にて小憩改裝して先づ國務院を訪ふ。

14日聯合大會決議の內容につき、總理鄭孝胥先生に會見交話する事約30分、記念の撮影をなし新興國家の倍々隆昌ならんことを祝して退出。

需用處營繕科について相賀君より滿洲國の建築事情を聽取し執政府を外部より眺め、引返へして寬城子に向ふ。

前夜降雨ありて途上泥濘深く、淺き丘陵の低地にて「バス」の車輪瀕りに空轉して進まず。止むことを得ず下車して徒歩す。此邊より路傍に點々として立つ所の曾つての寬城子攻擊の際戰死したる我忠靈の墓標を見る。



新京に於ける一行……胥國務總理との記念撮影

寬城子は全く露西亞の如し。其建築施設と其人々と現在新京方面のそれとを對照して一種特別の感あり。茲處は北滿鐵道南部線の第一停車場にして日露の役以來戰客を鏖へ居たる露軍の兵營は張家の軍によりて占據せられ常に我附屬地を目標として南嶺と挾撃の態度を示しつつありしを奉天事變の翌日南嶺と共に我軍によりて更に奪取せられたるものなり

此寬城子攻撃は夜明けて後行はれし爲、新京寬城子間の地隊横斷に無理なる戰をなして意外の損害を受けたる處、晝食の後其兵舍を訪ね其戰歷を聞き其處に散在する二十勇士の墓に慰靈の眞心を捧げ追懷の念深し。

露西亞料理は其「ザクツカ」即ち前菜に特徴を有す。美味にして頗る多種多樣、性急なる日本人が之を飽喫して其本料理を充分に味ふ能はざるは體質の相違蓋し不得止ものなるか。此點支那料理又然り、佳肴珍味幾十種を後より後よりと運び來るも遂に滿腹して又食指の動かざると同じ。

色食は性なりと古へ支那人の訓へしことあり。飽く迄生性の滿足に努めて成就せしめたる支那歐米の文化施設を模倣するは國情傳統を異にし、今後非常なる奮勵努力をなして國運を展開しゆくべき日本人の心すべき事とす。

午後建設中の國都を大觀しつつ其第一廳舍の屋上に立ちて雄大なる新京の規模を見る。此地伊通河の流れあれど、平素水量尠なく、四望濶決にして遠く東方に石碑嶺の姿模糊たるものの外全く山なし。

山容水態の美を愛好する日本人には此地形には飽き難き處あれど、其緩るくして大なる波狀傾斜を巧みに利用する事によりて頗る面白き「プラン」は建てらる。

蓋し國都建設局の技術者諸君はよく此點に留意して其大建設に最新最優の大觀表現に努力せらるるならん。國家を表徴する此建築事業や實に重大なり、關係諸君が深甚の關心を以て千百年の後人の笑を受くる事なき規模を定め、決して功を急く事なく確實に其表現に

盡くされむ事を希望する也。

茲處にて國道建設に關する說明を受け、滿洲國の建設工業の多種にして復雜に、其計畫の甚大なるものなる事を知る。

第二廳舍は其外貌のみを見たり、第三廳舍は今計畫中なり。廣場を中心としたる此官廳群は個々の建物に幾分其形貌を異にす。營繕科諸君の設計上の苦心努力は異日其光彩を發揮して燦然と輝く日あらん。一年を通じて氣候の關係上最も有効に安全に施工し得べき日子の僅に四ケ月なる處、我等の體驗し得ざる苦心は此間に拂はれて其偉觀は成就せられつつあり。

關東軍の廳舍官舍、新京俱樂部、家族住宅、組合住宅、滿鐵社宅等の泥濘建設中の道路を馳驅して見廻る。

今日我等は幸ひにして滿洲の雨が建設事業に如何に甚大なる障害をなすかの一端を體驗し得たり。此降水によりて材料の運般は非常に阻碍せられて爲に建設の工程を遲滯せしめ其損失の大なる事は常に關係者の苦しむ處也。

午後六時より大和ホテルの招宴に列し、席上打解けて種々所感を語り希望を述べ歡談時の過ぐるを知らず、此地在住諸君の健鬪の姿を深く印象して一夜を列車ホテルに明かす。（列車ホテルとは一等寢臺車一輛を停車場側線に入れてホテルに代用しつつあるもの。新京には現に增築中の大和ホテル其他の旅館あれど、旅客滿員の故に滿鐵會社に於て特に此便宜の設けあり、氣分なかなか宜し）

茲處より東して吉林、敦化、會寧を經て北鮮羅津方面に通ずる鐵道ありて今其功を了へたり。又吉敦の中間より哈爾賓に至るの線路あり。近き將來に於て日本新京間又は日本哈爾賓の間は其行程に一日を短縮せられ其交通は一層便利となり、北滿の開發は一段刮目に値するものあらんとす。

吉林は滿洲中舊都の一にして後方の山、前面の水、正しく日本的にして其春秋の眺望頗る美なり。此處には滿洲旗人貴紳の住む人多く其風俗又甚だ優雅也。滿洲見學の人々は必ず此地を訪ひて其凡俗化せざる古き姿を觀るべき處、此行餘日なかりし爲茲處に一日の往復を遂げざりしは甚だ遺憾なりしが、餘日ある旅行者は必ず此線によりて北鮮に往復して其山岳地帶の原始林光景などを目堵すべく而して又其富の大きを知るべきなり。

（リ） 新京より哈爾賓まで、其二日

8月18日　朝9時新京發北滿鐵道の汽車に乘る。露西亞人の手になれる此客車其規模更に大にして我等に一層の宏快味を感ぜしむ、蓋し其車幅は5呎を出でて世界中最大のものなり。上下二段の座席は嚴重に其收容員數（一室4人）を限りて、座席券ある者の外は絶對に之を容れず、如何に權利が確實に守らるるかを知る。

新京より北は其自然更に雄大にして大陸的氣分橫溢す。一望廣濶の平野の間汽車は殆んど一直線に北進す。野原と邑落と、而して驛站との外河と大波狀をなす臺地あり、河岸近

くには可なり廣大なる沮洳の地ありて我等に猶可墾開發の餘裕あるを思はしむ。

大連を出でてより此行程一個の隧道なく、河を渡りては熊岳河、沙河、渾河、及び松花江位のもの、鞍山を出でて北すれば西方に又山なく、遼河地帶一望坦々として殆んど際涯なく熱河省境に山ありと知るの外其形を見ず。

如斯の光景は變化に乏しくして稍索漠たりと雖も今は野山共に悉く青くして其障害なき眺めは頗るよく、我等は今は大天地の懐に抱かれて氣宇覺えず大なるものあり。

双城堡停車場の建築は他の露國風建築の間に伍して獨り新らしく支那風の輪奐の美に輝き居れり、之れ特殊なり。

松花江の流れは陶賴昭の北より一旦西流し漱江を合せて更に哈爾賓に至るもの、緩徐なる流れ其色濁れども洋々たる姿は我國に見る事を得ざる處のものとす。

車中に晝食し（急行車なく、又夜行車なし）て午後3時過ぎ哈爾賓に入る。

哈爾賓は實に北滿第一の大市場にして、往年露國は茲處に大市街を建設し其當時の東清鐵道は茲處を中心として東西に兩翼を張り又南の方遙に大連旅順に伸張して實に滿洲を掩有し遙に西伯利亞方面より其大なる翼を擴げ來りて蒙古支那本部を席捲せんとするの勢ひを示し居たり。

帝政露西亞の隆々たる勢威と其東方經略の魔の手は我國策と相容れずして遂に戰端を啓く事となつたが、それでも世界戰迄は其强權を維持して北滿洲を掩有して更に雄飛の機會を狙ひつゝあつたが此覇業は滿洲國の成立によりて遂に頓挫するに至つた。

今日哈爾賓驛頭に立つた我は其處に新らしき日滿の國家を見た外、たゞ露西亞人の此處に居住しつゝある姿を見たゞけで其堂々たる威容は又認むることが出來なんだ、思ひなしか彼等「スラーヴ」族の影は寂しかつた。

驛頭多數の人々の出迎に接し、直ちに行動して先づ志士の碑に謁す。往時を追懐し沖横川以下の烈士が國家の爲拂ひたる犧牲が今酬はれて此墓碑が我等同胞の手で完全に保存せらるゝ日のめぐり來た事を喜ぶ。

哈爾賓の臺地に此志士の墓碑は其形式以外に輝いてゐる。其形が整はぬ簡素のものであるだけに其精神が生きてゐる。茲處に忠靈に對する墓碑の建設に如何に精神表現の重要性あるかを思はしめられた。

空に飛び交ふ飛行機、土民の集落、露人の部落などを通過し、博物館を見る。此規模は大ではないが其所藏は相當なものがある。思ふに此博物館こそは日滿興隆の教育資料として速やかに擴張整備充實せらるべき文化施設中の重要なるものゝ一つであらう。

哈爾賓の市街は埠頭區と傅家甸との二部より成り之に鐵道の附帶施設を加へて可なりの大きを有してゐる。

此埠頭區は露人の經營したる處にして街の中樞をなし、所謂大厦高樓の櫛比する處であり日露の諸商店等は大抵此處に存し「モデルンホテル」も秋林洋行も其他各種の店舗旅館

等が含まれ、傅家甸は支那人街として往時は頗る矮陋な不潔さを見せて居たが今堂々と生れ變つてゐて、此處に滿洲國人の經濟的基礎は確實に築かれて居るのである。

東支鐵道（即ち北滿鐵道）本社や其倶樂部等の堂々宏麗の建物、ミルレル兵營や又此地に存して特殊の意義に生くる露西亞寺院中に巍然として峙ゆる塔など車上の馳驅中より大觀し、更に孔子廟に張家の覇業建設形式の跡を弔ひ、極樂寺に珍らしくも滿洲國僧侶の多數の讀經せる姿を看る。

由來支那には道教（老子を宗とする）あり、孔子廟あり、娘々廟あり、天后宮あり、關帝廟あり、城隍廟あり、而して又佛寺あり、回教寺あり、更に基教寺院あれど、支那民族の宗教心は我國民等と大分に懸隔あり、寺院は興隆せられつゝ同時に頽廢してゆくものなるが此等の有樣は他に似ずして淸かりき。

日本人小學校の增築工事を一見し公園に少憩し、市中を見學しつゝ日滿倶樂部に入り、滿洲國市政公處や滿鐵事務所や其他の關係諸賢の招宴に列し、種々なる建設的事情を教えらる、中に前年大洪水の際列國領事其他の明目張膽の中に傅家甸の大浸水を救ひたる苦心談あり、日本技術者關係者の一致團結して此幾萬民衆の生命財産を塗炭の苦しみより救ひ出したる義擧に今猶居住民の感銘深きものある事洵に當然なりと聞けり。

吁爾賓の夜は又特殊の情趣あり、曾遊の地とて予は其處に足を運ばざりしが同行諸子はこの訪問を忘れず。

8月19日　朝9時より松花江畔に出で江を下りて新橋架設工事の現場を見る。曾て工原なりし對岸には赤き瓦根青き瓦根の邸宅等の構え成りて更に市街は其處にも建設せられあり。中洲には丈なす蓼艸など今其花眞盛りなり、「ヨツト」「ボート」鉄魚の日滿魯人あり、濁れる水には魚群棲みてよく釣上げらる。この濁れる水が更に洗濯用に用ひらる。滄浪の水澄まば我纓を濯ふべきを松江の水は濁りて彼等の衣を濯かる。淸きの中のみに棲まざる彼等の心境こそ我等の考ふべき所なれ。

新橋の規模、工事計畫、保安等に關係者の努力苦心甚大なり、平和の施設は茲處に堂々として具表せられつゝあり、匪賊の跳梁も久しからずして斯文化施設によりて一掃せられむか。

再び江を遡りてヨツト倶樂部に晝餐の饗を享く。2日の間地方有志諸氏の懇待心遣ひ非常のものあり予等衷心之に感謝して第二の故郷は更に懐かしきものありと知りぬ。午後3時より市中散策自由行動に移る、今日は土曜日なり、秋林は午後店を閉ぢ、他も又3時迄を晝の休憩時となし居て買物等一寸不便なりしが、此種々なる事態に遭遇したるは又何よりの收獲なりし。再宿す。

8月20日　朝9時半出發南下す、前日申込み置きたれど旅客滿員にて3等車に乘る。15日鞍山より南滿洲鐵道の3等地方車に乘りて蒜臭き滿洲人と雜居した我等には3等とは言ひながら其宏大の規模なるに見驚きつゝ同じ野原を走りて北滿平野の姿を確實に腦裏に印

象す。

午後3時半新京着、茲處に再び相賀君其他諸友の出迎を受け換車の1時間を喫茶し、休憩し、更に交話し、語りて盡きず。4時半孫車岡君は一兩日を此地に居殘りて更に調査すとて袂る、連日の同行案内其心勞感佩に堪えず。

車は改まりて其貌清く明らかに、我等再び晴天に遇ひし心地して愉快に南行赤い夕日の滿洲を心ゆくばかり眺めつゝ夕刻奉天に入りて再宿す。茲處にて又上木君其他の迎接を受けたり、好意多謝する處也。

（ヌ） 奉天より撫順往復

撫順往復を愈々明朝として一夜を驛前の大丸旅館に過ごす。此地も又旅客滿員の盛況にて、從業員等午前2時に就寢、同じ5時には起き出でゝ一番列車の客を送ると云へり。よくも身體の此過激な勞務に堪ゆる事かなと思へど、戰陣にあり生命を賭しての奮鬪に比すれば猶精神的には充分の安慰あらんか。

8月21日　午前8時發微雨の中を撫順にゆく。地方有志の方々の案内によりて先づ炭礦事務所に入りて、此炭礦の歷史現狀を聽き其模型等を見る。次に古城子の露天堀の壯觀を見る。此事業我國にありては到底想像もなし難き處、幾百尺の厚さを有する石炭層を高さ10米宛の階段として先づ上部の土をはね、更に其油貢岩を剝ぎ、次に炭塊を採る。斯くて最下層の炭迄堀りつくす作業なかなか大規模にて頗る壯觀なり、機械技術は遺憾なく此事業に其威力を發揮して又餘す所なし。

去つて油貢岩の搾油工場を見る、炭層上部に盛らるゝ貢岩中約6「ペルセント」の油は全く搾取せられ加工せられて我國用に當てられ、更に其廢殘の土を以て「セメント」や煉瓦の燒成を見る、工業の進步今更ながら感嘆に堪えず。

撫順の工業施設は其發電所、「モンドガス」發生爐等將來奉天を中心として南滿洲に於ける起業の原動力をなすもの種々あれど雨ふりの故に一々視る事を得ざりし。

山陽樓に有志諸賢の晝餐に預かる、宴終りて永安臺等滿鐵炭礦の社宅群や、俱樂部の建築工事を一見、脚下に渾河の清流、對岸の撫順城、東方にかすむ長白山彙の連峯、西北に奉天の城衙等を眺め、我等の好める景致に飽かす時をうつす。

午後5時奉天に歸着し先づ休憩す。滿洲見學の最後の舞臺として更に市中に出する人達あり、此夜袂るゝ石田君や久保田君等と會食し、事變前後の模樣など種々其體驗談を聞き夜11時半愈々安奉線によりて我等は南滿洲を去る。

13日着連以來此八日間を、日夜に周旋し奔走して我等の視察に遺憾なき計らひをせられたる石田君等に對しては謝するに辭なきを憾みとす。

安奉線より其西部の山岳地帶には今も猶匪賊の逃避するもの多く居り、屢々生でゝ良民を害すと云はれ、依つて討伐續き行はるゝとか、我等一行は何の心配もなく安全に一夜を車中に寢ねつゝ此溪間を通過し、依つて本溪湖の炭田や製鐵事業、釣魚臺の景や、日本人

に好まるゝ此山峽を見ることを得ざりしは遺憾なりし。

8月22日　今日平壤に途中下車し見學せんことを期して安東縣を見す。

安東縣は鴨綠江を挾みて義州と相對し滿鮮の境なり。茲處には鴨綠江採木公司あり、製材所ありて滿洲側の材木は此河を降り來り陸上げせられ一部は滿洲に一部は日本及び南支等に送らる、又柞蠶の市場にして本線中の盖平と共に實に二大市場をなし、其製織も亦行はる。

1時間の停車時間中稅關の檢査あり、煙草の檢査などなかなか嚴重なり。此溪谷中鳳凰山、五龍山の奇勝ありて秋の景特に美く、五龍背の溫泉に一浴し、さて安東の狀況見物は一日を費す事又有益なり。

滿洲見學の行程

大連に上陸せば先づ必ず旅順を訪ひて茲に二三宿すべし。其戰蹟や、舊地や博物館等は充分研究するの値あり。老鐵山に登りて其絶大の「ドルメン」や渤海と其灣口と對岸支那本土を見ることは大支那を知る上に於て尤も重要なり。次に大連の工業的施設を見、更に金州に下車して和尙山に攀ぢて關東半島の地理的價値を極め其山容寺觀を見るべし。金福鐵道を往復し皮子窩に石器時代の遺跡を見、其鹽田を見、蕭家溝に歸りて其漢代遺跡を探訪すべし。更に熊岳城の溫泉に一宿し、大石橋より營口に入り、遼河の狀態を見て河を渡り、河北より溝幇子を經て錦州に入り更に南下して山海關に至り萬里の長城の一端に立ちて天下第一關が何を語るかを知るべし。

引返へして錦州より熱河に入り、出でゝ打虎山より新民府を過ぎて奉天に着くべし、斯くて遼西の廣さを知るべく奉天を中心として撫順、遼陽、鞍山等を訪ひ、湯崗の溫泉に一浴して積塵を洗ふべし。奉天より撫順營盤朝陽鎭、吉林に出で、新京を經て南下し四平街より通遼に至り北して洮安より索倫を往復し蒙古地帶の風物を知り、更に洮南より昻々溪齊々哈爾を經て克山、海倫、呼蘭、松浦に出で、哈爾賓に渡り、南下して新京に出で再び此國都の姿を眺め、茲處より農安大賚に往復するも面白からん。吉林に一宿して其山水の美を飽喫し、直ちに會寧の一線を行くも可なれど、拉法より哈爾賓に入り北滿鐵道を一往復し滿洲里ボクラニチヤナを貫通する此鐵道の價値を知る事も又無用ならず。

現在鐵道の通ずる限り、滿洲の旅は約1ケ月を以て稍完全に仕遂げらるゝ。唯滿洲の地遼陽以南旅順の南端を古く漢民族の遺蹟に富み北より肅愼、邑格、渤海、契丹、等の諸民族の興隆存亡ありて決して無人の荒野にあらず、遺利多けれど悉くが顧みられざるにあらず。旅行者が人文地理科學に廣く趣味を持して見ゆく時は悉くの物皆感興の種となりて日々の旅行其收獲必ず多からん。たゞの觀光遊覽の氣分を以て此地に入るは敢て不可なりと言ふにはあらざれど時務を知る者の爲すべき所にあらず、行く人宜しく充分の智識を豫備して更に現地に就きて深く極むべき也。

（ル） 朝鮮の２日

（1） 平壌の３時間

8月22日　朝7時半鴨綠江を渡りて朝鮮に入る。茲處に日滿國境のあることを意識し、宛がら母國に歸りたるの感ありて我等の心境に猶興隆大日本の自覺不足なることを痛感せしめ、衷心大に恥づる處あり。

朝鮮の野はよく拓けて其水稻の發育良し。山々の樹も次第に繁茂して 10 年の昔とは餘程其姿を更めたるを覺ゆ。ゆくゆく驛舍其他の建築施設が遙かに滿洲のそれと劣れる點あるを見たるは事情の差異蓋し不得止ものありしによるが。弟妹の國朝鮮の在來の農家の姿態など餘りに矮躰にして其處に興隆氣分を見ることを得ざりしことは我等の顧みて大に奮勵し、其向上發展に援助を急ぐ要ある所ならん。

たゞ鮮民の容姿、其衣服、略一定したる形式を維持しつゝある點は我母國民の生活形式の餘りに複雜にして混亂せるものに比して寧ろ優れたるものあることを思はしむ。

午後3時平壌に入りて下車し、府員に迎へられて直ちに其博物館を見る。此博物館は現に新築中にて假の建物に過ぎざるが、朝鮮の古代は此平壌の地にて語らるゝ處最も多く、見るべきもの又頗る澤なり。蓋し建築歴史に興味を有する人達には 2—3 日の滯留調査も猶充分なる研究を遂げ難きものあらん。

檀君朝鮮や箕子朝鮮は事餘りに古くして唯一種の物語りとしてのみ聞くべきか、此地箕子陵あれど後世の假托なりと言へり。從ひて多く顧みられず。

平壌の市府は衛滿入鮮以後確實に其地の尋ねらるゝに似たり。大同江の對岸2里の下流なる土城里には樂浪郡治の址ありて甎瓦の間無類の漢瓦當を見ると云へり。其一帶の丘阜に散在する１千３百餘基の古墳は當時の繁華を語りて其文化が如何に進歩して燦然と輝き居たるものあるを思はしむ。

我等は其遺跡を探訪することを得ざりしも博物館には此等の古墳より發掘したる瓦當、塼、磚、鏡、銅器、土器、漆器等を藏置して我等に益する所まことに多大なり。

館の主事より此等の遺物につき具懇篤なる說明を聽く。現に鴨綠江の上流滿浦鎭の對岸即ち滿洲國輯安縣東岡碑石街に存する高句麗好太王の石碑の拓本を見る。其傳ふる所の日鮮交涉の歴史は、我等の最も感慨深く回想したる所にして、實に允恭天皇の三年に建てられしもの、當時日本の勢力が全く韓半島を掩有して隆々たるものありしを思はしむるなり。

茲處にて漢時の古墳の塼磚木棺等の全貌を見ることを得たるは實に幸ひなりし、磚廓などは我等の冀に牧城驛に於て觀たるものと略同樣なり、其塼專の形式紋樣又一樣なり、唯其磚の特殊構造的に作製せられたる點は當時如何に造磚技術の進歩したるかを知らしむるものあり。猶滿洲のそれは古く盜掘せられて副葬の埋藏物を失ひ、よりて其時代の文化を推知する資料を得ざりしに反し、茲處には其所藏最も豊富なるものあるは我等の次幸とせし處也。

陳列の品々は悉く珍奇にして觀ゆきつゝ去りゆくに忍び難き心地したり。

市街を縫ひて牡丹臺公園に入り先づ建造中の博物館を見る。其規模や小なれど形式は良く整へり。たゞ今現に見來りたる博物館の列品を悉く滿足に收藏陳列し得るや否や聊さか內容の狹隘さを感ぜしむ。近く10月に入らば竣功する由に聞く。

錦鏽山の一角二龍臺上四虛亭に立ちて江山一帶の景致を見る、山靑く水洋々として對岸の樂浪の遺址など茲處には我等の求むる景觀ありて雄大なりとは言ひ難きも又得難き姿をなす。

此樓閣は六百年を經たる建築にして柱櫨無數の彈痕を有し過ぎし日淸戰役を追懷せしむるに充分なるものあり、敵將馬玉昆の死守せし所なり。

此戰に於て原田重吉の名によりて國民の記憶深き玄武門は實に此臺と牡丹臺の中間に存し穹隆形の小門に過ぎざれど相對峙して死生を爭ふ時其攻むるに難かりしや勿論ならん。

牡丹臺は乙密臺と對峙する處、日淸の戰、文祿の役共に古戰場なり。眺望絶佳茲處に設けられたる樓閣に最勝臺の名ある亦理なりと謂ふべし。

平壤の地は我母國にありては文祿、日淸の兩役にて比較的よく知らるゝ處、此兩役我軍は共に戰に捷ちながら其外交戰に敗れたり、而して其失敗の後が今日大犧牲を拂はさるゝ事となりつゝあることを思ふ時は如何に言論の重きをなすかを稽ふるの要あり。

商品陳列所分館に少憩茶菓の饗を受けて山を降り江岸を縫ひて四五の門樓等の古き建築を見る。

浮碧樓は一千年の歷史を有し、淸流亭は舊靜海門を移築したるもの、七星門は其創建時を不詳とするも古き影あり。奉天の同善堂の基を開きたる左寶貴將軍は實に此門外にて戰死したるなり。

大同門は五百年前の建築と謂ふ、江畔に巍然たる姿を持したる三層の樓閣なり、此門は昔時京城に通ずる唯一の關門なりし。

凍光亭の門に近き處にあり、茲處にて率直なる武將小西行長が姦猾沈惟敬と會商して其欺く所となりしと傳へらる、實に4百年前の建築なり。

是等の建築は確によく其江山と偕調して共に其美を保ちつゝあり、たゞ何れも保存充分ならずして廢頽しゆきつゝあるは惜しむべし。

朝鮮の古き都城建築は支那を宗として成れる所、其規模彼に比して遙に小に、其輪奐又更に劣れる事は蓋し國情の然らしめたる處か、左あれ今日其古き姿態を存して我等に2千年來の歷史を語るもの、宜しく完全なる保存方法を講ずべきあり、古き日鮮滿に共通する文化精神は今更に其範圍を擴大して日滿支に通じて大亞細亞興隆の爲に資かんとす、半島の文化が日滿支の間に因緣ある事まことに面白しと言ふべきか、3時間の見學に豫期以上の收獲を擧げ午後6時半發再び南行し續けて夜11時半京城に入り、朝鮮建築會の副會長中村君等の迎接を受け備前屋に入りて一宿す。

（2） 京城の１日

8月23日　午前6時行を起こして先づ南山の朝鮮神宮を拝す。京城を一望眼下に納むる所老松參差し殿宇森嚴まことに尊きものあり。大正9年5月起工同じき14年の竣功にして工費實に1,564,697圓を費やしたるもの也。此後歳月更に長きを重ねて其神境自ら寂び來らば一層森嚴を感ぜん、是實に無貳の靈地なり。

轉じて博文寺に詣す、故伊藤公の爲に建つる所にして其總門は慶熙宮の興化門を移建したるもの也、今慶春門と稱す。本堂は朝鮮味を加へたる佛堂にして鐵筋「コンクリート」造、地階を諸種集會の用に充つる樣設備せられありて清新なり。又庫裡は景神宮中の濬源殿及び其附屬の建物なり、此處亦京城府内の一勝地にして遙かに京城市街を望みて眺め佳し。

轉じて昌慶苑を訪ひ明政殿涵德殿等幾多の宮殿内に收藏せらるゝ寶物類を見る。其佛像や、陶磁器や金屬器具の類其蒐集宜しきを得てよく歷朝朝鮮文化の粹を集め、まことに得難きものあり。たゞ其煉瓦造の新館は苑内他の建物に似ず、頗る調和を欠ぐ。我等は茲處にて樂浪古墳より發掘せられて最大驚異なりとせらるゝ竹筐漆器を見その精巧無比の工作に覺えず驚喜したり。

本館所藏の菩薩像は又總督府博物館中の所藏のそれと優劣を爭ふ所のもの實に一世の神品なり。

昌德宮は李朝太宗の造營に創まれるものと言はる、仁政殿を一見し、大廟の外貌を一瞥して、其後苑を一巡す、此祕苑廣大にして幽邃中に幾多の臺榭あり、女房局あり、飛瀑奔泉靑松白砂正しく淸爽の氣分を生ぜしむ。此後苑の老松は其齡古りて死期の既に至りしものが近頃蝕まれて頻りに枯死するものありと言ふ、今よりよく更生の方法を講じ置きて此景觀を維持する事必要ならん。

總督府廳舍にて晝食し、内部を一見し、依て景福宮を觀る、此殿宇は大院君の執政當時天下の富と9箇年の歳月を費やして再營せしものなりと云はる、斯くて光化門、勤政殿、慶會樓等の壯觀を表現し得たるも、これが爲韓土の山は全く伐りつくされて禿げたりと言へり。專政王者の行ふ處古來同一の軌を踏みて遂に其國命を危ふくするもの鑒みざるべけんや。

本府所藏の博物館は慶州其他の古朝鮮の優秀なる文化を表現し其列品頗る貴重なるものあり、平壤博物館のものと併せて實に世界に誇るべきものなると共に其遺物が日本古代文化と盡く兄弟の位置にある事は我等に更に新たなる大陸日本精神を發揮せしむるが如し。

たゞ此博物館も其規模小にして今後益々增加すべき物品の陳列に苦しまん。

由來我國の博物館は其孰れも規模小にして東洋文化の研究施設としては甚だ惠まれざるものあり、よりて民間其他に死藏せらるゝ寶物什器頗る多く、而も盜難火災等によりて失はるゝものも其數尠なからず、思ふに我國情が精神文化の根本復舊建設を急要とする時斯

種博物館の施設を擴張する事は事務を執るものゝ怠るべからざる一事ならん。

京城の地は古來百濟、高勾麗、新羅等の興廢存亡に歳を重ぬること正に千40年、李朝開國の始め今の景福宮を營み太祖3年遷都してより5百年を經たり、舊京城は三面に繞る山、東北には奇峯重疊たる三角山あり南に木覓山等ありて、其頂線を縫ふて構へられたる城壘の長さ實に4里26町、西南の一方僅に開きて漢江の流れて黃海に入るものあり、四方の大門中今存するものは興仁門（東大）、崇禮門（南大）、彰義門（北門）の三に過ぎず、府內の大部分は母國化したる大小幾多の建築ありて僅に其間に朝鮮縉紳の邸宅等を見、宛ながら全日本の一市の觀あり、若し此下に白衣の鮮民の往來なくんば殆んど鮮地と云ふの感なきに似たり。

今日極めて正確に見學行動し午後3時より朝鮮ホテルに於ける談話會に列席し片岡君の一場の講演を聽き午後6時より更に朝鮮建築會の人々に招かれて明月館に鮮風料理の珍羞に飽き暢談時を重ね、10時辭す、更に市中を見あるきなどし夜11時半新知諸君の歡送を謝しつゝ京城を離る、今日の一日亦頗る愉快にして皆等しく他日必ず再遊してよく鮮地を研究せんと言へり、蓋し此地に猶研究すべき事象の多きを意味するなり。

朝鮮は一葦帶水の地なり、我等が東北に往き北海道に渡り更に樺太に入るに比して其行程遙に短かく且つ甚だ容易にして又便利なり。

慶州の遺蹟、京城、開城、平壤の舊文化を始め金剛山の景觀など母國に於ては到底竸め能はざる自然あり、人文あり、我協會は大擧して弟妹の國朝鮮を見るべき要あるや論を俟たず。

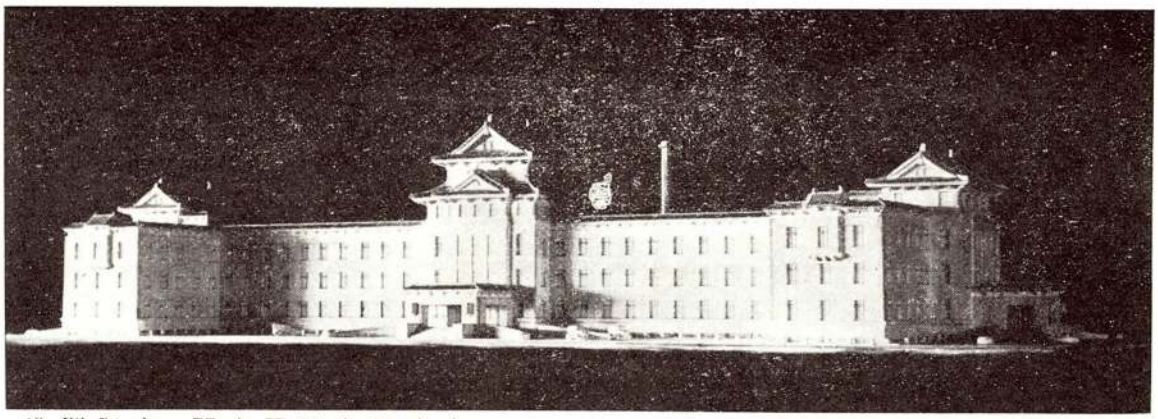
(3) 釜山の朝

夜明けて 24 日の朝洛東仁に沿ひつゝ釜山に着く、乘船發航迄の1時間を一行は其市中散策に出づ、9時乘船茲に大陸の一角を離れ再び對馬の半面を眺めつゝ愉快に海を渡り午後6時半下關に着く、夕食の後狹き日本の汽車に入り、25 日の朝大阪に歸着し此行を終る。

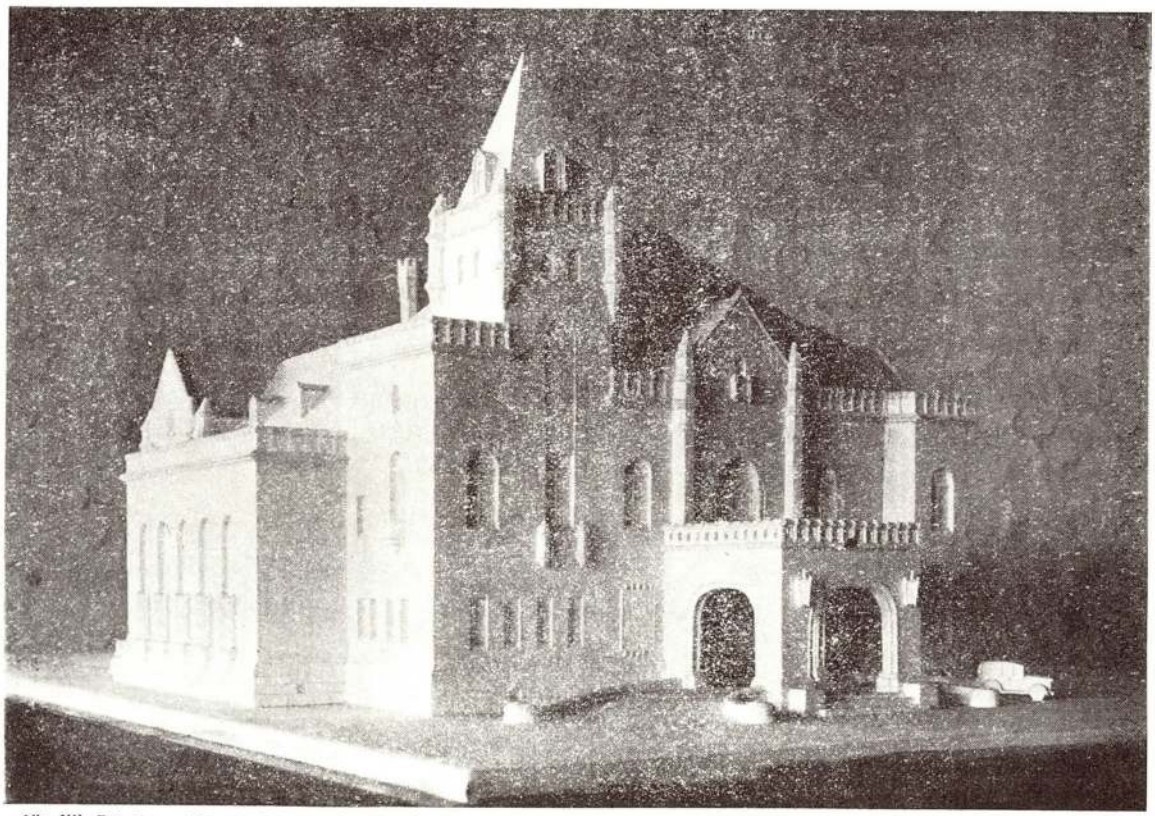
（9月21日稿を了る）



四會聯合建築大會に於ける松室重光氏の講演



滿洲新京・關東軍司令部廳舍　　施工　大林組



滿洲新京・關東軍司令官官邸　　施工　清水組

滿洲に於ける軍部の新建築

內藤太郎

國都新京に於ける軍部の主要なる建物は兵營關係のものを除きては軍司令部廳舍と軍司令官々邸にして之れは明年初夏の頃迄には竣成の豫定に之有小生の許に其模型寫眞有之候間御送附申上候。滿洲に於ける軍の建築物は總て關東軍經理部の設計監督に係るものにして廳舍は大林組官邸は清水組の請負にて目下六分通りの進捗に有之候構造は何れも壁體煉瓦貼瓦床は鐵筋コンクリート造、屋根銅板葺に有之候。

滿洲の建築界を顧て內地建築家に望む

附 工業移民論

岡　大路

先般8月の 14 日に大連に於て四會の建築聯合大會が行はれ、大阪の日本建築協會からも遙々と十數名の御參會があり頗る盛況を極め、日本內地、朝鮮、臺灣、滿洲に活躍する建築家諸氏が夫々の團體を代表して一堂に相會したと云ふ事は、日本の建築界に於いて一進展を劃するものとして特筆に値するものたるを失はぬ。只だ其の大會の席上に於いては餘りに時間に餘裕が無かつた爲めに簡單に開會の辭を承つたに留まり、何やら意に滿たざるものあるを覺えて居つたところ、貴誌十一號に於いて滿洲建築界の紹介號を計畫され、當地の有志に稿を求められた事は誠に當を得たる企てとして各人は勿論欣然其れに應するであらう。但し各人の言ふ事の中には或は重複の事柄が出て來るかも知れぬが、其の點は御了承を願つて置くとして、扨て自分には標題に就ても貴誌より御指令を受けた事でもあるから、主として人間の問題、即ち技術家並びに職工の問題を中心として滿洲に於ける既往を語り且つ內地の建築家諸氏に御一考を煩はしたいと思ふのである。

日露戰後に於ける滿洲の經營は關東州と鐵道とによつて開始され建築工事も其れに伴れて進み、歐洲戰爭勃發の當時には一時的の現象として諸工事が中止されたけれども、其の後に於て好景氣時代が潮來し滿洲に於ても相當に建築工事の殷賑を見たのであつた。滿洲では最初から煉瓦造を採用して行つた關係上、內地のものに比べて一歩の長を見せた狀態に置かれ、ホテル建築やアパート建築などに於ては寧ろ其の範を內地に示した譯であつた。然るに東京に大震災があつて日本全國建築家の非常招集と云ふ樣な事件が捲き興され、滿洲を引き擧げらるる人々も多く、其の前後より內地の建築界は全般に向つて一大躍進を試みて行つたのである。而して最近に於いて特に事變前の滿洲事業界は誠に慘憺たるものがあり、事毎に軍閥張族の妨害に遇ふて萎靡沈滯の極に達し、滿鐵に於ても收入減より極端の緊縮方針に出で、工事の減少によつて諸工事の割掛けが實に 17% と云ふ未曾有の現象を呈するに至つた。工事費の中から二割近くも拔かなければ從事員を賄つて行けないと云ふのは、滿鐵自體としても大問題であるのみならず其の請負界に影響する所は更に甚だしく、學校から巢立つた若い人達などは殆んど取りつく島が無かつたのである。

然るに滿洲事變を一轉期として黎明に入り、陸軍と鐵道と滿洲國政府の諸建築が計畫さ

れ、從前から滿洲にあつて沈滯期を喰ひ縛つて來た建築家の諸氏は勇躍以て之れに當り、內地からも多數に乘り込み來つて大童の形で活動を續けられ、夜を日に繼いでの激務の爲に、折角の日滿博覽會を見物する餘暇を持たなかつた人さへ多數にあつた樣な譯である。實際に昨今の建築工事を見渡すと、土木工事界に於ても同樣であるが一般に技術者が足りない、材料が足りないと云ふ聲を聞く、其れなら內地からの新來者を招いて見ては何うかと云へば急場の際には間に合ひ兼ねる。學校の方へなど南滿工專の若い卒業生でも宜しいから推薦して呉れと云ふて來るのに對して、もう一人も明いて居るものが無いが、內地から來てる履歷書があるから何うかと問ひ返へせば、其れでは見合せると云ふて來る。全體として或は非常な大數ではないかも知れぬが技術者が不足して困つてゐる。其の癖に適當な人を求め兼ねて間誤付いてると云ふ狀態である。而して現在の滿洲では中堅以上の建築技術者に手不足を感ずる樣に見受くる。此う云ふと內地の先輩諸氏からは君等が永年の間滿洲に居つて、其んな不用意をやつてるとは怪しからんと曰はれるかも知れぬが、今は何と云ふても不足は不足で致し方がないので、其の由つて來たれる理由を想ひ起して見よう。其れは大正七八年の頃から震災の復興時代に掛けて、內地の建築界が異狀の盛況を示した事に原因して、其の時代には若い建築家の諸君が遙々と滿洲まで乘り込む事を喜ばなかつた爲めに、此方では人を引き寄せるのに非常に苦心を續けた期間があつた。現在滿洲の官廳、會社、民間等にありて人事上に此の種の缺陷を現はして居るのは、已に其の邊に胚胎して居つたと見られる。

而して其の頃に何かの都合で滿洲に乘り込んで居つた人達が、現下の狀勢に直面して中堅以上の立場に置かれ、第一線に活動してゐると云ふ譯合であつて、而かも其の數は割合に少ないと云ふ結果に陷つてゐる。殊に事變勃發直前に於ける滿洲建築界の慘々なる狀況から見て、之等の人々さへも、よくこそ此の地に頑張つて居つて呉れたと見るべきであつて、徒らに其の數の少なきをかこつよりも、今こそ報いられたる第一線の活躍を祝福して後援を與ふべきであると思ふ。余は敢て第一線と云ふ、主として鐵道建設と警備關係の諸工事に於ては眞に身邊の危險と、激變の氣候と、生活の不自由は思ふとしても何時も不足勝なる材料と勞力と戰ふのであつて、新京や哈爾賓に於ては如何に不自由とは云ふても何うにかなるのであるが、全く何うにも動けないと云ふ樣な方面を第一線と云ふのである。而して此の第一線に於ては激務の爲めに健康を害する人達が可なり多く、若い元氣一杯の人が病氣で引下がつて來る。勿論其等の人達は二三ケ月の療養で元氣を回復すれば再び第一線に飛んで出ると云ふ狀態ではあるが、內地からの新來者は斯かる際に餘程確かりして居ないと氣遲れがして仕舞ふ。若い時代から滿洲に來て居つて內地の仕事を知らぬ者共は病氣になつても失敗をやつても此の地に齧り付く、又た其れより外に仕方が無いのであるけれども、中年にして中途から滿洲に渡つて來られた人達は、何かと云ふと直ぐと內地へ

引き擧げて仕舞ふ、永い間見て居ると實に不思議だ、何とか彼とか云ふてる中に結局は矢張り內地の人となつて仕舞ふ。然し余は其等の人達を非議したり冷笑したりするのでは決してない。事變後に於ける滿洲、將來の滿蒙は決して現狀維持ではない筈であるから、建築の諸問題は寧ろ今後に期待さるべく、現時に於ける第一線は在滿の我々が勤めるとしても、將來の建築發展に就ては何うしても內地に於ける新進建築家の諸賢に待たなければならぬ。而して且つては一度でも滿洲に在りし人、旅行されし人々は常に關心を持ち、諸事業の計畫と連れ立つて滿洲に活躍あらん事を希望する。現時の情勢から滿洲建築界の人事問題を見渡すと、我々の樣な滿洲土着の者と內地滿洲を絶えず往復移動して連絡をとる部類に屬する人々との二つに大別し、而して其の二つが互に相提携しなければならぬのである。此の二つの種類の人達の間には、時には認識不足や利害問題の爲めに相反目する事が假令あるとしても、大局より見て此の提携に破綻を來たす樣な事があつてはならぬのであるから、此の點に就ては特に先輩各位に御願して置かなければならぬ所である。

次には建築に關する人事問題に就ての重要なる一半として特に職工問題に就て內地各關係方面の注意を喚起したい。何事も社會問題に連關しないものはない筈ではあるが、此の問題こそは「建築と社會」誌上で充分なる御研究を願ひ、日滿の關係各位提携の上にて善處して戴きたいものと熱望して止まぬ次第である。

之れを論するに當つても亦滿洲に於ける建築職工消長の沿革を大體述べて置かなければならぬ。日露戰爭の際に軍屬の建築班、鐵道班に隷屬して渡來した職工諸君が大部分其の儘に殘つたのである。勿論其の後に渡來した人達も多數にはあるが、先づ最初の人々の手引と見て宜しからう。其の內に支那職工も初めは不細工な道具を使つて居つたのを、日本道具に改めると仕事がよく出來る、支那苦力の器用なものは追々と仕込まれて一人前に進んで來る、彼等の生活費が安いから追ひ廻はしには賃錢が安くて其の方が德用だと云ふ樣な形勢が次第に嵩じて來た。明治から大正に掛けての頃には建築工事場に於ける日支職工の數が半々位であつたのが次第に差を生じて來て、支職工10人に日職2人、1人と減じ、近頃では其の極端まで走つて行つて日本職工の1人も居ない工事場が少なくないと云ふ狀態にまで這入つてゐる。支職工でも腕達者のものは床の間や違ひ棚などまで自由にやりこなすと云ふ狀態にまで進んでゐるのである。

其の結果は果して如何。支職工は工賃が安いので、建築費の競爭が激しくなればなる程日本人職工は實働作業から退却する事となる。日本職工の多くは小さな下請負となり、支那職工の2人3人を連れてゞも請負者となり濟まして、手を下だす事を止めて仕舞ふと云ふのが一般である。此の種の人々も未だ達者で駈け廻つて居る間は何も云ふ事は無いが、人間である以上年一年と歳をとつて來る。後を嗣いで來る日人職工乃至は棟梁と云ふ階級

の人達を準備する事が非常に必要であるにも拘らず其れが出來兼ねてゐる。彼等は益々老境に向ふ一方には支那職工との對立提携を考へなければならぬと云ふ重大危機に直面してゐる。實際問題の方から見ても日人職工長の留守勝ちな工事場には間違が多く、建築規則が如何に嚴重でも勵行される筈が無い。日人職工の不足は一歩を讓つて考へるとしても、日人棟梁或は世話燒きの缺乏を告げる樣になつては工事場は全く運轉がつかぬ。事此處に至つては誠に追ひ付かぬ話ではあるが、大連には數年前から大連建築現業組合が出來て居つて、建築現業者日支人の統制をはかり許可營業を警察に出願してゐるが2年經つても3年經つても埒が明かぬ。日人職工を內地より招來する事に關しては、現業組合でも請負關係者間でも、何とかしなければなるまいと云ふ話は今日までにも度々出ては居るが、其の實行の爲めに手が染められた事は一度だつて無いのである。南滿洲工業專門學校の附屬として建築職業教育部があり、木工、左官、塗工、鉛工等の卒業生を出しては居るが、其處から出て來る僅か計りの數では全く物の數にもならず、現下の狀勢に影響を與へる丈けの力は持たぬ。考へれば考へる程實に困難なる、而かして滿洲の建築社會にありては非常なる重要性を持つ問題なのである。

然らば之れが對策を如何に考ふべきかと云ふ問題になつて來るのであるが、其れには消極と積極の二つの方面が考へられる。消極論の方は滿洲では支人職工の勞働力には到底對抗する事が出來ないから、人爲的に如何に跼いても結局は退却より外に仕方があるまいとするのであつて、其處にも一應の理由は見ゆるけれども、現下の狀勢より見て滿洲國の堅實なる發達の爲めには勿論の事、東洋諸國の平和と向上の爲めに、我が國人は肩を並べて進まなければならぬ時代であつて、如何にかしても其の道を鑿り開いて行かなければならぬ。消極論から見たならば農業移民の方がより一層に足元の怪しげなるものがあるではないか。然るにも拘らず朝野の後援を受けて北滿の野に向けて邁進して居る團體が澤山にある。滿人や鮮人農民との生活程度を比較して行つたら或は太刀打ちは無理かも知れぬが、今は其んな事は云ふて居る時機ではなく、集團と智能の合力によつて押せる所まで押して見ようと云ふのである。近頃は農業移民の諸君の中にも氣力と健康とが耐えられなくなつて引き上げて來る人達もあるらしいが、其等の少數を見て大局を誤斷する樣の事無く、後から後からと農業移民を送り續けて行つてこそ初めて實績を擧げる事が出來、又た其の間に研究を積んで大成の域にも達する事が出來るものと思ふ。

滿洲に對する邦人進出の手段として農業移民と工業移民を考ふる時に、余輩は何うしても工業移民の方が先きであつて、より重要視されなければならぬ問題であると思ふ。邦人としては純勞働に近い農作に從事するよりも、智能的の工業作業に喰ひ入る方が得手であるに違ひはなく、農業の方面は滿人鮮人の方が勞働及び生活狀態が邦人よりも適當して居

るのであるから、其の方面は滿鮮人に譲つて置く事とし、大體の分野を定めて行くべきではあるまいか。實際問題として考へて見ても邦人は、滿洲に於いて工業方面丈けにでも進出するのでなければ、其の將來を期する事は出來ぬと思ふ。

滿洲の開發に對しては邦人は工業を、滿鮮人は農業を擔當する樣に分野を考へよと云ふたからとて、今日の邦人農業移民を排斥したり反對したりするのでは決して無い。以上は大局より見た大體論を云ふのであつて、年々に5萬や10萬の邦人農業移民が來たとて3千萬の現滿洲人に對して少しの痛痒をも感ずるものに非ず、却て刺戟劑となり日滿融和の爲めに貢獻する所が大なるものあらう。其れと同樣に滿州の工業を邦人にて取り扱ふ樣にと云ふた所で、決して全部が其れで行けるものと思ふたら間違ひであつて、矢張り滿人や鮮人達も其の中に雜つて行かなければ仕事の出來ないのは分かり切つた事である。只だ大體論として重點の置き所を考へて見たのであつて、さるにても邦人の間には工業移民に對する輿論の比較的に稀薄なる事を不思議に感ずる。其れには工業方面に對しては從來より滿洲へは相當に來て居るとの先入觀念から、暫らく漫然たる態度に出ると云ふ傾向になるのは無理もないが、一度渡來した職工諸君が永久に其の儘である筈は無く、年々に歳をとつて來る、其の後の補充と云ふものが是非必要なのであるから、斯かる問題は永久繼續されなければならぬのである。現在及び將來の滿洲は其の開發は邦人の手を待つもの益々多くなつて來る。工業移民と云ふ問題に對しては內地の工業關係各團體が先づ第一に研究と調査を進め、當局を動かし、輿論を喚起して工業關係失業者の救濟に資せられん事を切望するものである。

工業移民の問題を建築の方面から見る事とし、此處には其の範圍を狹めて我々の關する限りに於いて對策を講究して見よう。然し內地には建築の失業者は少なくて、皆な多忙に働き續けて居るので、滿洲まで出掛ける必要を認めぬと云ふのならば、吾れ亦た何をか言はんやであるが、以下の議論は內地の都會や地方には建築關係の失職者が相當にあるものと見做して進めて行くのである。

滿洲に於ける建築職工は年々に其の數を減じ又は老境に入り、而して其の補充が內地より充分に來ないので、一筋に退嬰の道を辿つて來たと云ふ事に關する其の原因を考へて見るならば次の如くである。

邦人職工は支人職工の如く簡單なる生活に甘んずる能はず、自然工賃が高くなる。

滿洲には結氷期間と云ふ全く仕事の出來ない可なり永い期間があり、其の間は殆んど無爲徒食に終り貯蓄の全部を食ふて仕舞ふ。

邦人の優越感からして支人を2人3人でも使ふ樣になると、決して自ら手を下す事をせず指圖計りやる、其の間に支人職工は仕事が上達して結局は指揮者を凌ぐ樣になる。

內地に向つて在滿の人々から呼び出しを掛けるには相當の費用を前渡ししなければなら

ぬ、費用の點は未だよいとして、呼び出しに應じて來る様な人達は中々高くとまつて普通以上に待遇もし、且つ結氷中の面倒をも見てやらなければならぬ。支人ならば其の時の相場によつて働き、仕事が濟めば直ちに暇を出して後に何等の面倒を殘さぬ。

昨今の在滿請負の諸君はよい棟梁、よい邦人職工が無くて困つてゐる、其の爲め入札の場合に踏み込んで行く事が出來ぬと云ふ狀態に追ひ込まれる事があつても、內地との連絡が遠い爲めに速急の間に合はせる事が出來ない。

以上の様な理由からして內地から建築の諸職工を滿洲へ招來する事は非常に困難とし、尋常の手段を以てしては殆んど不可能事とされて居る。大連建築現業組合と云へば棟梁や職工諸君の團體であつて、此の問題とは極めて密接なる關係を有し、絕えず議題に上つては居るけれども實行手段としては一も見出す事は出來ぬ。此の春の頃に滿洲請負業協會に於いて、秋季結氷期前の工事に對する職工不足を憂慮し、各職の棟梁下請の人達に向つて費用の補助をしてもよいから內地から職工を招來して置いて呉れないかと云ふ相談を持ち掛けたのであるけれども、遂に不調に終つた。次には 3—4 年前の不景氣時代であつたが請負業協會で內地からの職工招來を計畫して某企業者に相談したところ、建築費が高くなるので困ると云ふ反對を食ふて沙汰止みとなつた事がある。此の様な譯で內地からの職工招來に關しては其の緖をだも捕へる事が出來ないのであるが、然し之れを支那式に沒有子、仕方が無いと諦めて仕舞ふ事の出來ない重大問題とするならば、如何にかしても其の對策を考へなければなるまい。

其の對策問題に這入る前に、山東、北支那の方面から、年々に數十萬と稱せられて移住し來るものゝ中に、山東勞働者なるものがあるから、其れに就いての動靜を簡單に窺つて見よう。山東、天津方面から募集されて來るのは大部分は純勞働者で華工と稱せらるゝもので、炭礦や土木工事、埠頭に立働くのである。建築の諸職工は天津や靑島あたりで一人前になつたものも來るけれども、一方には單なる華工として渡來し滿洲に來てから仕事を覺えたものも可なりある。而して春の工事期になると山東から便船を求めて續々と渡來し秋季結氷に差しかゝると友を相呼び相携へて山東の鄕里に歸休するのである。山東は疲弊した物質に乏しい土地と聞くが山東出身の者は實に勤勉にして孜々として立働き、最大限度の貯蓄をやつて持ち歸る。そうしてる間に滿洲に相當の足掛りが出來れば始めて家族を呼び寄せると云ふ事になる。彼等山東華工の移動と云ふものは政策によるものでも國策によるものでも何んでも無く、只だ生きんが爲めに動く所の極めて自然の行き方であつて、此の自然の動きこそ非常なる力を以て押して來るものと見られ、邦人工業移民の場合を考察するに當つても、大きな暗示を與ふるものと思はれるのである。

建築職工招來に對する策として此處まで論じて來れば、自から結論に達する事となるの

であるが、要するに今日まで我々は滿洲から招來する事をのみ考へ居つたから全く手が付けられなかつたのであつて、此の問題は內地の人達が滿洲へ行つて辛棒して見ようと云ふ氣持が出て來なければ話が成り立たぬのであつた。其處に氣附いた余輩は、此の度の四會聯合の建築大會に於ける聯絡提携を利用し、此の問題に就て內地の人方に呼び掛けて見ようとするのである。次に本問題の解決を可能に導く條件の樣なものを考へて見るならば

內地の景氣がよい時代は駄目である。內地が不景氣で失職者が多く、何處へでも行つて働いて見よう、辛棒して見ようと云ふ自發的の意氣に出發する時に初めて內地職工の招來を考へる事が出來る。

今日までの經驗によつて、此の方から招來を呼び掛ける事は殆んど成功しない。但し自發的に生きんが爲めに奮然と出掛けて來た人々にして始めて滿人職工にも太刀打ちが出來るのであつて、業界にありても大に歡迎されてゐる。實際に於ても三三五五と知人を頼りに渡來した人々で遊んでる者は一人も無い、殊に左官、大工に於て然り、但し土工、人夫の如き純勞働者は滿人に一步を讓らなければなるまい。

邦人職工は滿人職工に對して經濟的に果して太刀打が出來るだらうかと云ふ點に就て考へて見るならば、近來は滿人職工の賃錢は騰貴の一方を續けて居つて、昨今新京では滿人左官工が金2圓50錢の相場を示し、其れに圓價は銀價に比して著しく相場の下落を見て居り、結氷前の工事は實に金錢に換へられない場合があるにも拘らず、如何とも手の下し樣のない昨今の狀態である。而して邦人職工の能率、間違の少き事、意志の疏通を計り、仕事の統制のとれる事、無駄仕事の少き事等を考へるならば、邦人職工を以てして充分に對抗が出來る筈のものである。

建築技術者の場合と同樣に建築職工にも土着の者と所謂出稼に屬する（來る歲々に出掛けて來る）者との二種類あるのが當然である。建築や土木の仕事には結氷と云ふものがあるのであるから、滿洲に渡來したものが全部土着すると云ふ觀念に捕はれて來た事が已に間違つて居るのであつて、一部のものは土着するのも宜しいが、他の一部のものは結氷には內地へ引き擧げて行つて仕事をやり、春になつたら再び出掛けて來て滿洲で稼ぎ、相當の貯蓄を持つて歸省し家鄕を助けると云ふ方法に出るならば、敢て山東華工ならずとも出稼による國家經濟に影響するもの相當大なるものがあらうと思ふ。

斯くて年々に渡來する所の出稼の團體が成り立つとしたならば、日滿の各關係團體及び業者間の聯絡提携によつて、仕事の割り當て、往復旅行費の輕減等を研究する事も出來、官廳當局の援助を願ふと云ふ方法も自ら出て來る事になる。當局の援助に就て一言するが最初から何も彼も官廳が爲す可きである、面倒を見るべきであるとする時は、徒らに依頼心のみ增長せしむるので甚だ面白くない。一般民の自發心の振興が第一であつて、官廳は其れを應援し指導の任に當つて呉れゝばよいのである。

又一歩を退いて考へて其の様な大掛りの團體で無く、3 人5人と云ふ様な知人を頼つて來ると云ふ小團でも宜しい。身體强健、思想健實、何んな仕事でも辛棒すると云ふ様な意氣に燃ゆる人達が來る事は、現在の滿洲には最も必要な事であり又た歡迎を受ける所である。此の點に就ては內地の建築家各位の御考慮に掛けられん事を切望する次第である。

工業移民に就て更に講究を續けるならば有意義なものがあるであらうが、餘りに多岐に亘り過ぎる事となるから此の際は此の邊で御免を蒙る事として、扨て次には本論に對する結語の意味に於いて、我々滿洲に在住する者から新來者諸君に告ぐる言葉或は注意と云ふ様なものを一言して見る。

滿洲は滿洲獨特の內地とは可なり違つた事情の下に置かれる爲めに、內地からの新來者諸君は1年2年の間は工事の施工に對して本當の確信が出て來ない。何によつてそうなるのであるかを檢討して見るならば

第一に滿人勞働者を使役する事であつて、言語、風俗、習慣、能率等の異なるものを相手とするのであるから、內地人に對する場合とは違つた調子を必要とする。

第二は工事時期の問題であつて、結氷、解氷、即ち每年の工事の終末と開始の狀況を見定める事が困難である。溫度が零點以下に降つたから水仕事を止めて仕舞ふなどと云ふて居たのでは仕事にならぬし、又餘り無理をやつては後の爲めに宜しくない。仕事を何の邊で切り上げるかが何時も非常な問題となつて居る。夏期には雨期と云ふものがあつて、其れは現場に水が溫まるもの位に考へて居ると間違ふのであつて、工事施工や材料の運搬に對して非常な支障を來たす事は豫想に餘りある。

第三には煉瓦造の問題である。近頃の內地では煉瓦造などは殆んどやらないそうであるが、滿洲では其れが萬能なのであつて、而かも其れには高級より低級までの幾通りもある。內地での煉瓦造と曰へば必ずセメント・モルタル使用となつて居るが、滿洲では勿論其れもあるが、石灰積、粘土積まである。石灰積や粘土積などは建築法に無いから排斥すべしと云ふ單見者流があるとしたならば、余は言葉を返へして言ふ、內地の木造貸家の様なものは火災の爲めに非常に危險である、あんなものは建築の部には這入らぬから全部止めたら宜しからうと。

以上の外にも未だ澤山にある事ではあるが、要するに土地の事情に對する研究と認識を會得して行く事が第一條件としての緊要事である。新來者として心得置くべき柵を乘り越して、他人のやる事は自分にも出來ぬ事は無いと何等の準備も無しに猪進して來る事は、自分が怪我をする計りでなく周圍にも非常な迷惑と危害を與へる。

昨年の事であるが或る請負者が內地から出て來て、在滿の請負諸君と競爭をやつて仕事を落札し、施工の結果は100萬圓の仕事で20萬圓とか30萬圓とかを損したと云ふ噂であ

つたが、兎に角多大の缺損をした様である。其の結果としては材料商や勞力下請までも踏み倒し、苦力賃の仕拂にまで影響すると云ふ最も不幸なる忌はしい狀態に陷つて仕舞つた。

又た或る人は新來の早々から內地風を吹かせて二言目には內地を口に出すので、遂に周圍の人達から排斥を喰ふた様な話もある。

要するに何事もそうであるが、建築家としても請負者諸君、職工諸君に於かれても、滿洲に來られたならば先づ第一に土地の事情を研究して充分に腹に入れ、其れから事に當るべきである。若し最初から事を初めなければならぬ事情に置かれるならば、其の土地在住の人達と協調、協力し、其れでも足りないと見て取れば協同動作に出で、或は土地の事情に通ぜる人を先達として仕事を進める様な方法も考へられるであらう。總ては研究と協調とを基調として進まなければならぬ。

滿洲の建築界は永く中央から離れて居るので、知らず知らずの間に業界の進展に遲れ偏狹に傾いてる所もあるであらうし、永く居れば居る程に追々と眼界が狹くなり田舍建築屋に追ひ込まれて來るのであつて、其等の點に就いては新來者の諸君に忠言を聽き又た將來に期待する所の大なるものがある。其れと同時に滿洲の建築界には 30 年來培はれて來た所の土地の特長、美點とする所もあるであらう。其れは何んな種類のものと具體的に此處に示す事はしないが、新來者の諸君にして其れと氣附かれたるものある時には出來る丈け其れを助成され、相共に滿蒙に於ける建築建設の使命に向つて進まれん事を希望して止まぬのである。

（昭和 8 年 10 月 12 日稿）



四會聯合建築大會に於ける岡大路氏の開會の辭

滿洲古建築の展望

村田治郎

一國、一地方の建築を理解しようとする場合、その歴史の大綱を知るのが第一の捷徑ですから、この小篇では先づ滿洲建築史を大觀し、次いで重要な建築若干を略記して、自分の責を果さうと思ひます。

1. 環境と系統

滿洲の建築を見るに當つて注意したいのは少くとも次の點です。

(1) 滿洲は土地が廣大で、東、北方は山嶽地で森林が多く、西方は沙漠地帶、南方は海に望んでゐるといふ風に、地方的の變化が甚しいこと。

(2) 滿洲に住む民族は古來單一でなく、種類が甚だ多いこと。

(3) 東南は朝鮮、北はシベリヤ、西は蒙古、西南は支那に接續し、その文化傳來の影響を受けることが多大であること。

上記の諸點によつて最も左右せられるのは民家です。民家のやうな比較的原始的技術しか持たないものは、特に環境に支配される所が多く、例へば森林地では木造家屋が發達し、沙漠地帶では遊牧生活に伴つて移動式家屋が持ち續けられることは言ふ迄もありません。これが滿洲では明瞭に認められます。滿洲民家を大別しますと

(イ) 熱河省北部、興安省西部には移動式民家が行はれてゐて、其の半球形民家を蒙古包(Mong-Ku-Pao)と呼んでゐます。

(ロ) 黑龍江省、吉林省へかけては木造建築が發達してゐて、中には日本の校倉(アゼクラ)式建築さへ認められ、板倉も少くありません。

(ハ) 熱河省南部から奉天省西半部には日本人が俗にカマボコ屋根と言つてゐる一種の陸屋根の民家が多く、これは西亞、中亞、北支那を通じて見る傾向で外來の民家型です。是を平房(Ping-fang)と言ひます。

(ニ) 純北支那式民家は全滿洲の都市を中心にして行はれてゐます。早くから支那文化を受け入れた遼東半島に此の型が多いことは勿論です。

前の二つは明かに滿洲固有の形式で後の二つが外來です。外來と言へば近代になつて露西亞、日本が齎した住宅形式、朝鮮農民の家など益々多種多樣になりつつあります。

滿洲の歴史は民族爭鬪史と言つてよく、大觀すれば高句麗・女眞系、蒙古系、支那系の三民族が三つ巴になつて相ひ爭つたので、その中支那系は南滿の一角で一時的に勢力があ

つただけですから、東方の女眞系と西方の蒙古系との爭ひだつたと言つてよいでせう。この絶えざる爭闘と、政權の移動が全く支配民族を根本的に一變し、從つて前代の總てのものを廢して新たに設立する傾向が强かつたこととが原因して、滿洲には古建築が殆んど遺されてゐないのです。

その僅かばかりの遺物から見ますのに——我々の知識は主として地上の古建築に止まり、未だ地下の古蹟調査については今後にまたなければならない狀態ですが、しかし今迄の知識を以て判斷しても大過ないと考へます——現在の民家から得た考と同樣に、滿洲古來の建築には二大形式が存在して居り、一は支那系の影響によるもの、他は申すまでもなく固有とも言つてよい形式です。この固有といふのは必ずしも其の民族の獨創を意味するのではなく、嘗ては何處からか傳へられたものであつても、久しく使つてゐる中に民族獨特のもののやうに思はれるに至つた場合をも含むことは勿論です。とにかく同時代の支那で見られない形式のものを指します。

二者の中、支那系の形式は時代が降るに從つて次第に勢力を增し、清代に至つて遂に固有系を壓倒して、僅かに民家に過去の面影を殘すに過ぎなくなつたのですが、ここに只一つ滿洲固有のものが北支那を席捲してゐる事實を見逃すことは出來ません。それは日本の所謂オンドル（朝鮮語）に類してゐる炕（Kang）です。炕は主に炊事竈の煙を通し、その熱を利用して座席を煖めるもので、滿洲の東部から北朝鮮の間で發生し、中世以後次第に北支那全般にひろまつたもののやうです。

2. 建築史の大略

ここには遺物、遺址を中心にして時代順に並べ立てます。

先史時代。注意すべきものは巨石建築物 ドルメン（dolmen） メンヒル（menhir）です。ドルメンは一般に石棚、メンヒルは石柱と呼び、石棚子とか石柱子などとある地名には是が存在してゐる場合が多いのですが、但し遼西地方になると天然の石窟狀のものまで石棚と呼ぶことがあります。現在知られてゐる是等巨石建造物が遼東半島に集中してゐるのは同型のものが朝鮮北部の西岸にあることと共に見のがせない點です。

漢時代。西紀前三世紀の前半に燕國が長城を築き、更らに少し晩れて秦の始皇帝が燕の長城を修築し、それ等は何れも今の遼陽附近まで達してゐた筈ですが、現在不明です。當時の長城は現在のものよりも遙か北方にあつたもので、現在の山海關附近に見える長城は明代のものと考へられます。

漢代になると遼陽以南に漢人の植民が行はれ、小さい乍ら土塀を周ぐらした城も設けられたので、漢式の墳墓が遼陽から旅順に亘る地域で發見せられてゐます。墳墓は塼（煉瓦）築で不完全な穹窿、完全な拱（アーチ）を使つて居り、中には壁畫さへ畫かれた例があります。墳墓から出た家屋の小模型（明器）は漢代の小建築を知る上に貴重な參考品です」

高句麗時代（西紀三世紀頃乃至七世紀半頃）。高句麗の都は鴨綠江の中流に望む輯安縣にあり後に朝鮮の平壤に遷都したのですが、その墳墓は輯安縣から通化縣に至る奉天省東邊道に多く、山城は遼東半島の金州、蓋平、海城の附近を始め、同じく奉天省東部の山嶽地に少なからず散在してゐます。高句麗は巨石文化の系統をうけ繼いだものか、山城に石垣を築いたのみでなく、墳墓には好んで巨石を用ゐ、その天井石の重ね方には遠く西域新疆や西北印度、波斯の古い天井構造と一致する所があるのは注意すべき點です。

渤海時代（西紀7-2—926）。七世紀後半から八世紀の初頃まで一寸唐の勢力が及び其の頃の名殘りとして奉天宮殿前に陀羅尼經幢（開元二又は三年の銘が曾て讀めたと言はれる）がありますが間もなく渤海が勢力を得て唐を驅逐しました。渤海には五つの京があり、その上京は吉林省寧安縣東京城に置かれ、現に昔の都城の址を始め、宮殿址、佛寺址などが殘つてゐます。都城は唐の長安城の制を學んだらしく、宮城が北端の中央に設けられて、中央に南北の大通りがあることは丁度日本の平城、平安二京に見る通りでした。その大通り即ち我が朱雀大路に當るものの南端近くの東側、平安京ならば東寺のある位置に今でも興隆寺（俗に南大廟）といふ寺があり、寺は清代の新しいものですが、境內に渤海時代の見事な大石燈籠が立つてゐるのです。是等を見ると渤海は唐の影響を強くうけたやうですが、瓦の文樣から見ると、どうも高句麗に學んだ點が多く、結局、高句麗と唐との兩方から學んで獨自の境地を拓いたものと認めなければなりません。

遼時代（西紀916—1124）。前記の高句麗、渤海が占領してゐたのは滿洲の東半分、遼河以東の地域で、西半分には纏まつた國家が出來上つてゐなかつたのでしたが、茲に至つて西半分の土地に住んでゐた契丹民族が建國して遼と號し、遂ひに全滿洲のみでなく北支那の北部までも占領したのでした。遼は渤海民族を利用しましたから、その文化を採つた筈ですが、一方では唐末、五代の北支那文化を學んだので、渤海とは可なり異なつた建築が出來たやうです。首都たる上京臨潢府は興安西分省林東附近ボロホトンにあり、その遺址の平面を見ても遼代都市の制が支那や渤海などのやうな矩形にして宮城を北邊の中央に置く形式とは一變して、不規則になり定制のなかつたことを示してゐます。木造建築を見るのに渤海時代のものは日本の奈良朝建築などに近似してゐたのに、遼代のは厚い塼壁を附けてゐる點が異り、塼壁は今日に至るまで續けられてゐる構造法ですが、その變化が渤海から遼への移り變り頃に起つてゐることを知るのです。

遼代の木造建築の一遺例としては義縣の奉國寺があり、又、特色のある塼築多層塼塔が所々に殘つてゐますが、後に項を改めて述べませう。

金時代（西紀1115—1234）。金とは女眞民族の建てた國で、上京會寧府は彼等古來の本據地であり、今も吉林省賓縣阿城（又は阿什河）の南に遺址があります。金は北支那を掌握し、遼以上に廣い地域を支配した大國ですが、建築の上から見ると、全く遼の繼承で殆んど新機軸を出さなかつたやうで、注意すべき遺例は同じく多層塼塔です。

元時代（西紀 $\frac{1206}{1367}$）。蒙古民族の建てた元になると滿洲には佛教建築以外に孔子廟、城隍廟、關帝廟など諸宗教建築が一通り各地に行はれてゐた事を、現存する石碑によつて知るのですが、しかし元代の建築と見ることが出來る遺例は目下ないやうです。元代になつて喇嘛教が尊敬されたので、喇嘛教建築が流行したやうに一般には考へられてゐますが、事實は必しもさうでなく、滿洲へ喇嘛塔のやうなものが入りこんだのは清朝初期からと見るのがよからうと思つてゐます。

明時代（西紀 $\frac{1368}{1771}$）。明の勢力は一時黑龍江下流地方まで及んだことはありますが、間もなく退嬰して開原以南の都市を保つてゐたのに過ぎません。この時代の明に屬しない土人の建築については全く知る由もありませんが、恐らく民家の程度を出でない原始的傾向を續けてゐたのでせう。明の勢力圈內では佛寺に小石塔を建てる傾向があり、又遼陽を始め關帝廟その他の宗教建築が依然として盛んに行はれました。遼金風の塼塔まで行はれた一例として鐵嶺龍首山の八角九層の塔が擧げられます（弘治二年 1489）。

清時代（西紀 $\frac{1616}{1911}$）。滿洲民族は奉天省老城方面から起り、撫順、奉天を陷落し遂に明代滿洲の首都とも言ふべき遼陽を占領して遼東を把握しました。それが都を老城から遼陽へ遷し、次いで遼陽の東に東京城を新築しましたが間もなく奉天に遷都しました。しかし西紀1644には北京に乘り込みましたから奉天に都を置いたのも僅か二十年間に過ぎません。

都が變る毎に宮殿も新たに建てられ古い宮殿は荒廢に歸したのでせう、現に遺つてゐる宮殿は奉天城內のものばかりです。帝陵は奉天遷都後崩御された太祖、太宗の陵が奉天の東方と北方とに設けられ、太祖陵は福陵（一般に東陵）太宗陵は昭陵（北陵）と呼びます。更らに老城の近くには先祖を祀つた永陵があり、以上三陵の建築年代は殆んど同時と言つてよく、十七世紀の半頃一先づ完成してゐます。その他宮室關係のものでは熱河省承德にある離宮（避暑山莊）が注意すべきもので康熙四十二年（1703）に營められましたが乾隆帝になつて規模が擴大せられて現狀を呈することになつたやうです。

清代で注意すべき點は喇嘛教と回々教とが滿洲に廣まつた件です。喇嘛教は清朝歷代が政策的に優遇し、非常に大規模な寺を建て居り、清初のものでは奉天の實勝寺（俗に黃寺）や東西南北の喇嘛塔及び寺が著しく、乾隆年間に至つて承德に西藏風の大寺が續々と建設されたのは刮目すべき時代相でした。一般の喇嘛寺は西藏風でなく他の宗教建築と異る所は殆んど見えませんが、塔だけは截然と特徵を發揮して居り、基壇の獅子その他の彫刻にはグロテスク乍ら見るべき所があると思ひます。

回教寺は常に清眞寺といひ、外觀には二層又は三層の樓閣がある以外特色が出てゐませんが、大殿が東向し、西方の壁にミハラブ（Mihrab）及びミンバル（Mimbar）などが設けられてゐる狀態はアラビヤ地方のモスクを偲ばしめるものがあります。

その他諸宗教建築が完備したのも此の時代で、末期になつて基督教會迄も出現するに至りました。

歐米建築樣式時代（十九世紀末葉乃至現在）。十九世紀末ロシヤが滿洲に侵略して以來、ロシヤ風の建築が主要都市に現はれ、間もなく露支折衷樣式が出來て現に大連などにも其の例が少なからず殘つてゐて、中には捨て難い風趣を示すものさへあります。丁度その頃アール・ヌーボーが流行した結果、ハルビンでは停車場、商品陳列館（現在は博物館などに使用中）などのやうな大建築に應用してゐます。恐らくヌーボー建築で是程大きな例は稀でせう。

日露戰爭後、日本の建築家によつて南滿の主要都市に洋風建築が建てられることになりそれは主として英國系ルネサンスでロシヤとは可なり趣を異にしてゐました。その中に獨逸風が流行し、又米國風が輸入され、現在のやうな樣式的には不統一な狀態に至つたことは、丁度日本の建築界の動きと軌を一にしてゐます。

3. 著名な古建築二三

義縣奉國寺の大雄殿。遼代の木造建築は山西、河北省に多少遺例がありますが、滿洲で目下知られてゐるのは是が唯一です。元代の石碑に寺は開泰九年（西紀1020）に建てたとあり、實際大雄殿を見るに遼代であること一點疑ひない雄大な趣を呈してゐます。

奉國寺は義縣城內の東北隅の近くにあり、最前方に小さな山門、兩掖門、次に三間の牌樓、その奥に單層入母屋の無量殿の順で建てられ、何れも清朝時代の小建築ですが、最も奥にあつて一際目立つ大建築が大雄殿で、只さへ巨大なのが特に高い壇上にあるのですから、周圍の群小建築を威壓してゐるやうな感があります。この邊の調子は全く山西省大同の大華嚴寺大雄殿及び薄伽教藏（何れも遼代の建築）から受ける感じと同一です。

大雄殿は日本流に言へば九間五面、奥行八十尺餘、幅百六十尺に及び、內陣の佛壇上に七つの大佛像、各佛の前に兩脇侍菩薩像が立つてゐます。外陣には石造の香爐、燭臺や金代以後の石碑が多數立ち、周圍の內壁には佛や羅漢の壁畵、梁や斗栱には彩色文樣や天人の繪が施されてゐるなど、目を見はらしめるものがあります。尤もそれ等の年代を總て遼代と見なすことは出來ませんが、礎石や斗栱などの調子は全く遼代の代表的形式と言へます。

遼金の佛塔。遼代でも金代でも支那の佛塔を模倣したのですから多層の塼塔（中へ入つて上層へ昇れる型）石塔（中へ入れぬ）や鐵塔までも建てたのですが、特に支那の唐末乃至宋で建てず、遼と金とで好んで建てた多層塼塔で中へ入ることが出來ない形式のものを說明したいと思ふのです。この形式は

（イ） 平面は八角、六角が多く、四角は少ない。

（ロ） 多くの場合、內部へ入る開口はなく、從つて上層に窓もない。但し內部へ入れなくても構造上中空にしてある場合が多いらしい。

（ハ） 基壇が高く、屢々種々な彫刻を施してある。その傾向は特に遼代の塔の方が强く、彫刻も見事なやうに思ふ。

（ニ） 初層高く、第二層以上は急に高さが減少する。窓を設ける必要がないからである。多くの場合、十一層又は十三層。

（ホ） 初層には各面共、中央に龕、それに坐佛像を入れ、龕の左右に立てる脇侍、上に天蓋、飛天などの彫刻があり、中には佛塔の彫刻を加へたもの、又は上記と全く彫刻の配置を變へたものなどある。

（ヘ） 最頂部には特異な相輪を置いたもの、寶珠形のものゝ二樣があり、又屢々大破して古い形の不明なものが少くない。

大體以上のやうな特性を示し、今では塔のみ孤立したものが多いやうですが、元來は殆んど總て佛寺に伴なつて建てられてゐたと見るべきでせう。そして現狀を以て推斷しますと、塔は伽藍の南北中心線上に建てられるのが普通ですが、伽藍一廓の比較的前方にあつたか、それとも後方にあつたかについては定制がなかつたらしく、何れの例も見ることが出來ます。

遼代の塔は遼の本據が滿洲西部地方だつた關係から矢張り西方に多く、金代に至つて滿洲東部に廣まつたやうに思はれます。而かも金代には滿洲西部地方でも盛んに塔を建てたらしく、熱河省方面の塔だからと言つても、遼代の塔とは限らないのです。塔の年代を定めるのも甚だ困難でして、多くの場合記錄が全く無いのですから、自然彫刻とか建築細部とかを比較して推定するより他ないのです。所が後世の修補が餘り加はつてゐて、遂に何れとも判斷し難い例もあります。私が考へてゐる若干例の年代を擧げて置きませう。

海城縣析木城の金塔（遼代）

義縣嘉福寺の塔（遼代）

奉天城西・塔灣の塔（遼・重熙十三年 1045）

錦縣大廣濟寺の塔（遼・清寧年間 1055—1061）

…… 以上遼代 ……

遼陽廣祐寺の白塔（金・大定初年の增大 1161—1169頃）

鐵嶺圓通寺の塔（金・大定年間？ 1161—1189）

開原石塔寺の塔（金・正隆元年乃至大定三年 1156—1163）

…… 以上金代 ……

奉天の宮殿。奉天城內の宮殿は大別して三區劃になり、東の一廓は八角の大政殿を中心とし（今・省兵營と註記）中央の一廓は後方が清寧宮、前方が崇政殿の各一廓に別れ（今・故宮博物館となる）西方の一廓は四庫全書を所藏する文溯閣を中心としてゐます（今・奉天教育廳所の利用する所）。中央の故宮博物館前の憲兵隊の建物などがある一廓を亦嘗ては宮殿に屬してゐたのでした。

以上の中で最も早く建てられたのは八角の大政殿を中心とする一廓と、清寧宮の一廓で、前者は軍政の中心をなす建物、後者は皇帝の起居する內裏とでも言ふべきもの、何れも奉天遷都直後に建てられた筈ですから天命十一年（1626）には出來てゐたと推定します。その次

に出來たのは清寧宮前の崇政殿、大清門の一廓で、これは天聰六年(1632)に建てられたものと私は推定してゐます。多くの書には上記の建物を總て崇德二年(1637)に建てたと說明してゐますが、信ずるに足らぬ誤說です。

以上が清朝の奉天時代のもので、遙か後年、乾隆皇帝が北京から滿洲へ何回も東巡する毎に補修增築工事が起されることになり、乾隆十一年乃至十三年(1746-1748)には清寧宮一廓の東西及び前方に多數の建築を增加し、乾隆四十六・七年(1781-82)には文溯閣の一廓を起し、その他徹底的の重修を繰り返したので、現在では殆んど總ての宮殿建築が乾隆年間の面影を存するに到りました。

これ等の建築を見て直ちに感ずるのは、宮殿と言つても意外に規模が小さく、建築も亦粗末な點です。是は北平の宮殿と比較すれば一層その點を深く感じます。滿洲東部の片田舍から興起し、未だ支那全土を征服しようといふやうな大望もなく、滿洲を保全すれば足ると位考へてゐた時代に、遷都して急に建てた宮殿であることが、小規模の重要な原因でせう。若しも清代の帝都が永く奉天に置かれたならば、後世改築擴張して一大宮殿となつたでせうが、二十年目には北京に遷都したので、遂に其の機もなく、辛じて乾隆帝の增築により稍々宮殿の態を整へましたが、それも根本的でなかつたのは平素使用する宮殿でないのですから致し方ない次第です。

建築として最も力を盡してゐるのは大政殿と崇政殿ですが、滿洲の古俗を傳へてゐる點で清寧宮を見逃がすことは出來ません。宮の前方には木杆が一つ立つてゐますが、これは神杆(滿洲語でSoma)と呼び、滿洲民族の持つ原始宗教Shamanismに關係あるもので、同じ形の杆は滿洲族の民家でも見る所のものです。清寧宮は皇帝の起居する所ですが、同時に神を祀る祭殿でもあつたのでした。



四首聯合建築大會に於ける村田治郎氏の宣言書朗讀



←

ドルメン

奉天省海城縣析木城

姑嫂石と呼び2個ある中、1個は倒る、ドルメンは石棚といひ、2個ある場合は姑嫂石といふ事がある



→

メンヒル

奉天省鳳凰城郊外

石棒のみが先史時代の遺物で、隣接する石の小祠は近頃のもの。



↑

渤海時代の燃燈石塔

吉林省寧安縣東京城の南大廟内

熔岩を彫刻したもので高さ約20尺

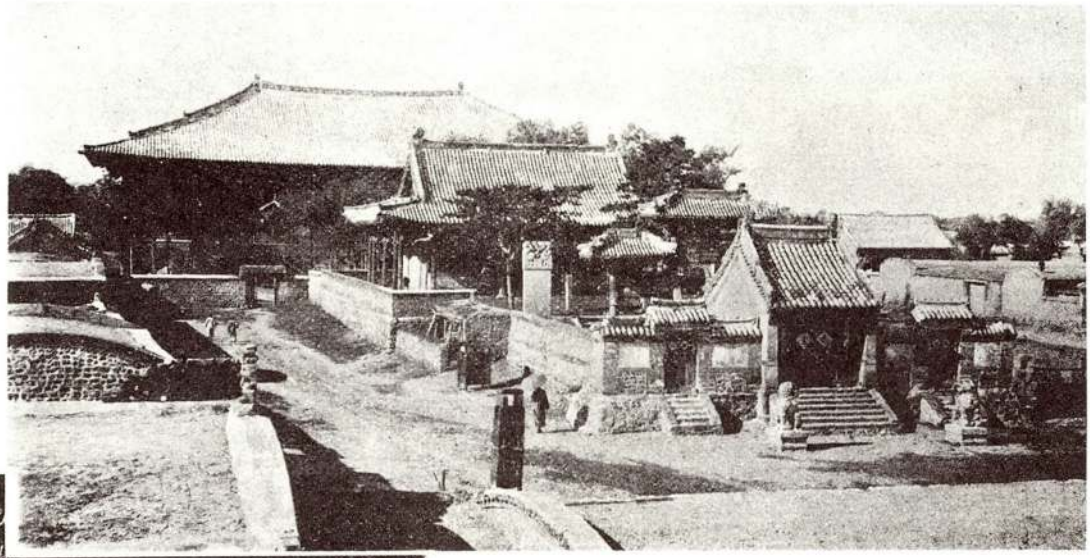


←

高勾麗時代の將軍墳

奉天省輯安縣

（廣開土王墓）



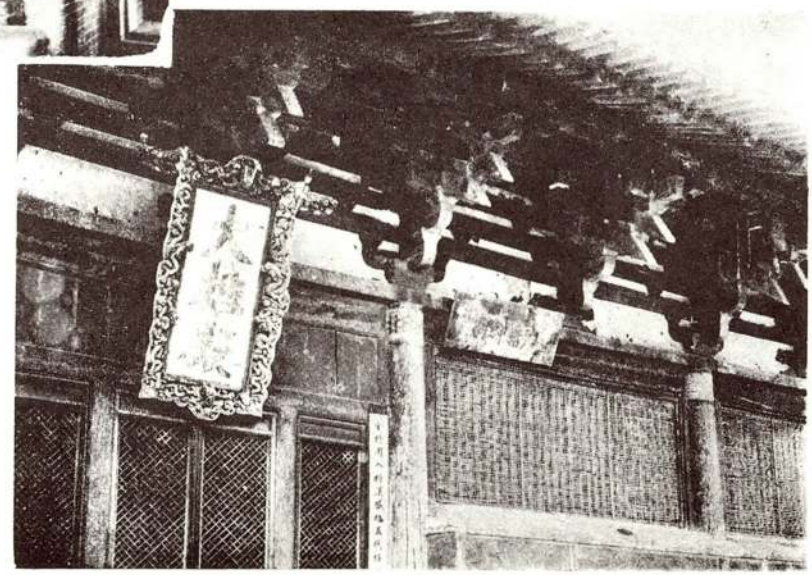
⬆ **義縣奉國寺の全景**

後方四注の大屋根のあるのが遼時代の大雄殿



⬆ **奉國寺大雄殿內陣**

⬇ **奉國寺大雄殿の細部**





⬆ **錦縣の佛塔**

錦縣の大廣濟寺前にあり、遼の末期清寧年間に建てられた。

遼代の佛塔 ➡

興安西分省白塔子

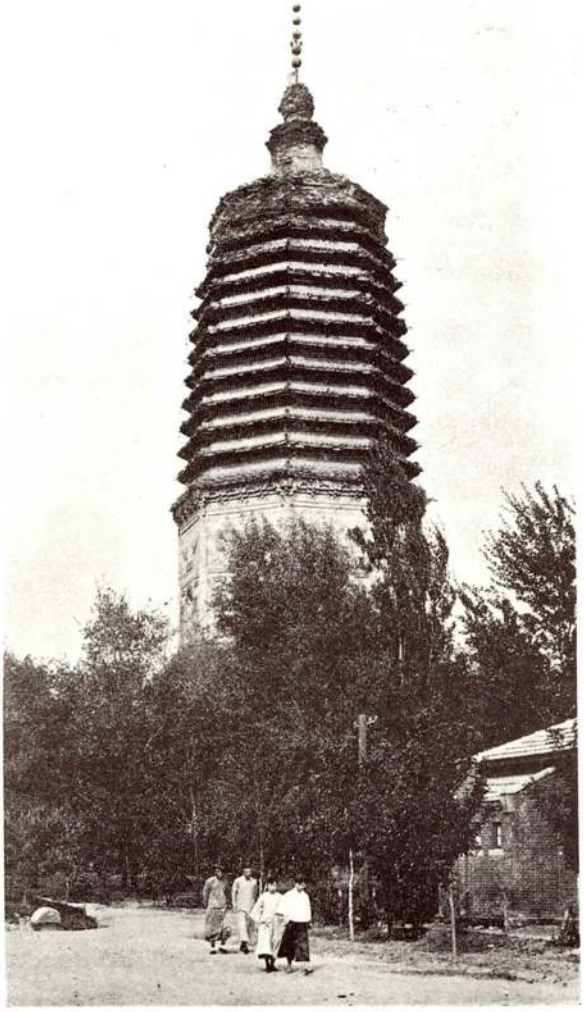
遼代には此の塔のやうに頂上まで昇れたものも建てられた。

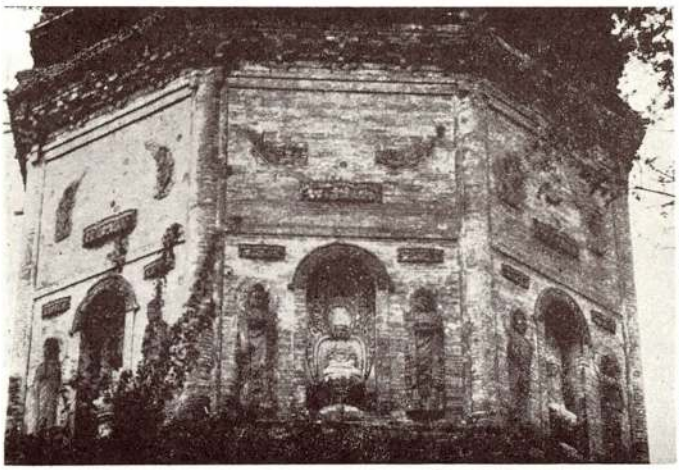


遼陽の白塔 ➡

遼陽滿鐵附屬地公園内

嘗て明・清代には廣祐寺の境内に屬してゐたが、今寺は廢滅した。塔は金代。





⬆ **遼陽白塔の細部**

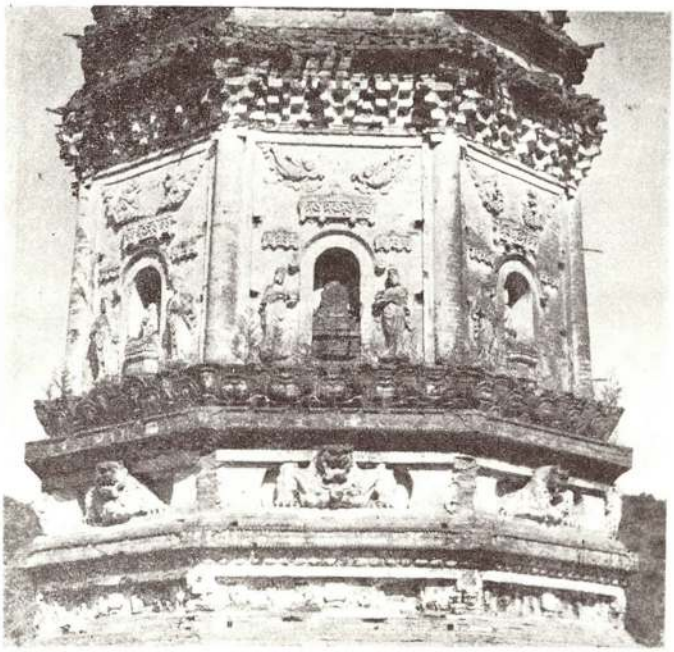
熱河省朝陽の北塔 ➡

朝陽はもと三座塔といひ、三つの塔があつたが、今は南北の二塔のみ。北塔は金代と推定。



析木城金塔の細部 ⬇

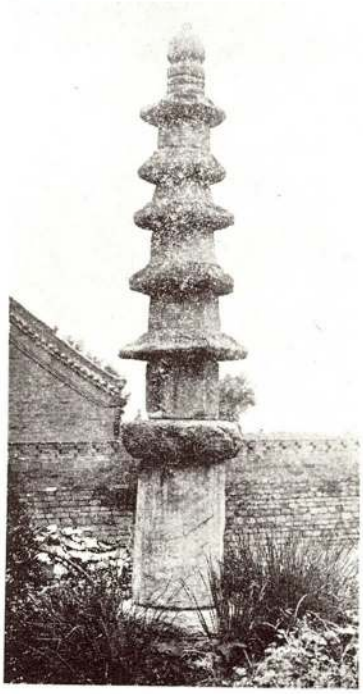
海城縣析木城、遼代



開原城内・石塔寺の塔

石塔寺の前方には金代の大塼塔があり、この石塔は寺の背後に立つ。明の正統十三年建。

⬇



鐵嶺龍首山の塔

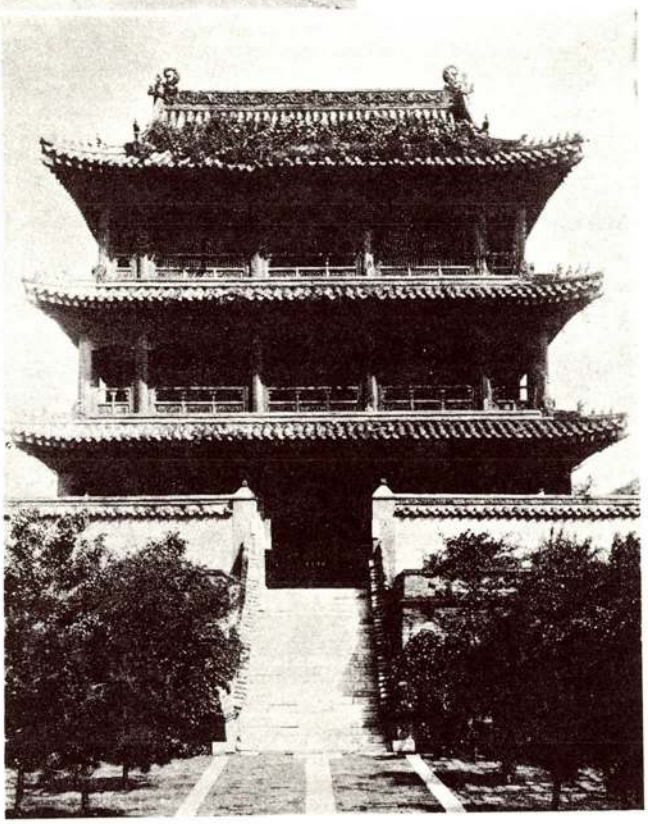
明の弘治二年に建て萬曆年間重修した。近年の修補の結果甚しく損くなつた。

⬇



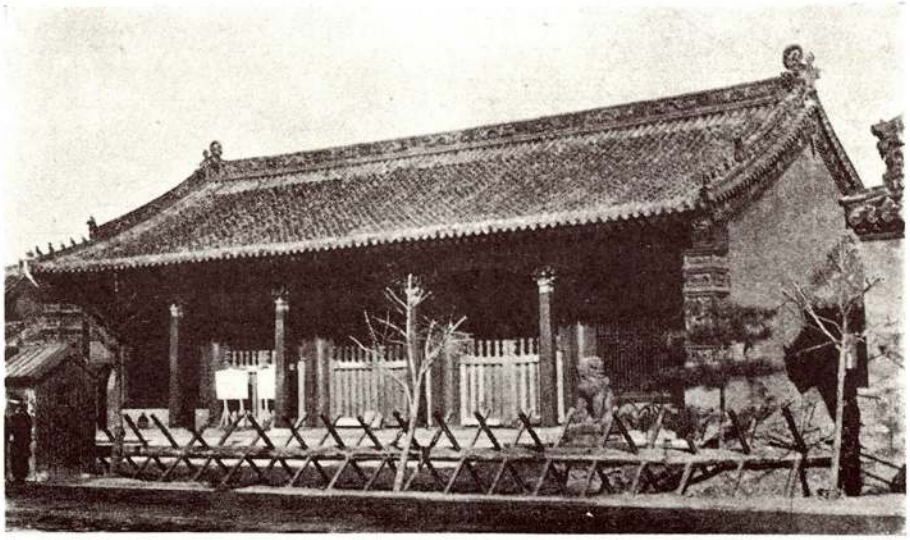


⬆ **奉天宮殿・大政殿**（東の一廓）



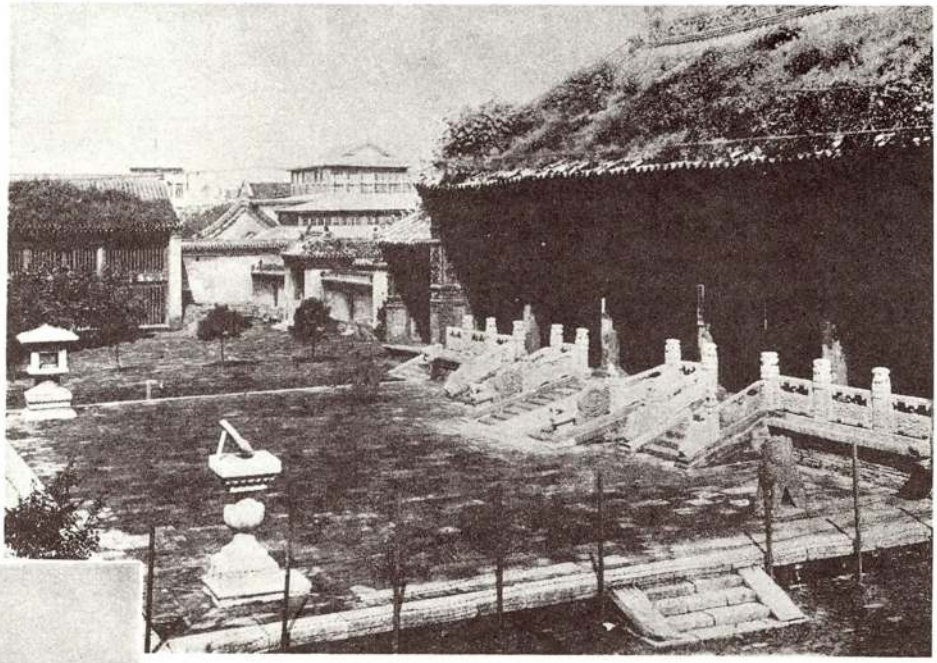
奉天宮殿・大內宮闕、鳳凰樓 ➡

修補の結果、今は草がなくなつてゐる。



⬅

奉天宮殿・大內宮闕、大清門（中央の一廓）



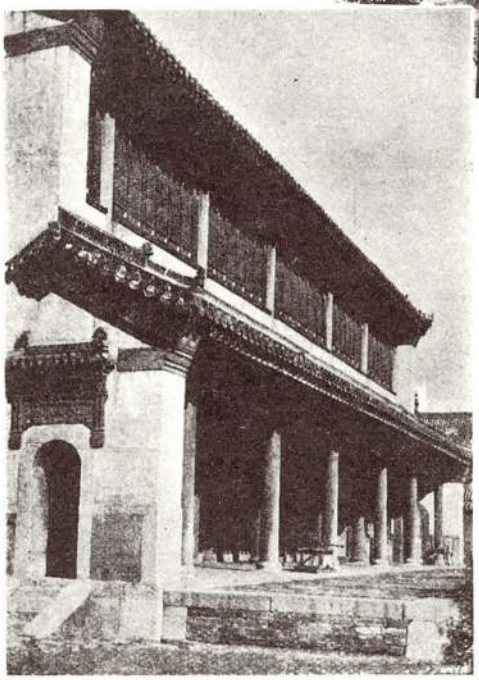
⬆ 奉天宮殿・大內宮闕、崇政殿

昭和七年夏寫す。その後修補して屋上の草はなくなつてゐる。

奉天宮殿・文溯閣

有名な四庫全書を藏す。

⬇



⬇ 永陵の碑亭

奉天省東邊道老城の近く

永陵は清朝の先祖を祀る。





⬆ **福陵の隆恩門**

奉天城東。清の太祖の陵

⬇ **福陵の墳丘、明　樓**

圓墳の前にあるのが明樓、向つて右方にあるのが角樓。





⬆ **昭陵の正南門**

奉天城西北、清の太宗の陵

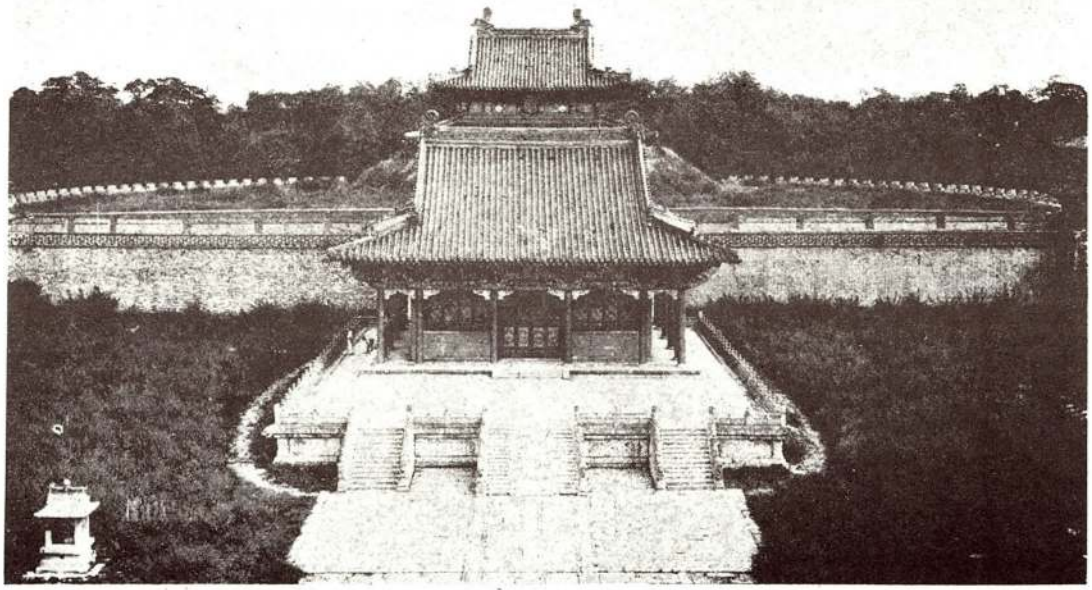


⬅

昭陵・隆恩門

門や殿の名は、どの陵も同一。

⬇ **昭陵・隆恩殿、明樓など**





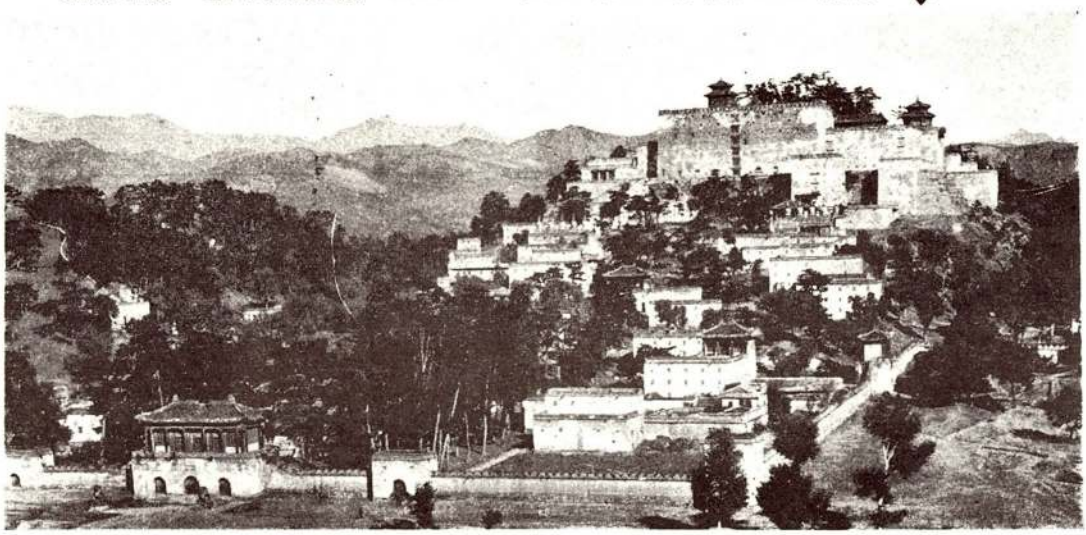
⬆ 喇 嘛 塔

奉天城北、法輪寺のラマ塔
一名北塔、清初時代

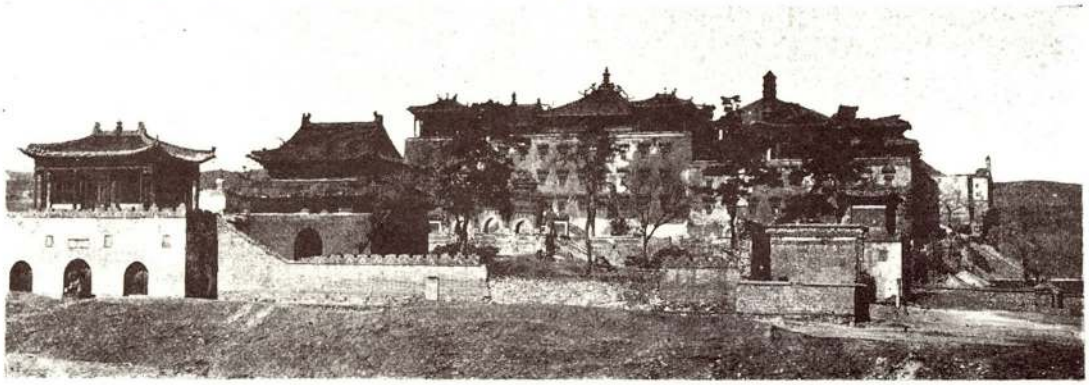


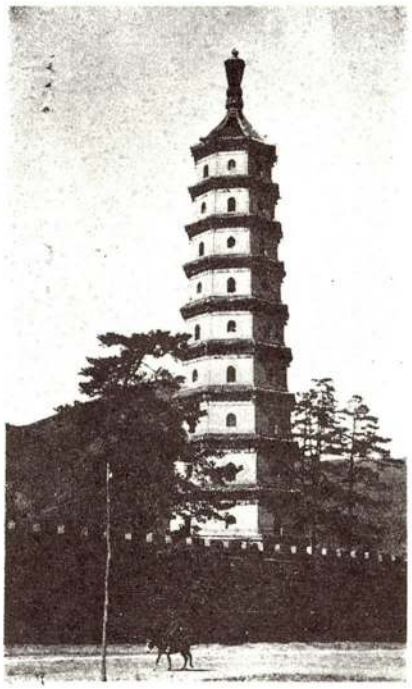
⬆ 洮南郊外のラマ塔

熱河承德・普陀宗乘之廟 普陀羅(プダラ)廟と一般にいふ。乾隆三十六年完成。 ⬇



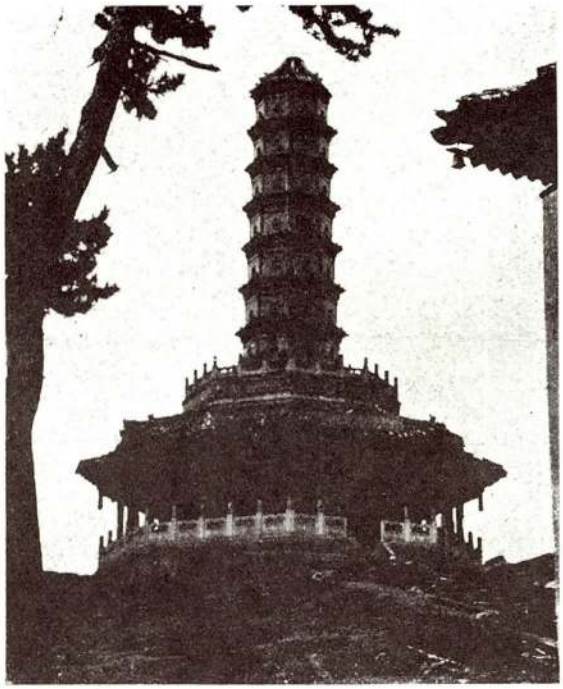
熱河承德・須彌福壽廟 乾隆四十五年建 ⬇





➡ **熱河・避暑山莊内の永祐寺塔**

一般に六和塔と呼ぶ寺は今跡形もない。



⬆ **須彌福壽廟の塔**

これは一寸類型のない塔。



⬆ **海城の魁星樓**

城壁の東南隅には魁星樓を建てるのが普通である。しかし樓の形には定制がない。



➡ **山海關天下第一關**

天下第一關の額をかけてゐるのは山海關の東門である。



⬆ 奉天・北清眞寺
（回教）大殿後方の樓

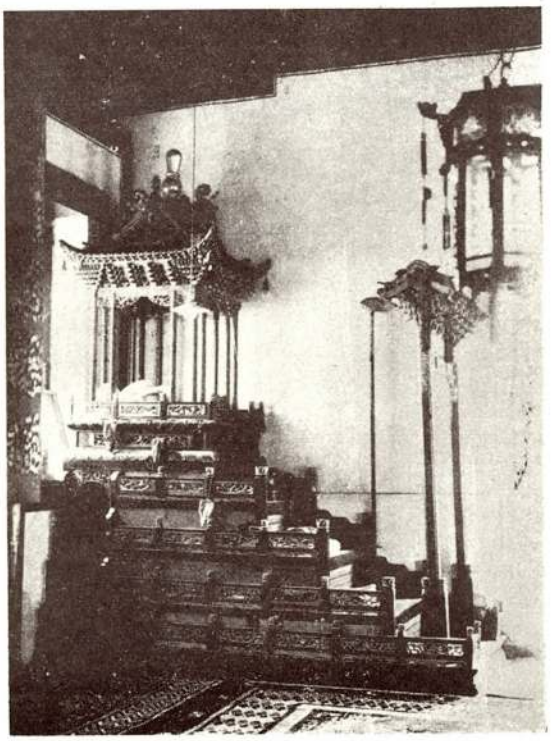


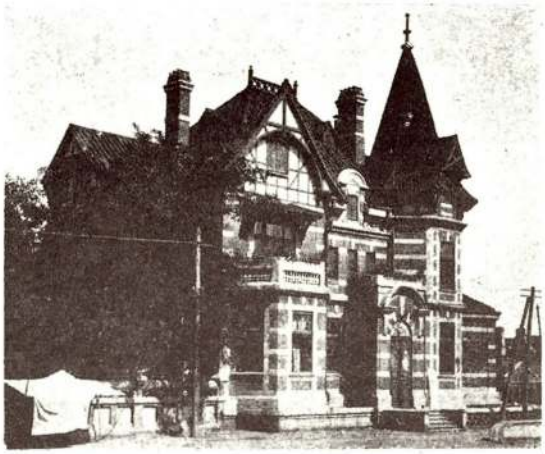
⬆ 奉天・東清眞寺
（回教）大殿後方の樓

⬇ 吉林・北清眞寺、ミハラブ
（回教）大殿の西壁



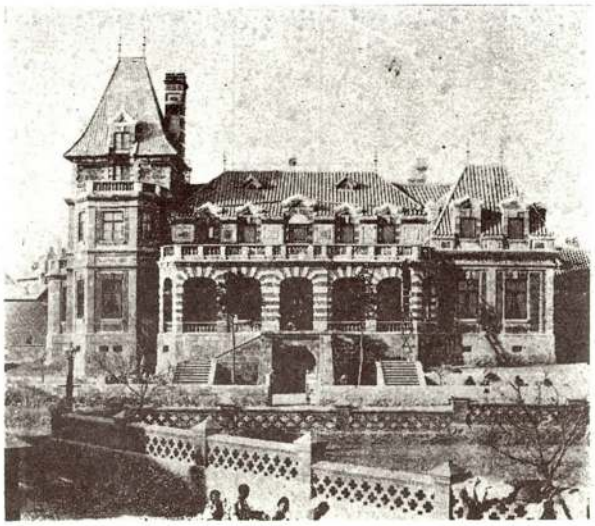
⬇ 吉林・西清眞寺、ミンバル





⬆ 露治時代の建築

大連ロシヤ町・今は日本橋圖書館



露治時代の建築 ⬆

大連ロシヤ町・今の滿洲館
（滿鐵總裁の迎賓館）の舊觀



⬆ 旅順白玉山の表忠塔

正金銀行大連支店 ⬇





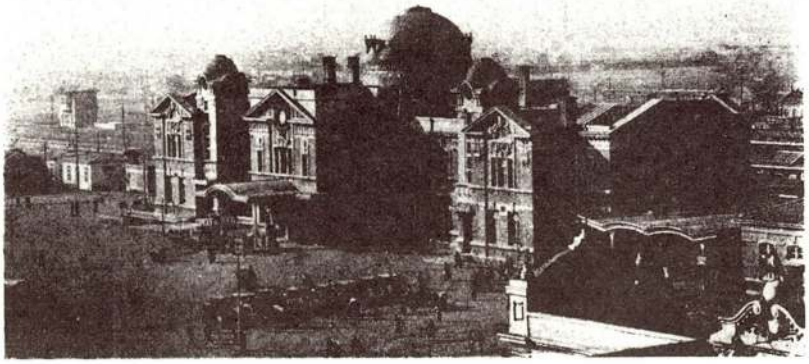
大連民政署 ➡

大連市役所と合同



朝鮮銀行大連支店 ⬅

奉天驛 ⬇



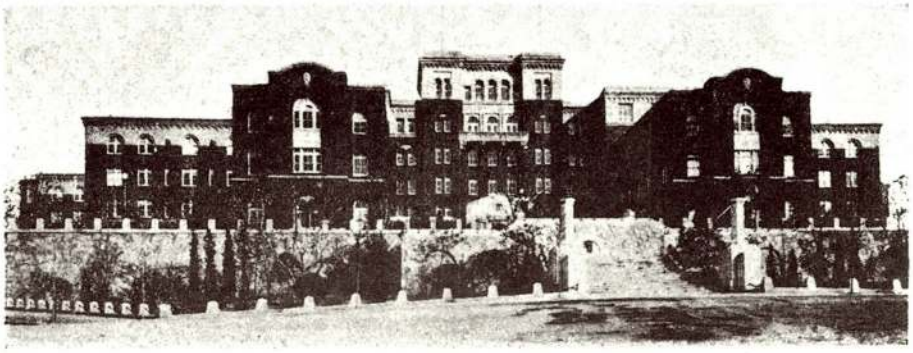
撫順炭礦殉職紀念碑 ⬇



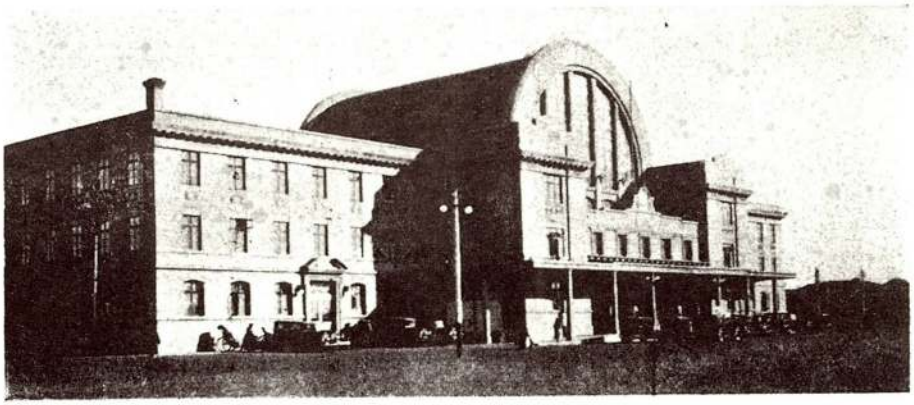


⬆ 四平街驛

大　連　醫　院



奉山鐵路の奉天總站



奉天ヤマト・ホテル



南滿洲保養院
大連郊外小平島のサナトリアム



滿洲著名建築グラフ

解說　村田治郎

滿洲に於ける建築請負界の現狀

小黑隆太郎

○

先づ滿洲に於ける建築の施主（起業者）と、工事の種類とに就てその概要を述べて見たい。滿洲事變以前に於ては其大部分が滿鐵會社の工事で、事務所、驛舍、工場、病院、學校、各種の試驗所、研究所、社宅及び之に屬する建築、幷に滿鐵傍系會社の建物等であつた。關東廳、關東軍其他民間の建築も有つたが、滿鐵會社の工事に比すれば極めて少いのである。事變直前の如きは滿鐵會社の工事すら非常に尠くなつたのであるから、其他は數ふるに足らぬ程であつた。然るに滿洲事變後、滿洲建國により其發展に伴ひ、頓に土木建築の事業勃興し、滿洲國官署の廳舍、官舍、其他諸般の施設に伴ふ建築。軍部の廳舍、兵營、病院、官舍等。中國銀行の營業所、宿舍等。借款鐵道の新線、延長線、改良工事に伴ふ驛の各建物及び社宅、其他民間工事等が盛に勃興するので、著しく施主即ち起業者の數を增加し、工事の量も亦激增したのである。

滿洲國政府の建築工事は初め國都建設局で取扱はれてゐたが、今春より國務院（內閣と內務省とを兼ねたる如きもの）に屬する需用處（建築と用度とを取扱ふ所）に移管されたそして國都建設局は新首都新京の建設に關するもののみを取扱ふこととなり、市街の道路水道等がその主要なるもので、今の所建築は少いのである。また今年4月より國道局なる官署が設けられ、10年計畫で延長6萬キロの國道が該局によつて施工さるゝのである。また大新京市街（舊東京市より少し廣い）の中、鐵道附屬地は從來通り滿鐵會社新京地方事務所の所管に屬し、商埠地及び舊市街（城內）は新京市政公署（市役所の如きもの）によつて取扱はれてゐる。各省各縣に於ても追々工事が出るであらうが、現在では奉天省公署奉天市政公署等に多少の工事があるのみである。

また今春より滿鐵會社の中に鐵道建設局が設けられ、鐵道の新線、延長線工事及び改良工事中の大なるものは皆該局で取扱つてゐる。吉長吉敦（京圖線と改稱せられた）、吉海、瀋海、四洮、洮昂、齊黑、呼海等の借款諸鐵道及奉山鐵道（官線）は滿鐵會社の委任經營となり、夫々の鐵路局は鐵路總局（奉天所在）にて統轄することゝなり、改良工事、橋梁（木橋を本橋に架け換）工事、修築工事等が各所に行はれてゐる。斯く工事の勃興と共に施主即ち起業者が頗る廣範に亘るものとなつたのである。

○

次に工事の量と其の場所とに就いて少しく述べて見よう。滿洲事變前に於ては、借款鐵

道はその元金を償還せず、利息も支拂はず、修理もせずに使ひ荒すと云ふ狀態であつた。また軍閥（張作霖及び張學良）時代に彼等の實施せる工事は、日本領事館を介して委囑されたものすら、其の請負金を支拂はない。また連山灣胡盧島の築港工事の如きは、和蘭の土木會社に施工せしめてゐるのであつた。それゆゑ日本人の請負工事は關東洲内と滿洲鐵道附屬地内に限られた狹い範圍であつた。それが滿洲建國と共に俄然廣い舞臺に活躍することゝなつたので、現に行はれつゝある土木建築工事は、西は承德（熱河）地方に及び、東及東北方面は沿海洲國境近くに到り、北は將に黑龍江畔に達せんとしてゐる」事、揭載禁止事項に屬するものが多いから、一々指摘して之を枚擧し得ざることを遺憾とするものである。

工事の量を請負總金額の比例に依つて見れば、昭和4年度は平年の量（大正 7—8 年の好況時代を除く）であつたが、同5年度には前年度の5割3分に相當する量に減じ、同 6 年度には4年度の殆ど4割に相當する量にまで激減したのである。然るに昨年（昭和7年）度は 4 年度の 2 倍以上に達し、本年度は4年度の2倍半に上るであらう。本年度の土木建築工事費の總額は1億萬圓を下らない。明確なる數は未だ得難きも、その中の4千萬圓が建築工事費であらう。然し軍部、滿鐵會社、關東廳の如きは煉瓦、セメント等の官給又は社給材料があるから、請負金額としてはそれより更に減少することは言ふまでもない。

來年度は軍部の工事が本年に比し1•7倍に上るであらうと豫想せられ、滿洲國政府及び滿鐵會社は今年建築が少かつた（鐵道土木工事は多い）が、來年度は相當巨額に上るらしい。新京市街の都市計畫に屬する分は、來年かなり建築せらるゝであらう。奉天鐵道西の工業地區も來年からは工場建築が起り初めるであらう。また鞍山の製鋼所及び工業化學會社の工事も續々出るであらうから、一般の豫想には、來年度は本年度の2倍に達するものと見られてゐる。

○

次は請負業者に就いて述べる。却說滿鐵會社は工事を特命または指名競爭入札に附してゐるので、其方法として指定請負人制を採つてゐる。即ち每年2月頃工務委員（工務關係の課長以上中より任命する）會を開き、請負人を詮衡指定し、また奬勵的に資格（甲乙丙丁の階級を設け、夫々請負金額の最高を定めてゐるが、社外には極秘としてゐる）の高下、區域（請負工事の指名せらるゝ場所）の增減等をも決定するのである。不況時代には業績極めて不良なる者を除名したるも僅かに 4—5 名に過ぎない。不良ならざる者を削減して其の職業を奪ふことは情として忍び難いので、大正 7—8 年の好況時代に增加せる指定請負人を如何ともなし得なかつた。然し滿鐵會社の收入減に伴つて工事は年々激減すると云ふ狀態であつた。その指定請負人を會員とする滿洲土木建築業協會は、奬勵金を出して業者の合同及び廢業を奬勵したのである。斯くまでして請負人の減少を圖るものを、單なる情實關係で、工事量の減少に反し請負人を增さるゝことは困ると、工務當局に主張したこ

とが誤解され、滿洲の請負界はモンロー主義であると傳へらるゝに至つた。昭和6年の如きは請負總金額僅かに450萬圓の工事を、62の本店と90餘の支店出張所とで施行すると云ふ慘憺たる不況の狀態であつた。それにも拘はらず猶且つ進出を希望せらるゝ者の數からざりしに依つて見れば、內地業者の滿洲に對する認識不足に驚かざるを得なかつた。

然るに滿洲事變以來凡ての狀態が一變した。從つて土木建築界に於ても、事業の勃興と共に工事が激增し、滿鐵會社の指定請負人も本年度は12名を增加して71名となり、それらの組の支店出張所も120以上に達したのである。そして事變前には滿鐵會社の指定請負人以外は殆ど請負業者らしき者なく、概ね下請負程度の業者であつたが、事變後日本內地及び朝鮮より續々進出して來るので、新京の如きは100以上の相當な業者の進出を見るに至つた。滿洲國需用處の如きは、今日まで工事指名を願出でたる業者245名に達してゐる事より見て、如何に多くの業者が押寄せつゝあるかを推知し得るであらう。

內地より滿洲に進出する請負業者の最も注意し且つ研究せねばならぬ事は、日本內地と滿洲とは大に事情を異にしてゐる點である。之を詳知せずして滿洲の請負に成績を擧げんとすることは、木に據つて魚を求むるよりも至難である。昨年內地の有力なる組が新京の某工事に20萬圓の不拂を起したのもその爲である。目下工事中の某々組の如き我邦一流の請負業者であり乍ら、巨額の損失を招くことは既に明白となつた。また朝鮮に於ける一流の某組も目下非常に苦辛してゐるが、是も少くとも損失10萬圓を下らぬであらう。是等に徵しても土地の事情に通ぜざる者の好成績を擧げ得ないことは火を見るよりも明かである。

抑々今年の如く材料工賃の頻々として騰貴する時に於て、請負業の好成績を擧げることは非常に困難である。若しも値上りを見越して見積れば、入札には落札しないから、自然互に時價を以て競爭する。而していよいよ施工にかゝれば必ず騰貴するから損失を招き易いのである。土木工事は請負金額に比して材料が少い場合が多いから、材料騰貴による損害は比較的少いが、建築工事は材料がその7割を占むるので、本年の如き場合には案外損失を招くことが多いのである。從て本年度の請負業態は、經濟上より見て、一般に餘りおもはしからぬのである。

○

建築用材料の價格の變動に就て少しく述べて見たい。今年はおくれて鞍山の製鋼所及び甘成子（大連附近）の工業化學會社の事務所工場等の建築工事が出はじめた。また奉天では滿鐵會社の代用社宅（南滿興業會社經營）及び住宅、店舖等が、今春以來頗る多く建築されて、夥しく鐵道附屬地の市街が南方渾河に向て擴張せられつゝある。滿洲に於ける其他の建築工事は殆ど北部地方で、其の主要なるものは新京、吉林、哈爾賓、齊々哈爾、海拉爾、北安鎭、掖河、佳木斯等である。是等の土地はかなり遠い距離に點在してゐるので夫々情況がおのづから異つてゐる。故にその一例として、就中最も建築工事の多い新京を

擧げて見よう。新京に於ける今年の消費量は煉瓦約9千萬個、セメント約16萬樽、石灰約460萬貫（生石灰粉石灰混同）、砂約2萬5千立坪（煉瓦製造用を含む）、（砂利は碎石にて割栗と合計され正確な數を得難い）、木材尺〆30萬本、板硝子1千5百噸等であるから、之によつて工事の量を推知し得らるゝであらう。新京は昨年急に建築工事が增加せる爲、建築界は頗る苦辛したのであるから、昨秋より滿洲土木建築業協會は屢々工事座談會を開催して起業者及び施工者に注意を促し、材料及び職工人夫の調節を圖るの必要を力說し、協會も亦其の調節の爲に努力したのであつた。幸に軍經理部では冬期中に撫順、奉天方面にて持越の煉瓦を購入し、之を新京に輸送して使用（煉瓦1個約1錢2厘、汽車運賃軍は半額なれば6厘、合計約1錢8厘）せられた。また滿洲土木建築業協會にても牽制策として煉瓦を製造せしめた爲などが主なる理由で、煉瓦1個2錢を振出に漸次騰貴せしめんとした製造業者等の今春の計畫は破れて、赤煉瓦1個1錢8厘を上らなかつた。目下は製產過多で或者は1個1錢5厘の弱値を唱へるに至つた。又軍經理部は大英斷を以て軍部工事一切の木材を夙く新義州營林署に契約した爲に、8月中旬までは木材は騰貴しなかつたのである。然し軍部用製材の終に近く頃より漸次騰貴して、目下1才1錢8厘即ち常時の3倍に暴騰し、猶ほ止る所を知らぬ有樣である。是は匪賊のために安東材、吉林材等の伐採量が少く、既に木材の不足を告ぐるに至つた爲である。川砂は種々なる事情に妨げられて遂に調節を取り得なかつたので、冬期間1立坪8圓のものが馬車徵發または道路不良等の爲に一時は30圓まで騰貴し、それも品拂底の爲に四平街、公主嶺等より汽車にて輸送し、1立坪32—33圓の砂を使用せる者さへあつた。次年度は完全にその調節を期するため、國都建設局に於て計畫をなしつつあるから、來年は斯の如き騰貴を防止し得るであらうと信ずる。

○

職工人夫も本年度は非常なる不足を來たしたる爲に、爭奪戰と勞銀の昂騰とを免かれなかつた。特に左官の如きは就中最も甚しきもので、滿洲事變前には800人位の在滿支那人職工が、現在では瓦匠（煉瓦工）の辛うじて左官鏝を動かし得る程度の者まで狩り集めても、その2倍を超ゆること幾干にも上らないであらう。然るに本年度工事には一日平均3千人を要するのであるから、目下烈しき爭奪戰が行はれ、從つて工賃を吊上げつつあるので、平時1圓20錢の工賃が、3圓を給しても猶且つ必要なる人數が集まらないと云ふ狀態である。是は今春より既に明かに豫想された事であり、且つ滿洲土木建築業協會は1萬乃至2萬圓の經費をかけても調節したいとの意見であつたから、大連左官組合とも屢々折衝し、或は滿洲各地の左官棟梁を集めて座談會を開催するなど、種々方法を研究して見たが複雜なる事情が纏綿してゐる爲、遂に日本內地及び朝鮮より左官職工を呼寄せてその調節を圖ることが出來なかつた。人夫の如きも鐵道新線工事に要するもののみにて8萬人以上である。然るに每年滿洲に出稼し來る天津山東方面の苦力は、滿洲國政府の方針としてそ

の移入を阻止すべく嚴重に取締られてゐる。また天津、山東方面にては支那官憲が滿洲出稼を妨止してゐるので、苦力に甚しき不足を生じ、鐵道其他の土木工事場にては苦力の募集に苦辛してゐる。從つて苦力ブローカーなる新職業が出來、甲より乙に、乙より丙にと私に移動せしめ手數料を貪る惡辣な者が多くなつた。また途中逃亡して前借金を踏倒すことを繰返してそれを職業かの如く心得てゐる不良苦力が甚しく多くなつた。是等に就いての對策を如何にすべきかと云ふ新しい問題に遭遇してゐる。邦人職工を內地より移入する案は、土建協會報に卑見を陳べてゐる。且つ是等の問題に就いて別に投稿せらるゝ諸氏もあることゝ思ふから茲には省略する。

○

滿洲請負界の實狀を陳ぶるに當つて、逸すること能はざる所の一事は滿洲土木建築業協會である。これは日本內地或は朝鮮に於ける同業組合または協會と多少趣を異にし、單なる同業組合ではない。20年の歷史を有する同業組合が昭和3年秋社團法人の協會組織となし、起業者（施主）と施工者（請負人）との仲間に立つて、兩方の利益の爲に最も有効に働いてゐる公益團體である。該協會が請負業者を向上發展せしめ、以て社會的地位を高めつゝある事、また業界の改善進步に努め、且つ研究、調査等をなして、起業者、官衙、銀行等に便益を與へる事等に與つて力あるは、足一度滿洲の地を踏んで、土建界を一瞥せる人士の等しく認むる所である。現在正會員は69名、準會員（支店出張所主任）119名、賛助會員2（材料商組合、煖房組合）である。私は現在の立場上自畫自賛の嫌があるから是以上の紹介を差控へて、滿洲土建界に無くてならぬ法人であることだけを附記して置かう。

○

來年度工事の豫想は既に述べたから、蛇足ではあるが最後に將來の豫想即ち滿洲工事界の好況時代が何時まで續くかに就いて卑見を附加へて見たい。鐵道工事の新線、延長線、改良工事等は尙三・四年繼續するであらう。建築工事は新京、哈爾賓の都市計畫及び奉天市街の擴張と鐵道面工業地區の發展等に伴ひ、尙五年は繼續するであらう。其後は國道、各所の殘工事及び建築等で年々急激に減少しつつゆくであらう。斯くて好況時代に連れて充實せる陣容を縮少し、膨脹せる經費を輕減するために、業者の腐心する時代が必ず來るのである。是れ獨り業者のみでなく、滿洲土建界全般が今より緊褌すべき重大事ではあるまいか、聊か老婆心を附記して筆を擱く。

滿洲見學旅行感想の斷片

永瀨狂三

今時滿洲旅行視察談を書くことは、餘りに野暮な事柄で、既に縦からも横からも書かれて、知り盡くされて居る。さればと云つて、記念旅行に加はり、協會員として、しかも補助費迄受けて出掛けた以上、多少誌上に書く義務もある様に思はれて、止むなく、二三の雜感を述べる事とする。視察報告ではない、若し千慮の一得ともならば、限りない嬉びである。

大　連

滿洲の大連ではなく、關東廳の大連市である。內地と變りない筈であるが、地理的に、地質上に、吾々の目に多少の相違が映するのである。入港に稅關の煩がなければ、既に其處に一の親みがある。十年一昔と云ふが此市は既に 30 年を經過して居る。今は二代目の落着きのある港と云はれ得る。

船から市街を仰視するに、市中に煙突の少いのを知る、工業都市でない爲めであるが、冬は煖房の爲め煤煙の市となるべきも、今此夏に於ては、全然屋上煙突の林立に其有樣を窺はれる。汽車は煙を吐くも、地面に近く、且僅である。船は特に此日少いと聞くも恐らく空を焦す程にもなるまいし、音響其も少い。汽車は警笛を鳴らさず鐘である。自動車は盛に鐘を鳴らすも比較的遠きに達しない。其れ故靜かなる市街と思はれるのである。從つて素人目には商業さへ不振かと推察さるゝ、又船上より市街を包む山岳を見るに、山は綠を帶びて內地の貧弱なる小山に等しく、或時期に植林し或時枯死し、再度の植林の結果、今の狀態に達し而も播種ならずして苗木植付なりとは、其勞苦は非常なもので、百年の計も知られざる苦心の結果と思ひ合はさねばならぬ。

而して市街は綠の前に、赤靑白其色取り樣々の工合は、色彩的壯觀である。曾て我々が大震災前の東京に於ける、所謂西洋建築の感を呈する。今吾々は煉瓦造の家を見ると、危險であるとか、許されざる建物であるとか思ひ出さるゝ、若し大陸より旅行者が鐵道により大連に來り、日本に渡らんとして、日本建築の概念を其等建築によつて、得るであらうと思ふ、此處にて地震の恐れなしと思ふよりも、初期の建築であると印象つけらるゝ。

然し住宅地域を見る時は流石は寒國であるが故に、靑赤等の瓦でありとは云へ、壁體は煉瓦である、吾々の見慣れて居る、大皷壁ならざるを感心する。

かく大連の住宅地は壯觀である。內地の住宅に比較する時は、內地の上流生活者の家と見るべき住宅のみに依つて滿たされ、然も敷地は充分廣く餘裕を存して居る、從つて市街

面積の擴大さるゝは、無理なく、又人口に比して活動する者が多いに違いない。恐らく隱居して大連在住者は少からうと思はれる故である。吾々の惡るい因習なる故鄉忘じ難くて此地を墳墓の土地と決心せざる者が多いと推察する。今は非常時發展最中で、市中に貸家は殆どあるまいが、數年前と雖も借家は少く、有るも高價である。其れ故2年限居住の意志ある者は、住宅を新築する事となつて、內地の住宅新築感とは相異して居るのである。大連に渡航した者は皆住宅を所有し得ると云ふべく、さればとて住宅を建築し得る資產家のみならねば、小資本者若しくは內地より來れる勞働者は大連に居付かなくなり、徒に他人の立派なる住宅を見ては、自分の腑甲斐なさを感じ、馬鹿らしさを感じて退去するのであると云ふ。又默々と蓄財して、人並に互せんとするものもあるであらうが、中途屈折し自暴自棄者となるものも多いであらう。由來開港地は所謂金遣が粗く、金廻りが良いと云ふが、其特徵を此大連港は的確に表はして居ると察せらるゝ。關東廳は遼東半島の西南尖端である、其れ故、是を以て、滿洲を窺はんとする事は素より不可能で、恰も象の尾をさくる盲者の如きか。

山　　川

大連近くの山は柔かな、穩かな姿である。山高ければ水深しの言を眞とすれば、海深からざるべく、森林なければ魚棲まずと云ふのを眞とせば漁獵も不可能であらう、と推察するに難くないのである。大陸は魚類の形大くして、其味佳ならずと言へるのと同時に、國民の魚類を好まざるも自然の成行である。

旅順近くの川は丁度江州邊の川の如く、小石が羅列せらるゝのみで、水は平常ないのである。從つて橋の必要もない、萬一大雨の時は急に增水し來るも僅か時を經過すれば舊に復し、小雨の場合は其等玉石の下を流れ去る。其れ故橋はなく小石を列べたる道路が橋であるのも面白い光景である。

紅塵萬丈

と云ふ語は漢文で教へられたのである。支那の夷狄地方に迄通用語として出來たのでもあるまいが、滿洲も猶其範圍を脫せぬのである。三寒四溫は新らしき語であれば此邊にのみ通用する語であるかも知れぬ。尤も氣溫的關係は漢文に示されて居る事が少い樣である。扨其紅塵萬丈は北方沙漠よりの風に依つて爲さるゝ結果の苦なるも道路の黃塵而も自動車に捲き上げらるゝのも、現代的に其言を證明する價値があるのである。吾々は捲土重來を大切なる語と心得て居るが、思ふに再び來れ位の意味であるかも知れないのである。

葬 及 婚

吾々は葬式に叶ふ日、大連市中を歩いたのであつた。其爲め葬式に出會ふ機會を得たのである。佛の何人かは不明なるが、自動車で葬列を作つて居たのである。靈柩車が支那式と內地式との混合であつた。

而して又其翌日幸に黃道吉日であつたと見へて、滿洲式の婚禮の馬車行列に大連旅順間

に四組も迎へる幸運に會つたのである。花嫁の裝の見得るなどは素より不可能の馬車上に据へられた輿の中にあつて、儀式充分に滿飾を施し樂人さへ供へるなど、娘一人の爲めに稍産を傾けるにはあらぬかと、內地農民の有樣と大差なき事を推察したのである。斯かる儀式は部落中三四日連日の祝賀の宴で喜びの裏に悲みが、ひそむのであると聞かされたのである。

停車場

奉天や新京停車場に比して大連停車場は假の貧弱なものである。敷地は決定されて居ても未だ案すら出來て居ないと云ふ事である。事實本社が近くにある以上停車場は必要がないかも知れない、市の誇とする必要は素よりない。又始發停車場として、しかも改札なく、乘車せしむる故、待合も廣き必要なく、見送りの入場券などの雜收入は無論認められないのである。此の如き組織とすれば、割合に混雜はするが取締は簡單である。

昆虫

少年時代博物採集に興味を持つた我輩には、郊外に出れば草木より、虫魚に至る迄皆友人の樣な氣がする。從つて路傍の水溜にも、草叢にも直ちに注意を惹かずには居られないのである。先づ第一に時節柄蟬に耳を傾けるのであつたが、旅順に於て、ツクツクホーシの只一種より外は居ない樣である。初秋の氣分は蟬によつて日中は味はれ、夜は虫の聲である。夜又其虫の音も聞く事が出來ない。コンクリート道路の爲めであるかも知れないが郊外に出でゝ秋夜の情趣を味はれ得るのであらうが、汽車の窓から松虫、鈴虫、轡虫を聞き得る趣はないものと思つたのである。僅の旅行に於ては、秋夜郊外の情緒は知るに由ないのである、只僅か奉天に於て螻蛄らしい聲を聞いたのみである。

蚊は殆んど居ないが何處かで蚊帳を乾すのを見た樣に思ふ。孑孑の發生する水溜もなく藪蚊の住む叢もない爲めであらう。

蚤、虱、南京虫其等は宿屋に居るに相異なしと注意に注意して其等の橫暴に會はなかつたのを幸とする。蚤は別として、虱は滿洲の名物であるとか害はなくとも伴ひ歸るも名譽でなく、南京虫は其害の恐るべき體質もあるなどと他人の言を信じ、由來毒虫に弱き拙者は充分なる注意と豫防と且つ藥品の用意など爲しゝが全く幸運にして藥品の必要を認めなかつたのである。同行者の或人は其害を受けたのもあつたのである。此南京虫は南京人の虫で日本人の住宅や、日本人の旅館には居ないと謂はれて居たのであつたが。

蠅、是は滿洲の特產である。飛來するものなる故金網にて離間するより外はない。發生前に重油を撒布するとか、蠅取デーなどゝ云ひ得る範圍でないと言はれて居る。或人より麥酒を飮めば果物の種子を出す如く一口に一つや二つは蠅を出さねばならぬと聞かされて滿洲に於ける食物に對する不愉快さを覺悟して居たのであつた。云ふ迄もなく住民の飮食物を見ると稍其話に似た趣はある蠅を拂ひつゝ饅頭を食ふ有樣は、免疫されたる健康なる者か、然らずんば蠅は黴菌を傳播せぬものかと疑ふより外はない始末である。我々には耐え難き範圍の仕事である、然し內地人の住む若しくは活動する地域內には自然少い程度に

掃除が行屆いて居るのは嬉しいのである。若し內地と同樣に雨があり、濕氣が多くて昆虫の發生に適合して居るならば猶々烈しい虫の襲撃を受くるものと想像せらる、住民は幸にして乾燥せる空氣と氷點以下何度かになる土地とは程良く調節するものと思はるる、而して滿洲在住の役人の卓子には佛者の拂子と同樣に蠅叩きが備へられて居るのを面白く感ずるのである。扇子の代りに蠅叩きであるのを滿洲風景の一に加へたいのである。

家の窓は二重であつて夏期は一方の障子を除き、金網障子に換へられて居る。夏の日中の高溫度には矢張窓を開けた方が涼しい感じがする。されば蠅の來襲を恐れて金網張障子を用ゆるのである。單に家屋のみに止らず汽車の窓も同筆法に組立てられて居る。

燕、烏、鳶、雀さへ少い樣である、雀の外は食物の關係で黑色の豚の方が數多く讀まるゝのであるが、雀に至つては其理由を解釋するに苦む。一時もてはやされた鶉も或小局部に居る鳥であらうと思はれる。

奉天北陵の中庭は雜草の繁るに任してある。其の叢中に、バツタも黃蝶も白蝶も亦靑蛙さへ居たのを見た。種類と數が少くて絕滅したのではない、撫順公園に異樣の芋虫の如き珍らしく見たのみで採集方法がなかつたのを遺憾とする。兎に角蟻も蜘蛛も其他花に集るべき昆虫も少く空が紺靑である如く草叢の中は奇麗である。

瓜　田

見渡す處、昆虫によつて花粉の媒介さるゝ植物は少いのである。果樹も餘り目に入り難い程度で、坊間販ぐ果實の種類少なく、量も少ないから推察するのである。其に反し瓜の多量なるは異樣に思はれる。瓜によつて生活するかと疑はるる。是も近來は每朝一定の位置に運搬し消毒の上販賣を許さるゝのであると云ふが、住民は徒に繁雜な手數を、日本人によつて加へらるゝと、笑つて居るに違いない。

瓜畑は市街の近くに栽培されて居る唐時代より前に瓜田に履を入れずと云ふ語ある如く昔より今に至る迄、滿洲ですら絕へず常食として居るのではあるまいか、但し此邊り衣を矯す樹木はないのである。

衣　服

滿洲人は滿洲服を着て居る。吾々の所謂支那服と稱するものと區別あるや否やは知られないが、衣服によつて、滿洲人たるを明かに認識する事が出來る。日本人は和服も、洋服も、亦支那服をも、便宜にまかせて着る。一口に云へば主義なく姿を整へて居る。珍らしいのを好むか、動作に便なる爲めにか、恐らく其間に答へる事出來ない程度に、無關心に衣服を着て居る。但し日本婦人は傳統的に氷點下何十度の時ですら、在來の衣裝を變更せぬとの事、煖房の工合で耐へらるゝ樣子である。而して滿洲人は階級に應じて階級相應一樣の地合、色合の衣服を着るらしく察せらるる。婦人の姿を見る場合はなかつたが、滿洲へ輸出の織物は內地人の趣味に合ふ爲め丈けと思はるゝのである。

料　理

料理を榮養から論する樣になつては病人が滋養食をするのと變りがない。口に適するや

否やを標準と爲さねばならぬ。由來口の嗜好を評するには自分の口を基準とし、舌の趣味の發達し居るや否やは問題でない。發達の程度を計る事は素より難いが故に、練習によりてわれ發達せりと自惚るるのである。

或人は露西亞料理が世界一だと云ひ、或人は支那料理であると云ひ、各其通を表はしたがるのである。素より其標準は六ケ敷く、化學者は分析の結果と云ふかも知れず、榮養學者は消化率から云ふかも知れない。而して各國其國の最上級のものを比較せねばなるまい。然るに各國民は祖先以來慣らされたる食物によつて、時代の經過と共に發達し來たつたものである。料理と云ふのは食物の域を超越したものでなくてはならぬ。割烹なる名稱を發達した國にのみ用ゐらるゝ調理法である。割は日本料理の如く、烹は支那料理の如きが、其發達であると稱するが、變化が發達でもなく種類の多いのや、イカモノの料理が發達せりと云ふのでは無論あるまい。目、耳、鼻、舌、口腔等を滿足し得なくては料理の目的が達せられない。其れ故一方から云へば其等諸官能が等しく發達して居る人のみの評し得る範圍である。

滿洲に於ける支那料理は日本人向きに化し本來の味を失つたと稱する、日本人の嗜好に適する樣になつたのは日本人の滿洲に於ける勢力と、金力とが强くなつたのを意味し、吾々の慶賀すべき事件である。食物で征服するは非常な强味と云ひ得る、乍併內地の料理が粟米化し、日本の汽車の食堂は車によつては日本料理がないと云ふ悲哀が控へて居るではないか。

猶深く考ふれば割烹と云ひ料理と云ふも外國輸入であつて在來の日本の食物と思ふて居るのが、既に間違である。味覺は科學でない。各人同じでない。しかも一國人共通の云ひ表はし難き嗜好を有するのは面白い點であらねばならない。世間に食を好むものは多い。又味を好むものも少なくないが、只味を知るものは極めて鮮しと云ふべきである。

白　魚

奉天に於て白魚の吸物が食膳にあつた、味も形も亦期節も俳句と緣が遠いものである。大陸の魚は形大にして味又大味と云はれて居る。周圍の還境と白魚を賞美するとは合致せぬ次第、又鮎に似たフライ、鱒に似たテンプラ、何れも旅人の目を悞ますに止るのみである。此等の小魚は鴨綠江より氷と汽車の恩惠により旅店できへ使用するのであるが、米國の牛肉や又大正の好景氣時代米國のアイスクリームを食した、內地人の如き感を起したのである。物價の高いのではなく吾々の嗜好が高からしむるのである。

支那料理に於て燕の巢の疑物で滿足すれば一テーブルが約三分の二の價でありと云ふ、猶又內地人が支那料理は廉い廉いと賞贊する爲め、高からざれば價値ないものと思はるるかと、遂次不廉になつたと云ふではないか。

奉天に往復共宿泊したが、先きのは瀋陽館と云ふのであつた。煉瓦造三階建、和洋折衷で靴の儘室に通ずる、室には椅子あり卓子あり、其傍には上段の疊敷の室が附屬して居る。疊敷の箇所は寢臺であり又食卓である、所謂二重生活を爲し得る室となつて居るのである、しかも日本人のみに適する構造であつて見れば、宿泊料の高いのも無理はないのである。

味　噌

ハルピンは名古屋ホテルに泊る、外觀は煉瓦造にして內部木造なるが、廊下は靴穿の儘なるは前の瀋陽館と同樣である。室は全く疊敷で襖を廻らし疊の上に襖の傍に放熱器が、今は邪魔物とされて手拭掛位に取扱はれて居る。水道は未だ設けられず堀井戸を使用して居る。此處の水は一種の炭酸泉樣の味を持ち不味ではない。但し茶に入れ三四時間經過したものは黑インキになる傾向で有る、水に注意すべしと聞て居たのは此ハルピンである。

水に就て猶面白き話を爰に挿入しようと思ふ。

現在滿鐵區域內の市街は何れも上水を設けられて居る、只新京のみは急發展の爲め量に於て不足して居る、滿洲井戸を作れば水源の缺乏はないとか云ふも、沖積層の程よき水と見出し得るやを疑ふのである。一夜友人を某ホテルに訪問したのであるが、茶を飮み其殘りを暫らくして見ると普通の殘滓以外茶色の沈澱物がある。友人曰く、此沈澱物が滿洲の水に溶解し居るが故に滿洲人は黃土色の顏色を呈するのであると、まさか其を眞ともしないが話題として記憶に止めんとする。閑話休題、普通滿洲視察旅行者の最後の地が此哈爾賓である。地圖を見ると此處が滿洲の中心に位する、此奥地に於て、東支鐵道をも過ぎた此奥地に於て、日本酒も味ひ得らるる（麥酒は櫻ビールの名稱であるが近くに釀造場があるとか聞く）猶又此名古屋ホテルは八丁味噌を三州より取寄せて此旅館の名物の一として居ると云ふ。

ダンス

ダンスは滿洲に於て盛に行はれて居る。日本人の爲めの市と、露西亞人目的のと、土地に依つて異るらしい。萬物蕭條の此等地方の冬期に於ては、必要上生れ出たものと推察し得る。素より永久に信用を保たんとするもの又は冬期娛樂機關として市民の爲めなどと考へられた結果でなく、一時的の博覽會場のカフエー然たる感じのするものであつた。恐らく建物の感じ、內部の裝飾の工合、或は又ジヤズが其感を深からしめたのでもあるまい。

外界と絕緣すれば室內の裝飾によつてのみ慰安は與へらるる。此點から云へば、山紫水明の地ならば室內裝飾は寧ろなくもがなである。

茶儀は雪國に盛に行はるるが茶室は風光明眉の土地に多く建てらるる。

博物館

奉天の博物館を見た舊宮殿であると云ふ。所謂旅行者の見る見方を吾々もしたのである。其內の二室には、入り難かつた。其は蒜か大蒜かの臭氣　堪え難い爲めで、床に毛織物を敷ける爲めか、番人の體臭か、其を研むる事も出來ぬ程、近より兼ねたのである。塞國に缺くべからざる强健劑としても耐え難きは只吾獨りのみではなかつたのである。支那人は臭い、露西亞人は金がないとか近來の日本人に對する、ダンサーの追稱と思ふは是か。

夏　草

滿鐵線路左右 60 メートルは高粱を蒔く事を禁ぜられて居る。匪賊の隱れ場所を少なからしめん爲めである。爰にも雜草は生えて居る、汽車中から花らしいものは野菊の類が見出さるるのみである。其他の畑中も全然草取りせずに收獲を得ようとするのは無理らしく察せらるる。滿洲の土地は施肥せずとも豐饒であると云はるるも其は皮想の感で、働かねば百姓は收獲が鮮ないに異ひない。面積廣きが爲めに量多いのと見るが適當の觀察ではあるまいか、草取りと云ふ事は畠以外には無益の事と知られて居るに違いない。其れ故に奉天北陵の苑と謂ひ、大成殿の中庭に於ても、亦博物館に於ても、草茫々として石壇によつてのみ步み得るのである。時侵珠履跡、不使玉階行とは古よりの習慣と見るべきか。（了）

建築法規に關する質疑應答欄

應答　本會法制委員會

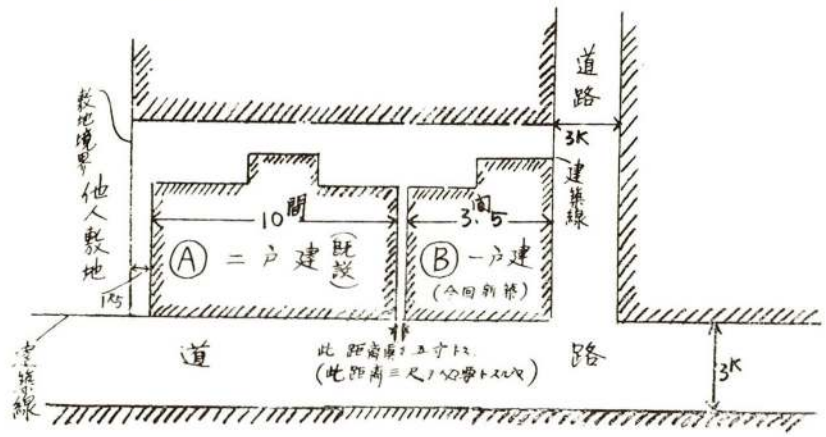
問 1

贊助員　本島武夫

大阪府建築取締規則第六十二條に依る下記圖示の場合の取扱ひに就いて御教示を乞ふ。

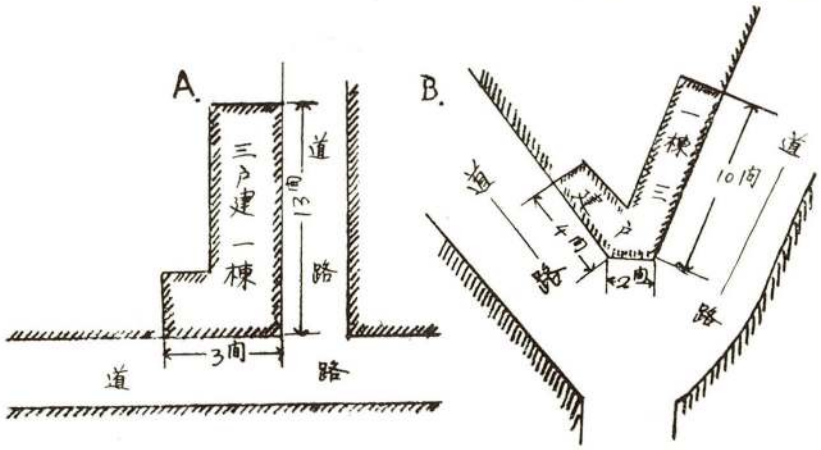
A. B. 敷地所有者同一人にして今（B）建物新築に際し A. B. 建物間距離三尺を必要としますか。

A. B. 共建築主は同一人です。もし三尺の距離絶對必要となれば A 建物の增築として二戶建に申請すれば好いでせうけれど……



問 2

大阪府建築取締規則第六十二條に依る下記圖示の場合間口は十六間として取扱ひを受けますか。



問 3

施行令第三條の二の第四號の解釋に就いて下記の場合御教示を乞ふ。

（イ）　大正十四年五月一日未指定地域の指定を受け當時原動機四十馬力を使用其後原動機を增加し昭和七年二月一日現在では計九十馬力を使用中。

（ロ） 大正十四年五月一日未指定地域の指定を受け當時原動機五十馬力を使用、其後一部廢止し昭和七年二月一日現在では二十馬力を使用中。

以上の場合（增加すべき馬力數は現在地に建築することを得ざるに至りたる際常時使用する馬力合計數を超過せざること）の數字は何處に基準を置きますか。

答

問第1 は大阪府令建築取締規則第六十二條は

木造長屋ハ間口十五間ヲ超ユルコトヲ得ス

木造長屋ノ兩端ハ屋上二尺以上（垂直ニ測ル）ニ達スル石、煉瓦、「コンクリート」又ハ鐵筋「コンクリート」ヲ以テ適當ニ構造シタル防火壁ト爲スコトヲ要ス但シ他ノ建物トノ間ニ三尺以上ノ距離ヲ保有スルトキハ此ノ限リニ在ラス

前項但書ノ距離ハ隣地ト所有者ヲ異ニスル場合ニ於テハ境界線ヨリ一尺五寸迄ニ減スルコトヲ得

第二項ノ距離ハ建物外側間ニ於テ之ヲ測算ス

とあります。この條文を見れば或は御質問の（A）（B）兩建物間に3尺の距離を必要するかとも一應は考へられますが、大阪府での現在の解釋としましては、取締規則第七條の長屋にして數棟密接して建設する場合總間口 15 間を超へざるときは3尺の距離を有せざるも支障なしと云ふことになつて居ります。

依つて御質問の第1の場合兩建物にその間隔を加へたる總間口が 15 間未滿でありますから3尺の距離は必要ありません、只既設の2戶建長屋の中で今回建築のものに接する1戶の採光、空地等は市街地建築物法所定の量を有効に保持しなければならないことは當然のことではありますが御注意致します次に **問第2** に就ては取締規則第六十二條第一項の間口は御示しの圖だけでは明確に御答へも出來ません、例へば3戶建とありますが、その3戶の間口が各々どんなになつて居るかに依つて色々な場合を考へられますので具體的な平面圖を御示し願ひたいと思ひます。最後に **問第3** でありますが、この施行令第三條の二の第四號と云ふのは

工場ノ常時使用スル原動機馬力數ヲ增加スル場合ニ於テ增加スベキ馬力數ハ現在地ニ建築スルコトヲ得ザルニ至リタル際常時使用スル馬力合計數ヲ超過セサルコト但シ行政官廳土地ノ狀況、事業ノ種類、作業方法又ハ建築物ノ構造設備ニ依リ特ニ支障ナシト認ムルモノハ此ノ限ニ在ラス

又その令第三條ノ二の本文は

前三條ノ規定又ハ市街地建築物法第四條第二項ノ規定ニ依リ現在地ニ建築スルコトヲ得サル種類ニ屬スル建築物ハ現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル日ヨリ十年間ヲ限リ行政官廳ノ許可ヲ受ケ左記各號ニ規定スル制限內ニ於テ增築、改築、再築又ハ用途ノ變更ヲ爲スコトヲ妨ケス

であります、依つて先づ

（イ）の場合の工場は大正14年5月1日に地域指定の際原動機馬力數により不適格となつたもので、昭和7年2月1日の勅令改正の際に 90 馬力を使用中であれば不適格の繼續でありますから第四號にある「現在地ニ建築スルコトヲ得サルニ至リタル際」は大正14年5月1日であり 40 馬力を超過しない範圍、つまり合計 80 馬力までしか許可されません。既に 90 馬力を使用中でありますから結局今後の原動機馬力數の增加は出來ない譯であります。

次に（ロ）の場合、これはやはり大正14年5月1日には馬力數により不適格工場でありましたが、施行令第三條第一項の改正に依り未指定地域は 50 馬力迄支障ないことになりましたから昭和7年2月1日に於ては不適格工場でなく最早適格工場となつたものであり從つて令第三條ノ二の適用はありません、只前記の改正により 50 馬力までは使用出來ますから、現在 20 馬力を使用中であれば當然合計 50 馬力迄は增加出來ることは申すまでもありません。（以上大阪府建築課査閱濟）

御質問は毎月第二水曜日迄に到着の分は翌月一日附發行の誌上にて御答へ致します。（係委員）

會　　報

常　務　會

時　　昭和8年10月2日午後6時—8時
所　　本協會別室
出席者　理事　片岡　池田　　監事　德政　松室
　　主記　阪口　鳥井　伴野　　主計　浦
　　清水　八木　編輯　新名
議　事　1 協會出品住宅庭園に增植の件
　　1 混凝土骨材試驗用標準篩に關し問合せの件
　　1 會員詮衡
報　告　1 秋季大會並日本東部見學旅行に關する件
　　1 建築學會主催講習會の件
　　1 建築材料陳列場の件
　　1 瑞光住宅博覽會の件

常　務　會

時　　昭和8年10月24日午後6時—8時
所　　本協會別室
出席者　理事　片岡　池田　竹腰　　監事　德政
　　松室　　主記　阪口　鳥井　丹藤　伴野
　　富士岡　　主計　浦　清水　　編輯今林
　　高橋　新名
議　事　1 電線管(銅製)及電線管接手の規格統一に關する意見回答の件
　　1「混凝土骨材試驗用標準篩」に關する意見回答の件
　　1 建築工事の施工請負改變案に關する件
　　1「建築と社會」昭和9年度用表紙懸賞募集に關する件
　　1「續學校建築圖集」刊行に關する件
　　1「市街地建築物法令」第3版刊行に關する件
　　1 會員詮衡
報　告　1 懸賞募集大阪市の「シビック．センター」計畫理想案審査報告
　　1 秋季大會及東部見學に付報告
　　1「建築と社會」11.12月兩月號發行計畫に付報告

會員動靜

入　會　者

會　員

坂永　金重君　港區九條通2ノ646（長谷部竹腰建築事務所）

同　（地方在住）

村上　清一君　福井縣敦賀町東津内

特別贊助員

西岡　隆夫君　東區北濱3ノ13杉本製作所出張所
梁瀨　悟君　西宮市今津町浦風70
宮崎　壽郎君　北區梅田阪神急行電鐵株式會社地所課長

普通贊助員

會我部幸雄君　東成區南中道町1,53
長谷川眞雄君　臺北市御成町5,93
米本佐一郎君　岸和田市別所町天神裏（池田谷建築事務所）
竹尾　秋助君　此花區西島町 224（株式會社西島製作所）
諸木信太郎君　京都市下京區東洞院通五條下ル（建築請負業）

退　會　者

會　員

井上　麟一君　　西田　義雄君

同　（地方在住）

岩谷　禎彦君

特別贊助員

安倍　親雄君

普通贊助員

兒玉　清雄君

社團法人 日本建築協會役員及委員（昭和八年）

役員

会長　安藤　太郎
副会長　實吉純一郎
副会長　造酒藏三郎
監事　吾妻兵治
監事　光信郎
主事　雄三郎
主事　治一郎
主事　助二郎
編輯　編輯　計計記記記事事長
編輯　編輯　計計記記記事事長
評議員　安藤　太郎
同　同　同　

建築會館委員會

雄吾藏夫郎吉尾造夫光吉郎一
武金
井政民達賢米末健悌重藤友口岡
安德谷飯大阪鈴竹波松森山阪富
長事事員
委幹幹委同同同同同同同同
常務
擔

住宅博殘務整理委員會

一郎雄郎郎郎郎郎郎平
五壯一次武彥安知誠政古增
田野葛井林川芝坪德村
長長長
委副委副委

住宅博評價委員會

朗介二郎一
原野熊之篠崎須川山井
笠壯一
小葛北垣
委委委委委委

阪和上野芝住宅博殘務整理委員會

實雄助介郎平
池田
安井武
浦英
北垣熊之
佐藤松太
增山新
長委員長
委員
同同同

阪和上野芝住宅博評價委員會

朗介二郎平雄
原
笠
小北篠崎須川山井
熊之
原太
新
武
安
委同同同同同同

建築會館委員會

郎術新平郎男雄郎二一
太保治太喜義太盛茂
宗
東尾村見廣登榮
伊岩河田玉石村山木中
久兒白中中八山
（以上側工商西關）

則雄一一一
顯定景正徹
部內中木上
岡木竹藤村
（以上側工業德島）

瑞光住宅博委員會光

一郎良郎郎治八藏一男重尾夫二三一
五壯一次正五正儀福寬喜知末悌榮貞重
田野西藤谷塚本上村石田木江水野岡
武葛小佐澁古松井木白芝鈴波清伴富
長長事事事事事員員
委副幹幹幹幹委同同同
常務
擔

見學委員會

光知廉良三吉二雄郎雄
重芳一來藤誠貞太良
室原田保西木本藤樂口辰藤
松大久小三森加設樋丹
長事事事事員
委幹幹幹幹委同同
常務
擔

出版委員會

二郎吉夫郎弓郎治吾信治
厚一藤種太眞六正藤榮
井川藤名原澤西塚野橋高
藤石落新篠瀧中古村南
長員
委
同同同同同同同同
常務
擔

藏平修郎郎二郎八信雄
金新一太衆太儀義
野山松安益源村本
淺增赤小河篠中松南
事事員
幹幹委同同同同同
常務
擔

百貨店建築委員會

雄吉一世則茂郎治吾吾郎三
武藤誠貞顯次正藤圭彥貞
井藤井柳部田豐塚野部林野
安落坪青岡黑玉古村渡今伴
長事事員
委幹幹委同同同同同同
常務
擔

會員委員會

實郎郎郎吉二憲郎郎一八治
太三三久一定三五一重儀長
田彥友谷勇誠岡井谷澤士本本
宇林倉脇田口田
古今大山池川籠酒澁中富松宮
長事
員
委幹同同委同同同同同同同
常務
擔

分科委員

世一一茂吉保郎吾
貞新寬惣六藤
柳谷村田路尾
青神木黑鹽中中村
（以上側大早）

助朗研武次吉鑿吾薰三武
之英原澤藤澤興田政田村村
浦小黑國末高津德友中藤
（以上側學院工）

藏三
福寬
上川
井石

建築倶樂部室

倶樂部案內

開館時間　午前9時より午後9時迄、但特別の場合には延長致します。

娯樂設備　圍碁、將棋、麻雀、コリント・ゲーム等

圖　書　各新聞官報類約二十種、雜誌類六十種其他の圖書も多數備へてあります

撞　球　5階の朝日クラブの玉臺が簡單に使用されます。御希望の方は受付より入場券を持參され度し。

理　髮　5階の阪井理髮店と特約して本クラブのマーク佩用者には特別割引があります。

諸研究會

圍　碁
本本二段　毎週土曜午後より9時まで

南　畵
太田先生　毎月第1第3火曜午後6時より。

俳　句
月斗先生　毎月第1第3木曜午後6時より。

骨　相
砂川先生　毎月第2第4木曜午後6時より。

謠　曲　觀世流松下先生　毎週火曜日夜（稽古場は曾根崎演舞場横）

長　唄
杵屋和津次師　毎週2回、近く開始の豫定(稽古場選定中)

十一月カレンダー

2日　木　俳句研究會
4日　土　圍碁研究會
7日　火　南畵、謠曲
1日　土　圍碁究研會
14日　火　謠曲研究會
16日　木　俳句研究會
18日　土　圍碁研究會
21日　火　南畵、謠曲
25日　土　圍碁研究會
28日　火　謠曲研究會

十月の催事

十月七日の伊丹町東洋リノリウム工場見學及寶塚觀劇會は、折惡しく雨天でありましたが、參加せられし會員は40餘名定刻工場寺西常務よりリノリウムに就き有益なる御說明を聽き、11時30分迄各工場を懇切なる御案內と御說明により見學を了し、同社階上に於て中食の御接待に預り、一同滿足裡に12時半同工場を辭し特別仕立のバスにて寶塚迄雨中の秋色を勝しつゝ、午後1時半大劇場着直に觀劇をなし、午後5後半盛會裡に無事終了解散。一同は三々五々入浴に食事に亦は舊温泉に遊ぶ者其他思ひ思ひの行動に移りました。

當日寺西常務の御說明中リノリウム原料の內アマニユム油の偉大なる効力、耐久力、防熱、殺菌及此原油が日本固有（昔の名物たりし伊勢の火の用心煙草入れの原料即ち此の油の起源の由）でありしを、反つて外人に研究發見されて逆輸入せし事や、大震災當時の耐熱の實物や、或は保存上リノリウム油を塗布する要なく、水掃きが有効にて油は特別のヨゴレを取るものなど誠に益する處多く、會員の內より百聞は一見に如かずの悅びを受けました事を主催者として嬉しく感じました。

此機會に特に同工場及當日御配慮賜りし寺西加藤兩常務、外御一同に對し深甚の謝意を表します。

尙此催事は日曜日は同工場が休みの爲め、餘儀なく土曜にしまして他の希望者に御不滿を與へた事をお詫申します、と同時に雨天の中にも不拘出席せられた熱心な方に對し御禮申します

建築倶樂部室

雜　報

コリントゲーム

前號紹介の通り一臺は適當御身受下さる方をお待ちしてゐます。

南畵研究會員を募る

南畵の稽古は始めるとなかなかに味のあるものですが、一寸入り難い樣に思われ勝です。併し始めて見ますとそんなものではなく氣樂に出來るものです。

此際初心の方の御入門を歡迎します。どしどし御申出あらん事を。

骨相研究會員を募る

第一期生は十月を以てめで度終了、熱心な人は看板を掲げ樣かと一廉の先生氣取の人もあります。

第二回講習會を開始いたします。人の相を見ると云ふよりは人を採用する場合の適不適、妻や嫁の幸不幸自己の修養に、旅立に商取引に病氣の有無、財の集散災厄に、其他世事人情萬端を知る事が僅一年にして而も低廉なる會費で修得する事が出來ます。御希望の方は此際至急御申出下さい。

クラブ擴張の事

プラン其他が大變遲くなりましたが十一月中には愈々着手の事になりました完成の日をお待ち下さい。

俳　句　會

十月、中の九日定例句會は同人社よりも月村蓼井、方樹、石麻の諸先輩會せられ、亦一二婦人の方も研究員に加わられ大變賑かでありました。

秋漸く深く句會に好き候となりました。此際初心者の御加入を希望します。

當日師の選句を列記します。

月斗選

長き夜の碁盤を運ぶ廊下哉　方樹
長き夜や心耳を雨にあつめゐる　同
秋の山へ油を買うて戻りけり　同
門の菊畑の菊や明治節　月村
猪の荒せし道や秋の山　同
あさやけの野に聳へたり秋の山　蓼井
駕を停めて暫し眺めつ秋の山　同
秋山に陰して雲の走りけり　麻姑
長き夜を逢にゆづらぬ異論哉　同
ケーブルの下り恐ろし秋の山　靜所
膝の上の絲屑拂ふ夜長哉　北柿
よく似たる足音消えて夜長哉　花洞
雨にぬるゝ橋の燈に夜長哉　初子
一筋の道頂上へ秋の山　榮治
などて世の騒然たりや明治節　石麻

月斗師稿

旭日昇天菊を薫ずる明治節
こと多くなるにつけても明治節
明治節ひとり日本のものならず
滿園の菊に朝日や明治節
明治節明治の遺臣誰々ぞ
明治節國たみ菊に眼覺めよや
日月と輝くこの日明治節

會員の聲

1. 工場見學は非常に有益賛成なるも、日曜以外朝より催さるゝは勤人には參加出來ず、なるべく土曜の午後を希望します
2. 家庭的な趣味の會合を作つては如何、例へば園藝の如き
3. 材料商店として倶樂部に加入し店員又は社員が倶樂部員の如く入室するは如何かと存じ候會社なり商店の加入があるや否や存じ申さず候へ共若しあれば代表者のみ倶樂部員として取扱ふ必要有之候
4. 工場見學等は誠に結構な思付と思ふ特に倶樂部室を餘り利用せない人達には尚更だと思ひます
5. （防音裝置完全の電話室の設備を願ひ度いです）くらぶの電話を利用（惡用か）して商取引をせらるゝ方のありますのは或意味にては、くらぶ繁榮の因をなすべく結構のことかも知れませんが時としては何事か大聲叱呼先方を罵り或は督促之れ急に或は手配の不結果を叱咤する等他のくらぶ員の存在を無視すること然も相當長時間に連斷數回に及ぶ時あるを屢々實見します爲に室内不愉快の空氣に滿さるゝことを避けたいと存じます

編　輯　後　記

□朝寒に初霜にだんだん深まり往く秋、自然の織りなす工作はその錦繡を繰りひろげてくれる、非常時にも矢張秋は闌だ、菊も薫つてゐる、我等の好きな明治節もすぐ目近だ!!

□本月は滿洲建築號です、滿洲國も開國二年、凡ゆる點に於て提けいの日滿、關心の多き彼我の交涉、その中に建築方面の提けい握手こそ我等の任務、そして建築を主として最近の滿洲の事情を紹介したのが本號である。今後も機會ある毎に斯う云つた特輯を出す積りだ。

□松室氏の記事は同氏が四會建築大會へ本會を代表し、又かつて數年間彼地へ在任されたこと等から、大會の模樣、旅行記の微に入り細を穿つ此人にして初めて書き得る大文字であらう、その遠大なる抱負、熱烈なる意見等章中隨處に見る、まことに愉快である。

□岡氏は滿洲建築協會の會長でその工業移民論は內地建築關係者に反省三思を促すもので、同氏の祖國建築家を憶ふ實に我意を得たる大論文である。

□村田氏の滿洲の建築史に就て造詣の深いことは茲に喋々を要せない、滿洲古建築の展望、その懇切なる解說は氏の該博さを知り諸君の必讀を望む、なほ滿洲著名建築グラフに就てはその選定、解說など特に同氏を煩したことに對し深謝す。

□小黒氏は滿洲土木建築業協會の常務理事で彼地業界に明るい人である、その業界の現狀を明快且つ親切に述べられた點內地建築家は勿論業者の多大の參考となり、指針ともならう。

□永瀨氏は滿洲見學に參加し親しく實地見聞をした人でそのこく明な視察記に敬意を表す。

□新京に於ける新建築を出來るだけ多く紹介する筈で、相賀兼介氏にその寫眞、圖面計畫案等を依賴し既に承諾を得てゐたのであるが、如何せん遠地のこと殊には同氏忽忙の折柄、締切を過ぎて待つてゐたがまだ到着せないので次月號に割愛した、この點特に相賀氏の諒解を得たい。

□別項會告の通近く「續學校建築圖集」と「市街地建築物法令」とを刊行する筈である。前者は前月本誌で發表外の資料をも纏め 40 校餘を整理編纂した約 200 頁のもので、後者は好評を受け忽ち二版を賣切つたものを更に三度版を重ぬるもので、兩者とも充分なる自信を以て諸君へお薦めする。

□昨年休んだ本誌表紙の懸賞を本年募集する。規定は大體例年の通であるが（規定は別項發表）今回は特に背の意匠を含め、應募者の資格を本協會員に限定した、會員諸君の盛なる應募を望む。

□さる15日から 3 日間に互つて行れた秋季大會を兼た記念東部（東京方面）見學旅行は參加者60名と云ふ文字通り大擧して上京した、それだけ建築學會へは迷惑をかけたわけでした、しかし學會の懇切を極めたるプログラムによつて無事愉快に歸阪し得た、建築學會の多大なる厚意を謹んで萬謝す。

□次號は本會常設委員會の報告を揭載して本年の終號とする豫定である。（鷹取）

本誌執筆者紹介

岡　大路氏	工學士　東京帝國大學建築學校卒業 南滿工業專門學校々長、滿洲建築協會會長
小黒隆太郎氏	滿洲土木建築業協會常務理事
永瀬狂三氏	工學士　東京帝國大學建築學科卒業、京都工學校校長 京都高等工藝學校講師
內藤太郎氏	工學士　東京帝國大學建築科卒業 陸軍技師、陸軍省經理局勤務
松室重光氏	工學士　東京帝國大學建築學科卒業、本協會監事
村田治郎氏	工學博士　京都帝國大學建築學科卒業 南滿工業專門學校教授

建築と社會

第16輯第11號

毎月1回1日發行　定價　1册 .50圓(郵稅2錢)　12册 6.00圓(同 24 錢)

昭和8年10月25日印刷　昭和8年11月1日發行

發行・編輯　鷹取陽
印刷人　西宮市今津町大字浦風56番地
印刷所　大阪活版所　大阪市東區內淡路町1丁目7番地
發行所　社團法人 日本建築協會　大阪市北區中之島3ノ3朝日ビル　電話長本局(23)4500番(6)　振替口座大阪39.975番
特約販賣店　柳々堂書店　大阪市西區京町堀羽子板橋北　電話土佐堀 2440番　振替口座大阪 2084番

禁轉載

本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告掲載料金

普通	1頁	1回	15.00
普通	½頁	1回	8.00
普通（前附第1頁）	1頁	1回	45.00
普通（前附第2頁）	1頁	1回	40.00
普通（後附第1及最終頁）	1頁	1回	25.00
アート（中挿）	½頁	1回	20.00
表紙2	1頁	1回	60.00
表紙3	1頁	1回	45.00
表紙4	1頁	1回	80.00
建築事務所錄	1欄	1回	1.50
(建築關係業者案內)	1欄	1回	5.00

御注文

御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

會　　告

本誌殘本分讓

今回本誌「建築と社會」の第7輯第1號（大正13年）より第15輯第12號（昭和七年）までの內で殘本あるものを整理することになりました、就ては會員並に讀者諸君にして御入用の方には普通號特價1冊10錢送料2錢特別號は特價1冊20錢送料3錢で御頒ち致しますから本年11月末日までに御申出を願ひます

普通號　特價　1冊　10錢　送料　2錢
第7輯第1號～第15輯第12號（特別號を除く）

特別號　特價　1冊　20錢　送料　3錢
最近建築研究　Ⅰ（第15輯2號）
同　Ⅲ（第15輯11號）

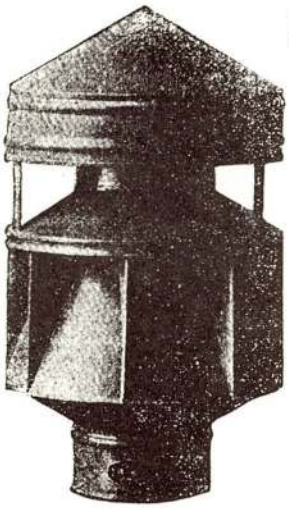
殘本なきもの（絕版）

第7輯	10號	（大正13年）
第8輯	1號及2號	（大正14年）
第9輯	1號～8號	（大正15年）
第12輯	1號～3號及5號	（昭和4年）
第13輯	8號	（昭和5年）
第15輯	7號及6號	（昭和7年）

昭和8年11月

社團法人 **日本建築協會**

定評アル特許宮島式排氣頭



（固定形）

排氣換氣ハ
健康ノ基
排氣頭ノ
眞價ハ
排氣量ニアリ

（本機ハ吸入器ノ原理同用ノモノニ付効果確實ナリ）



（風向變換形）

特許 第一二五八二七號
第一二三一九六號
第七三三四六號
第七三三六〇號

特許 第一一一〇〇七號
第一四二七四九番
第一四二七五〇番

諸官省御用

負請事工生衛ブイプニ並付取及賣販頭氣排

宮島康夫商店

東京市赤坂區青山北町一丁目四番地（神宮外苑入口）
電話青山(36)四七二二番 振替口座東京五八四七番

カタログ進呈

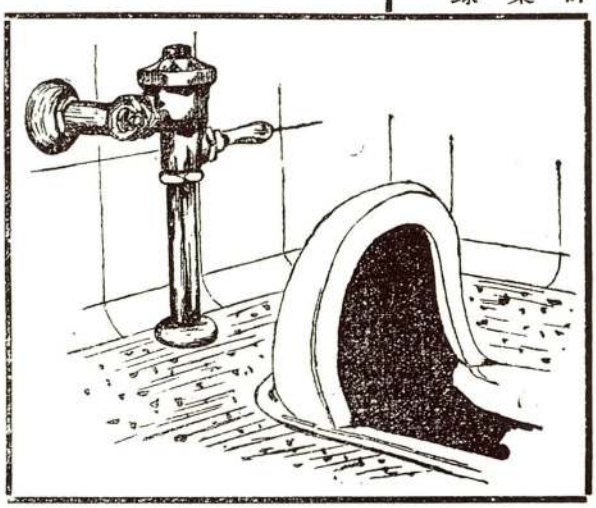
ヨネ フラッシュ バルブ

水洗便所洗滌弁

專賣特許
實用新案
商標登錄

御指定

大藏省營繕管財局
東京帝國大學營繕課
大阪府營繕課
兵庫縣營繕課
大阪市建築課
名古屋市營繕課
南滿洲鐵道株式會社
臺灣總督府營繕課



米本榮商店

大阪市北區梅田新道
太平ビルヂング四階
電話北八一八番
振替大阪四八二七番

建築と社會第16輯第11號　廣告索引

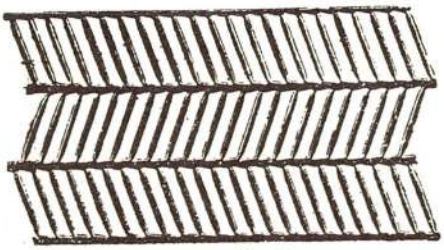
ア　旭硝子株式會社……31
　　淺野スレート株式會社……16
　　淺海商店……22
　　阿部鐵工所……38
イ　岩元商會建材部……22
　　岩城硝子製造所……34
エ　榮進社……15
　　英進商會建材部……36
オ　大阪窯業セメント株式會社……中挿
　　大阪伊丹商店……12
　　大野製作所……表紙 2
　　奥村重兵衛商店……17
　　押谷商店……36
キ　木下謹三商店……12
　　桐田商會……27
ク　黒川化學工業所……10
　　久保商店……34
ケ　建盛商會……28
コ　工材社……30
サ　三稜社……27
　　佐渡島商店……35
シ　三共株式會社……7
　　信友堂書店……2
　　住宅改良會……3
ス　須賀商會……25
セ　千歳木材工業所……8
タ　田中タイリング……4
　　田中商會合資會社……11
　　田中昌司商店……2
　　田村商會……40
ダ　ダンロップ護謨株式會社……中挿
　　大　丸……表紙 4
チ　チヨーホー商會……28
ト　東洋リノリユーウム株式會社……32
　　東洋陶器株式會社大阪出張所……20
　　東京電氣株式會社……7.6
ナ　内外土木建築材料合資會社……32
　　南滿鑛業株式會社……18
ニ　日本ペイント株式會社……23
　　日本建築紙工株式會社……27
　　西原衛生工業所……19
　　西孫南店建築金物部……21
　　日本金具株式會社……中挿
　　日本鋼製建具株式會社……37
ヌ　布卯材木店……4
ノ　野澤幸三郎商店……26
ヒ　平松釣戸車製作所……39
フ　藤田商會……14
　　福島合名會社……42
マ　マルエス工業株式會社……9
　　丸善株式會社……1
ミ　ミナト製作所……10
　　三井物産株式會社……13
　　宮島康夫商店……41
ヤ　矢橋大理石商店……14
　　山本窯業商店……18
　　山本東作商店……39
ヨ　横河橋梁製作所……24
　　米本榮商店……41
レ　玲光社(木内眞太郎)……30

高級壁下地材料

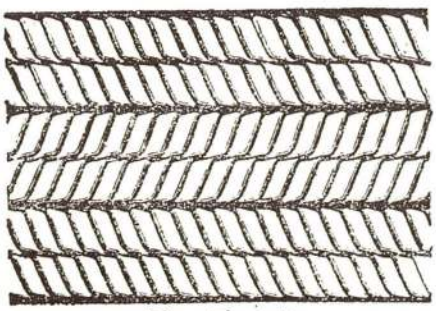
特許

ヤハズラス

（原名　ヘリングボーンラス）



シングル



ダブル

◇特徴

一、網目の刻み方が最も合理的でモルタルとの流行渡りに留意されてあるのでモルタルの訓染良く施工が極めて容易で而かも耐久力強大であります

二、リブ面共に比較的平坦にして塗る方のが、しにし狀支タむにでゐ起度四には乾モルタルを落無るしに十對

三、網目の刻み方が最も合理的でモルタルとの流行渡りに留意されてあるのでモルタルの訓染良く施工が極めて容易で而かも耐久力強大であります

四、部あ生面共比るれ經の必餘部、り濟で要裕に兩りずに收率とがた

五、單蕾、り重ま且蛍重ま繼ねつらるれ目すぎのでで合完す簡が様普せ全

に重ね目の高さに合せて塗る必要なくモルタルを非常に節約する事が出來ます

關西一手販賣　福島合名會社大阪支店

大阪市北區堂島ビルヂング　電話北五八九〇番